カラヴァッジョを訪ねて
（イタリア美術探訪　１９９９）
pdf 版

平成１２年１２月２３日
平成15年2月2日(pdf化)
阿 部 敏 雄(敏翁)

この旅行記は、平成１１年(１９９９)５月１９日から６月７日までイタリアを旅行(レンタカー使用は８日間)したときのもので、　本テキストの原文は、パソコン通信ネットNifty-SERVEのＳＩＧ　FEURO のイタリア」会議室に掲載したものですが、それを主体としてそれに画像を加えて纏めました。
尚、「敏翁」は、小生のニックネームです。

目　次
(見たいところをクリックすればそこにジャンプします)

Ⅰ．概要 2
1.1 旅のアウトライン .....
1.2 概略行程表 .....
1.3 持参した主な物 .....
Ⅱ.カラヴァッジョ .....
2.1 カラヴァッジョおよび関連する画家達 ....
2.2 カラヴァッジョとは .....
Ⅲ．ミラノ .....
３．１パソコン通信など .....
３．２アンブロジアーナ絵画館 .....
３．３ブレラ美術館 .....
３．４パソコン通信（２） .....
３．５サンタ・マリア・ブレッソ・サン・チェルソ教会 .....
３．６サンテウストルジョ聖堂 .....
３．７サン・ロレンツォ・マツジョーレ聖堂 11
３．８スフォルツァ城 11
Ⅳ．ブレシア 13
４．１トジオ・マルティネンコ絵画館 13
Ⅴ．オルタ・サン・ジュリオ(Orta San Giulio) 14
Ⅵ．ヴァラッロ(Varallo) 17
Ⅶ．ナポリ(Napoli) 21
７．１国立考古学博物館 22
７．２．カポディモンテ美術館 23
Ⅷ．ポンペイ 25
Ⅸ．ナポリ(再) 29
9.1 ピオ・モンテ・デッラ・ミゼリコルディア 29
Ⅹ．カプリ島 32
ＸＩ．シチリア 33
１１．１カラヴァッジョとシチリア 33
１１．２パレルモ 33
モンレアーレ 34
州立考古学博物館 35

Quattro Canti 37
１１．３メッシーナ 38
州立博物館 39
１１．４シラクーザ 41
州立パオロ・オルシ考古学博物館 41
州立美術館 44
ギリシャ劇場 46
１１．５シチリア以降のカラヴァッジョ 47
ＸⅡ．ローマ 48
１２．１テルミニ駅近辺 49
１２．２ドーリア・パンフィーリ美術館 50
１２．３コルシーニ宮 51
１２．４ボルゲーゼ美術館 52
１２．５サンタ・マリア・デル・ポポロ教会 58
１２．６サンタゴスティーノ教会 63
１２．７サン・ルイジ・デイ・フランチェージ教会 64
１２．８サンタ・スザンナ教会 67
１２．９サンタ・マリア・デッラ・ヴィットリア教会 68
１２．１０国立絵画館 69
１２．１１サンタ・マリア・デッラ・コンチェツィオーネ教会(骸骨寺) 70
１２．１２スペイン広場周辺 71
１２．１３カラヴァッジスティ 72
ＸⅢ．まとめ 74

第一報（#15585）　　敏翁

Ⅰ．概要

1.1 旅のアウトライン

昨年も、この季節３週間ほどローマから北（ミラノを除く）を回りましたが、今年も１９日から約３週間ミラノとその周辺ーー＞　ナポリとその周辺ーー＞シチリアーー＞ローマと回ってきました。

今回の訪問地をつなぐ縦糸は、カラヴァッジョです。
昨年見てカラヴァッジョがすっかり気に入り､少し調べた結果に基づいてイタリアにある彼の画のほとんどを見てみようという計画を立てました。（結果的にはいろいろあって計画した中で６枚が見られませんでした）
日本でのカラヴァッジョの人気は「いまいち」ですが、ヨーロッパでの人気は大変なものです。なにしろイタリーでは１０万リラの顔になっているのですから。

ミラノとその周辺に彼の画と彼に影響を及ぼした画家たち（モレットなど）の画を訪ね、ナポリ、シチリア、ローマと彼の画を見て回る旅でした。
また、カラヴァッジスティ（カラヴァッジョ派）の画が、ナポリ、シチリアには沢山あるのでそれらを見るのも楽しみでした。

1.2 概略行程表

日	曜	主要訪問先	泊
５月１９	水	成田--(air)--> ミラノ	ミラノ*
２０	木	ミラノ	ミラノ*
２１	金	ミラノ	ミラノ*

	２２	土	ミラノでレンタカー借りる　ブレシア	ブレシア
	２３	日	ブレシア　オルタ・サン・ジュリオ	オルタ・サン・ジュリオ
	２４	月	ヴァラッロ	ヴァラッロ
	２５	火	ミラノ（車返す）--(air)-->ナポリ	ナポリ*
	２６	水	ナポリ	ナポリ*
	２７	木	ポンペイ	ナポリ
	２８	金	ナポリ、カプリ	ナポリ
	２９	土	ナポリ--(air)-->パレルモ（車借りる）	パレルモ*
	３０	日	パレルモ	メッシーナ
	３１	月	メッシーナ　シラクーザ	シラクーザ
６月	１	火	シラクーザ　カターニア（車返す）--(air)-->ローマ	ローマ*
	２	水	ローマ	ローマ*
	３	木	ローマ	ローマ*
	４	金	ローマ	ローマ*
	５	土	ローマ	ローマ*
	６	日	ローマ--(air)-->	
	７	月	--(air)--> 成田	

*：日本でホテル予約済み。　他は現地で申し込み。

1.3 持参した主な物

【1.3.1 書籍類】

1 ミシュラン・グリーンガイド 「イタリア」　本文ではミシュラン・グリーンと略記する。
2 ミシュラン・レッド　Italia　1999　ミシュラン・レッドと略記。
3 イタリア旅行協会公式ガイド　１．ミラノ　イタリア北西部
4 同上　２．ナポリ　シチリア　3, 4 は「公式ガイド」と略記。
5 個人旅行 「イタリア」　昭文社　「個人旅行」と略記
6 ジョルジョ・ボンサンティ「カラヴァッジョ」東京書籍　ボンサンティ「カラヴァッジョ」と略記。
7 新伊和辞典　白水社　7 コンサイス英和辞典　三省堂

【1.3.2　Libretto】

今年も、 Libretto に情報を詰めての旅です。 Libretto へのデータの溜め込み方については昨年の第一報に記して ありますが、此処には初めての方も大勢居られると思い再録（多少異なる）します。

私の主パソコンは、NEC PC9821 Xa10(Pentium 100MZ　Windows95　）ですが、これにスキャナー、画像圧縮ＪＰＥＧソフト､ＯＣＲソフトをつけて、今回の旅に関係しそうな書籍の画、文章を片端から取り込み、それを、MO を経由して、Libretto に読み込ませるというものです。

去年読み込んだものは殆どそのまま残っていますが、今年新たに読み込んだものは次の通りです。

１ ミア・チノッティ「カラヴァッジオ　生涯と全作品」岩波書店　1993
の部分と図版。　チノッティ「カラヴァッジオ」と略記。

２ ロベルト・ロンギ　芸術論叢　ーアッシジから未来派までーＩ
岡田温司監訳　中央公論美術出版　平成１０年９月３０日発行
第２章　カラヴァッジョ問題ーーその先駆者たちーー（１９２９）抄 の部分と添付図版　「ロンギ」と略記。

３ 世界美術大事典　全６巻　１９９０　小学館　の「モレット」、「フォッパ、ヴィンチェンツォ」、「モローニ、ジョヴァンニ・バッティスタ」、「ロット、ロレンツォ」、「サヴォルト、ジャン・ジローラモ」、「カンピー族」、「フェッラーリ、ガウデンツィオ」の項目　「美術大事典」と略記。

以上はすべて神奈川県立図書館にあるものです。

【1.3.3 カメラ】
今年は、オリンパスのデジカメ一台だけにしました。
２００万画素、３倍ズームの機種 CAMEDIA C-2000Zoom が現れたので、購入しました。
この機種は、記憶媒体スマートメディアの３２ＭＢまで対応しているの　ですが、３２ＭＢ品は品薄で入手出来ず（帰国後やっと入手）１６ＭＢを常用しました。（標準装備は８ＭＢ）
これで１０２４ｘ７６８画素で７８枚撮れるので、毎日撮った画像は、夜ＰＣカード経由で Libretto　に流し込みました。

Ⅱ.カラヴァッジョ

2.1 カラヴァッジョおよび関連する画家達

カラヴァッジョ及び関連係する主な画家達の生没年を以下に記します。

【2.1 プレ・カラヴァッジョ】
フォッパ　（ブレシア　１４２７～１５１６）
モレット　（ブレシア　１４９８～１５５４）

【2.2 カラヴァッジョ】　　（ミラノ１５７１～ポルト・エルコレ１６１０）

【2.3 カラヴァッジィスティ（カラヴァッジョ派）】
オラジィオ・ジェンティレスキー　　（１５５０～ロンドン１６３９）
アルテミージャ・ジェンティレスキー　　オラジオの娘
（ローマ１５９３～ナポリ１６５２／３）
バッティステーロ・カラッチョロ　　（ナポリ１５７８～１６３５）
ジュゼッペ・デ・リベラ　　（１５９１～ナポリ１６５２）
マッシィモ・スタンチィオーネ　　（１５８５～１６５８）
スルバラン　　（１５９８～１６６４）

2.2　カラヴァッジョとは

以下ボンサンティ「カラヴァッジョ」による。例によって、私の手で大分勝手に省略してある。
『文化、芸術の歴史のなかには、その発展の通常の速度を速めるような人物が何人かいる。
西洋美術史上で、とくに絵画にかぎってそのような例を挙げるならば、**ジョット**（１２６７－１３３７年）と**マザッチョ**（１４０１～２８年）の場合がそれに当たる。この２人のあとでは、おそらく**カラヴァッジョ**が唯一この数少ない系譜のなかにはいると言っていいだろう。あるいはそれに**セザンヌ**（１８３９－１９０６年）を加えていいかもしれない。
カラヴァッジョ（本名ミケランジェロ・メリーシ）は、１６世紀末から１７世紀の初頭にかけて、その後のヨーロッパ絵画史を塗りかえるほどの革新的な作品を次々に制作し、波瀾万丈の生涯を送った。
透徹したリアリズムと劇的な明暗法を特徴とするカラヴァッジョの作品には、いずれも官能性と深い宗教性が漂い、１７世紀ヨーロッパのさまざまな画家たちに多大な影響を及ぼした。
しかし彼自身は数多くの不祥事を起こした末に殺人を犯して逃亡生活に入り、悲惨な末路を辿る。享年僅か３８歳であった。』

『カラヴァッジョが１５９０年代の初めに画家として独り立ちしたころ、イタリアはもちろん、その他の地域でも、後期マニエリスムの様式が支配的だった。
当初はポントルモ（１４９４－１５５６年）らが大画家の様式に反抗し、それを乗り越えようとしていたが、やがてその力も衰え型にはまった様式に陥り、そのため芸術を発展させていく重要な緒を見出すことができなかった。
しかし１５７５年ころから世紀末にかけ、後期マニエリスムに対して反抗する何人かの指導的な画家が、しだいに現れてきた。
ボローニャでは、普遍的な価値をもち威厳ある気高い理想に、ふさわしい絵画を求める古典主義様式を流布させようと、カ

ラッチ一族が１６世紀初頭の模範的な作品、とりわけラファエロから直接学ぶ必要性を説いたのである。
アンニーバレ・カラッチ（１５６０－１６０９年）のあとに出てきたドメニキーノ（１５８１～１６４１年）、グイド・レーニ（１５７５－１６４２年）、ジョヴァンニ・ランフランコ（１５８２－１６４７年）、グエルチーノ（１５９１－１６６６年）ら、エミリア地方の画家たちは、ひとり残らずローマに行って制作し、彼らの芸術上の信条を広く流布させることになった。
カラヴァッジョの絵画もまた、マニエリスムに対する反抗として生まれ、まったく新しい道を切り拓いて絵画の発展を促した。
しかし彼の向かった方向は、自然主義の道であった。　彼が考え出した具体的な絵画上の解決方法を見ても、彼はジョットとマザッチョに繋がっている。
彼の自然主義的な芸術観は、もちろん部分的ではあるが、彼の生誕地であり芸術形成を行った北イタリア、ロンバルディア地方の重要な絵画作品からきている。
ミケランジェロ・メリーシ（カラヴァッジョ）はミラノに生まれたが、ローマに出るまで父親の故郷カラヴァッジョ村に住んでいた事もあったらしい。　（カラヴァッジョ村はミラノとブレシア<約８０ｋｍ>の丁度中間にある。）
したがって彼の絵の修業はロンバルディアでなされていたのであって、だからこそ彼は、最近、研究者がロンバルディア地方特有の芸術表現と認めたリアルな細部描写の方法を会得していたのである。すでに１４世紀末から１５世紀の前半にかけて、ロンバルディア地方の後期ゴシック様式は、事物の直接的な観察に細心の注意を払うという点で群を抜いていた。
そしてこうした傾向が後に受け継がれ、発展させられて、ルネサンス期にブレーシャの大画家ヴィンチェンツォ・フォッパがロンバルディア美術のひとつの基礎を築くまでになった。つづく１６世紀には、ベルガモで長いあいだ制作活動をしていたヴェネト地方のロレンツォ・ロット（１４８０頃一１５５６年）をはじめ、ジロラモ・サヴォルド（１４８０頃一１５４８年）、ロマニーノ（１４８４頃一１５５９年）、モレット（１４９８－１５５４年）、ジョヴァン・バッティスタ・モローニといった画家たちを通して、自然に対する飽くなき好奇心が培われた。
しかしその好奇心は、昆虫学者のような客観的な見方ではなく、むしろ本来の字義どおりの、対象への共鳴や共感に近いものであった。事物と自然光や人工光線との関係、画面を構成し輪郭をはっきりさせる彩色技法に注がれた神経の細やかさなどは、すべてカラヴァッジョが出身地ロンバルディア地方の伝統から得た要素であった。上記の画家たちがロンバルディア地方のミラノとその東のヴェネト地方とのあいだに位置するベルガモとブレシアで制作活動をしていたことと、カラヴァッジョの芸術形成とは無関係ではなかったのである。
もっともカラヴァッジョはこれらの要素を、その限界をはるかに越えて劇的に発展させていくことになるのだが。』

次に世界美術全集　１１　カラヴァッジョ　解説＝若桑みどり 編集＝座右宝刊行会 発行＝集英社　１９７８年発行　の中にある　作家論　ーーカラヴァッジョの殉教ーー　若桑みどり の 序章　「カラヴァッジョとその時代」 からの抜粋でカラヴァッジョを紹介してみたい。

『カラヴァッジョの手にかかると、マグダラのマリアはローマの町の女になり、聖ペテロはローマを歩いているフランシスカン派の裸足の修道僧に、マリアさえもが、苦労のあげくに息子に先立たれた貧しい中年女になり、そしてイエスその人は、ひたすらに自分を卑しくする、謙った、弱々しいまでに善良な、痩せこけた貧弱な受難者になってしまうのである。そしてこのような胸をうつ自然なドラマは、どこにでも、いつでも起こりうるものとして、カラヴァッジョが生きたローマ１７世紀の場末の、居酒屋のようなところで起こっており、さらに驚くべきことには、画面の登場人物たちも皆、そのころのローマの町をうろついていた人物たちと同じコスチュームで、少しも気高くはなく、理想化されてもいない。

１７世紀の初めに、カラヴァッジョが、生まれて初めて**《聖マタイの召命》**をローマの教会に描いた時、記録によると、ローマ中の人がそこへ押し掛けて、押すな押すなの騒ぎを演じたということである。
その最大の理由は、それが、そのころまで人々の馴れ親しんでいた観念的な宗教画とは非常に違っていて、もの珍しかったためである。
一見したところでは、それは居酒屋か、ローマの貴族の邸によくある家来たちのための薄汚ない地下の控えの間のような所で、テーブルには賭事をしている最中らしく財布や銅貨が飛び散っていて、当のマタイもその仲間に加わっている。
扉が開いて、外の光がほんの少し、暗い室内に入り込んだ。来たのは誰だろう。
訝しげに振り返る若者の目には、よく相手が分らない。入ってきた男はじっと手を延ばして、真直ぐにマタイを指している。光がマタイの上に落ちている。暗くありふれた地下室の中にうごめく、ありふれた人間たち。
そのありふれた現実に光が落ちて、常ならぬものが感じられる。イエスは、ふいにやってきて、マタイに「わたしについて

きなさい」と、口語で言ったのである。どんな人でも、そこに描かれていることが、目の前に起こっていることを納得するだろう。
そこには、遠近法はない（カラヴァッジョは、ただの一度も広い空間を描かなかった）が、人間の住むスペースがあり、自然の空気がある。我々と同じ等身大の俗人が、人間的なスペースのなかで、神的なものと出会っている。しかしこれは、神との「日常的な」出会いである。（中略）
　ルネサンスの聖人聖女やキリストは、形こそ完璧に美しいが、皆のっべりとして無表情である。完璧な美しさというものには、いささかも「時間」の歪みがあってはならないし、誰かに“似ている”などと思われることは、理想化の邪魔になる。その完璧な世界は閉ざされていて人は入って行くことができない。
　ところが**バロック**の聖人は、悲しんだり、喜んだり、泣いたり、叫んだりしている。バロックのマリアは、にっこりと笑いかけているし、マグダラのマリアは髪を振り乱して泣き叫んでいる。泣いたり、笑ったり、怒号したり、苦悶したりする「表情」の演出が、バロックの最も重要な目標だった。人々は画中の人物と共に泣いたり、笑ったりして、終りには天国へと、輝きながら迎え入れられるのだが、それは、この偉大なる「演劇」の世紀のすべてを包んでいる、情動主義の一つの現われであった。
　その意味では、カラヴァッジョと共に、バロックのなお二人の創始者、アンニバレ・カルラッチとルーベンスも同じ役割を果たした。彼ら三人が、宗教を「人間劇」化した。その後を継ぎこの人間劇を、建築、彫刻をも含めて宇宙的劇場にまで拡大していったのが、盛期バロックの代表者、ベルニーニであった。』

第二報（#15665）

Ⅲ．ミラノ

【５月１９日（水）】

　午後８時半ミラノのホテル　Royal Mercure　４星に到着。
　ホテルはミラノ中央駅から徒歩１０分のところにある。
　大きなバス、冷蔵庫付き。電話は、モジュラージャックが使える。
　ミシュラン・レッドには、部屋でモジュラージャックが使えるかどうか表示されているが、ミラノのホテルでは、使えるホテルがかなりある。
　ちなみに帰国してから、１９９７年版のフランスを見てみると使えるホテルは殆ど無い。（昨年のイタリアはは買って無いので不明だか、直接モジュラージャックが使えるところは無かったように記憶している）
　これだけでは簡単に言えないが、今年の状況(かなり使えるところがあった)と比べると急速に使えるところが増えているのではないだろうか。

　お風呂に入り、持参した投げ入れ式湯沸かし器でお湯を沸かし、お茶と佃煮で一服後、カップ麺を食べ一眠りする。尚今回カップ麺は５つ持参した。

【５月２０日（木）】

３．１パソコン通信など

　午前２時に目が覚める。早速、Libretto をモジュラージャックで接続。
　種々試みたが、GRIC Dial によるインターネットは旨く行かない。
　nifty は旨く繋がった。本会議室で出国前にアップした#15053 にベアトリーチェさんのコメント#15077 が入っていた。

>♪今回の訪問地をつなぐ縦糸は、カラヴァッジョです。
>そうですか。私はカラヴァッジョって名前くらいしか知らないのですが、今回フィレンツェのサンタマリア・デル・カ
>ルミネ教会でマルタから返された（？）「The Beheading of John the Baptist」の特別展示を偶然拝見しました。カラ
>ヴァッジョが署名している唯一の作品とかですってね。でも、本物なのか誰かが再現した物か私の英語力ではわかりま
>せんでした(^_^;)。X線で調べた過程もありましたけど。５月３１日までの展示らしいです。ご参考までに。でも、フィ>

レンツェはご計画になさそうですね。。。

先ず出国前にメールを送るといってある３人(一人は娘)に nifty 経由でメールする。

又一眠りしたが眠りは浅く６時頃目が覚める。

又 nifty につなぐと、娘からメールがかえってきていた。
彼女は２回ミラノにきているのだが、「最後の晩餐」は見られなかったようで是非見てきてもらいたいとの主旨だった。
朝一番で観光案内所(以下< i >と略記する)に赴いて「最後の晩餐」が見られるかどうか確認しよう。

ちょっとスケジュールを調べたり、ボンサンティ「カラヴァッジョ」の関係個所を読み直したりした後、ベアトリーチェさんにコメント(#15115)を入れた。

>今フィレンツェのサンタマリア・デル・カルミネ教会でマルタから返された（？）「The Beheading of John the Baptist」
>の特別展示>があるという情報も有り難うございました。
>私の持参したジョルジョ・ボンサンティ「カラヴァッジョ」によるとこの作品は彼の作品のもっとも優れた作品の一つ
>だそうです。是非見たいが日程的に無理なようです。残念！！

朝９時過ぎ中央駅に赴き<i>を探すが、中々分かり難いところにあった。
そこで市内地図を貰い、「最後の晩餐」について尋ねると、今月の２９日からオープンになる事と予約制である事を告げられ、予約専用の電話番号を教わった。

（この件は、この日の夜今回の旅で６月１日からのローマ滞在中に時間が作れないか検討をしてみたがハードスケジュールになり過ぎるのであきらめる事にした。）

いよいよ観光である。
交通１日券を求め、地下鉄３号線で Duomo 駅まで乗る。地下通路から地上に出たとたん【ドゥオモ(大聖堂)のファサード】（上左図）が眼前いっぱいに展開してくるのは感動的である。
内部を一回りする。ほの暗い雰囲気の中ステンドグラスが美しい(上右図)。

３．２アンブロジアーナ絵画館

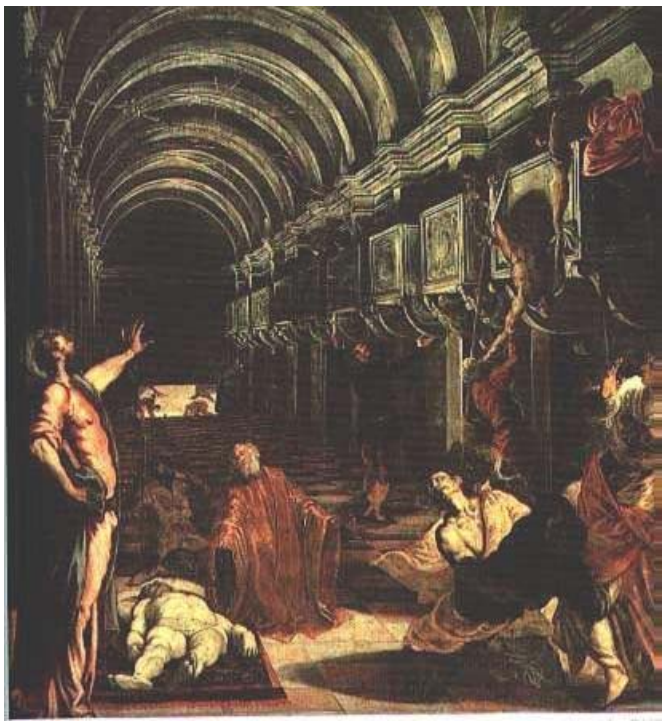
そこから近いアンブロジアーナ絵画館に赴く。
こにはお目当てのカラヴァッジョの「果物籠」（左図）がある。

ご承知だと思うが、１０万リラ札の表にはカラヴァッジョの顔とルーブルにある「女占い師(部分)」があり、裏にはこの「果物籠」がある。この画によって、本格的静物画が始まったとされる名画である。
想像していたのよりずっと抑えられた色調の絵であった。
ボンサンティ「カラヴァッジョ」によると
『・・新鮮な果物と腐った果物、いきいきした葉としおれた葉といった対比が、意図的に一点の絵のなかに並置されていることが読みとれる。この対比によって、自然は循環し、生命には対立する二つの原理が存在するということに注意を促しているのである。したがって１７世紀の、というより近代のと言うべきだろうが、最初の静物画と呼ばれてきたこの絵には、自然が実在していることの誇らしげな肯定よりも、実在するものについて瞑想するときのメランコリックな気分が感じられるのである。』

この絵画館には、名画が数多くするのだが、それらは省略する。
ただこの「果物籠」だけは別格扱いで、他の名画はすべてそのまま展示されているのだが、「果物籠」だけはガラスケースの中に収まって居た。

３．３ブレラ美術館

絵画館を出て、スカラ座の横を歩いてブレラ美術館に赴く。
この美術館には更に名画が多い。ちょっと挙げると
マンテーニャ「聖ルカの多翼祭壇画」、「死せるキリスト」（極端な短縮法で有名）、
ベッリーニ「ピエタ」、「聖母子」、
ティントレット「聖マルコの遺体の発見」（下左図）　などなどである。



ここには、フォッパ、モレットの絵もあるが、私の眼力ではここの絵からカラヴァッジョとの繋がりを見出す事は出来ない。
カラヴァッジョの「エマオの晩餐」（上右図）はここも別格の扱いになっている。
即ち絵の前約１m、高さ約１mに横柵が一本あり、ここから身を乗り出すとブザーが鳴る仕掛けになっていた。
ボンサンティ「カラヴァッジョ」によると、
『この作品はロンドンにあるもう１点の《エマオの晩餐》より数年あとに描かれたように思われる。人物たちが溶けこんでいる雰囲気も心理的な感情も、この絵からはあまり感じとることができない。相対的な意味で、これはすでにカラヴァッジョ晩年の作品である。というのも３９歳で亡くなった彼はこのとき３５歳だったからだ。表現がほぐれてぼんやりとしており、ロンドンの同主題の作品に見られた表現の大胆さはもうない。しかし、これがカラヴァッジョ最後の円熟した芸術的思考の本質であり、もっとも高い質を示すものでもある。』

確かにこの絵には、カラヴァッジョの絵によくあるどぎつさは全く無い。

美術館のそばの地下鉄の Monte Napoleone 駅から一駅だけ乗って Duomo 駅で降り、ドゥオモ裏手にあるレストラン「アル・コンテ・ウゴリーノ」に行ってみる。この店は「個人旅行」に出ている店である。
相変わらず、イタリアの店は大ざっぱである。白ワインを頼むと黙ってフルボトルを持ってきた。
昼から一本飲むのは多すぎるので、半分飲んで栓をしてもらい、鞄に入れてホテルに持ち帰る事にした。

ホテルに戻り、お茶と佃煮で一休み後、日本でイタリア政府観光局から教わった電話番号を使ってローマのボルゲーゼ美術館に電話する。
実は昨年この美術館は訪れたのだが、満員かつ予約が１週間先まで詰まっていたので見られなかったのである。
しかもここにはカラヴァッジョの画が６点もあるのである。
しかし、電話を掛けてもイタリア語のアナウンスがあるだけでどうしたら良いか解からない。
フロントに行き、そこの女性に助けてもらう。どうもその番号は、海外専用らしく、違う番号を教わる。そこへも彼女に掛けて貰い、更に英語の出来る受付を呼び出して貰いそこから引き継いで、６月３日朝一番９時の予約を完了した。
さすがに余裕があり、受付番号１番だった。

これで一安心。目覚しをかけて一眠りする。
８時半に目が覚め、ホテルのレストランで夕食をとる。
午後１１時、カメラの画像データを Libretto に移し、冷蔵庫で冷やしておいた飲み残しのワインを飲んで就寝。

【５月２１（金）】

３．４パソコン通信（２）

午前３時目が覚める。
nifty に繋ぐ。ベアトリーチェさん（#15123）とまるふうさん（#15125）からコメントがあった。
まるふうさんのは
> ＞ここから GRIC Dial ｓというのを使ってインターネットも
> ＞トライしているのですがこれはうまく行っていません

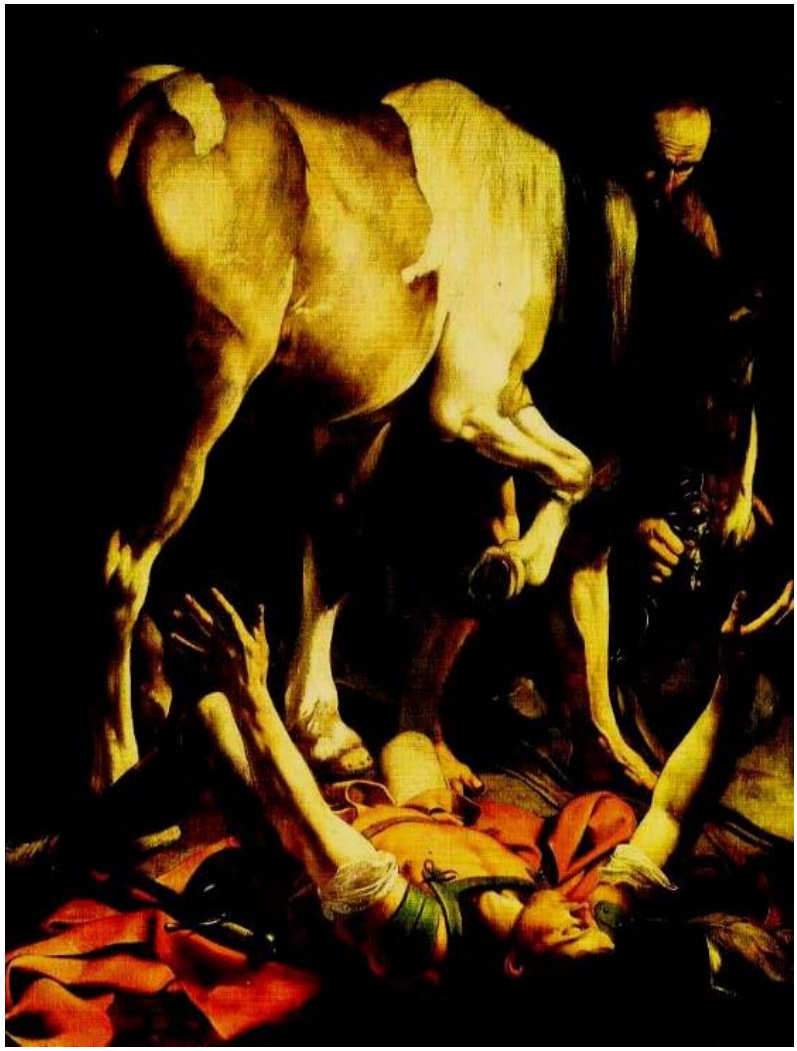
> じつは、Gric Dial のアクセスポイント電話帳（というのか？(^^;）を無理やり Excel とかで開けると PPP 設定情報と
> かが見れるんですよね。
>でもってこれでいつも使っている TCP/IP に設定かけてやるとどうということなく PPP で入れます(^^;。
> σ(^^;の場合は事前にプリントアウトしてアメリカで地道に設定してネットサーフしたことがあります.....(笑)。
> 敏翁さんはリブレットかザウルスでしたよね？＞旅行用マシン

なるほど、そういう手段があるのかと感心したが、今回私は、画像を大量に入れ、且つデジカメのデータを移すために、Libretto には画像ソフト、通信ソフトの他には、word と Mifes しか入れてないのでいじるのは諦めた。

３．５サンタ・マリア・ブレッソ・サン・チェルソ教会

今日は先ずこの教会に行って、モレットの「聖パウロの回心」（次頁左図）を見る事にする。「ロンギ」によると、サンタ・マリア・デル・ポポロ教会（ローマ）にある有名なカラヴァッジョの「サウロの回心」（（次頁右図））の構図はこのモレットの絵を参考にしている事を最初に指摘したのがロベルト・ロンギであった。
「ロンギ」には色口絵が載っているが、なるほど構図的に良く似ている。
何れの絵も画面いっぱいに馬が描かれていて、その下に横たわってキリストの光に打たれたパウロがいる構図である。
これを見たいのである。
地下鉄３号線の Crocetta 駅で降り、１０分以上歩いて到着する。道は分かり難い。
この教会の内部には沢山の絵が有る。
しかし薄暗く、絵の上部に明かり取りの窓が有るのだが、それが逆光になって絵がすこぶる見難い。それで困っていると、

一人の老僧が足を引き摺りながら私のそばにやって来て何か説明してくれる。私がイタリア語はわかりませんと言うと、彼は一つの絵のところで小さな隠しボタンの場所を教えてくれ、そのボタンを押す。



すると絵が照明されるのである。彼は、tutti（之だけはわかる）この様にして照明できると身振りで教えてくれた。
この老僧に感謝。

これですべての絵（多分２０近くあったように思う）が照明付きで見られた。
観光寺院では、コインを入れて照明システムを動かす所も多いのだが、ここは無料である。最後にひとつの喜捨のための箱に２０００リラばかり収めた。

それでずっと見てゆくと、周歩廊でお目当ての絵に逢う事が出来た。

「ロンギ」で見た通りの絵であるが、それほど感動的な絵では無い。

カラヴァッジョは、構図的には参考にしたかも知れないが、ポポロの絵の迫力はやはりカラヴァッジョの天才のなせる業であることが良く分かった。

このあたりは、私の筆力ではうまく表現できず、画像の助けがないとわかり難いと思う。その内ホームページに載せる予定なのでその時又お知らせします。

あと、ガウテンツィオ・フェッラーリの「キリストの洗礼」があった。

フェッラーリに関心があるのは、３日後彼の絵などをヴァラッロでたっぷり見る予定になっているからである。

３．６サンテウストルジョ聖堂

そこから歩いて７，８分のところにこの聖堂が有る。この中のボルティナーリ礼拝堂にフォッパの傑作とされるフレスコが在ると言うので訪れたのである。

しかし聖堂全体が大修理中。削岩機の轟音の中で教会内を参観したが、肝心の礼拝堂も修理中で中に入れず、フォッパには

お目にかかれなかった。

３．７サン・ロレンツォ・マツジョーレ聖堂

そこから歩いて５，６分のところにあるこの聖堂を訪れた。ここも外装は大修理中であった。

この建物は、ミラノの建物の中で、最も有名で且つ歴史ある物の一つだという。

ファサードの前には、大きな広場があり、その中央にコンスタンティヌス帝のブロンズ像（複製。オリジナルはローマのラテラーノにある。）がある。これはキリスト教の信仰の自由を認めたミラノの勅令（３１３年）を記念して作られたものである。

中は古いものも残っている。

サンタクイリーノ礼拝堂（ここは有料。2000 リラ）には、４世紀のモザイクが残っている。しかしあまり立派に残っている訳ではなかった。

バスで Cadorna に出、地下鉄２号線で Gioia 駅で降りる。この駅の方がホテルに近い事が分かったからだ（徒歩７，８分）。

３．８スフォルツァ城

歩き過ぎたのでホテルで一休み、お茶とカップ麺で一息つき又出かける。

ミラノは今日しか無い。それでスフォルツァ城にミケランジェロの「ロンダニのピエタ」を見に行く事にした。

ミケランジェロは、生涯に有名な４つのピエタを作っているが、その内サン・ピエトロ大聖堂（ローマ）、ドゥオーモ美術館、アッカデミア美術館（何れもフィレンツェ）は昨年見ている。（以上は制作年度順。昨年の私の旅行記「イタリア美術探訪」参照）

ミケランジェロの最後のピエタが「ロンダニのピエタ」（左図）なのである。

それで是非見たかったのである。

Gioia 駅から地下鉄２号線で Cadorna 駅まで乗り、すぐそばにあるスフォルツァ城に赴く。

大きな城の建物を利用して、市立博物館やいくつかの美術コレクションなどがあり、見て歩いたが、ここでは「ロンダニのピエタ」に触れるにとどめる。

世界美術全集（小学館）の作品解説からの抜粋と昨年の私の旅行記で纏めてみる。

『まるでなんの制約も主題もない、現代彫刻のようなこの粗削りの作品は、ミケランジェロ最後のもので、彼の思索の苦しみを伝えているかのようである。つまり、この一見無残な姿の《ピエタ》は、死せるキリストを支える通常の図像に従っておらず、元の姿を崩すまでに至ったその自由な制作のなかに、ミケランジェロの苦しみと思いを感じざるをえない。

孤立して残った右腕は、これが最初の構想にあったことをうかがわせる。』

ミケランジェロは死の直前までこの像の制作をしていたらしい。

『この作品では、キリストの右腕が残され、近年その破壊された頭部が発見されたが、これらの部分はマリアやキリストの脚部とは明らかに異なった構造を示している。しかし、その構造を叩き壊すかのようにマリアの力は失われ、支えるべき体勢が逆になり、まるでキリストに負ぶさっているような姿になっていったのである。つまり、まるでこの二人が一体になっているかのように見えるのである。つまり二人が二つの石のブロックからつくられているのではなく、完全に一つのブロックにな

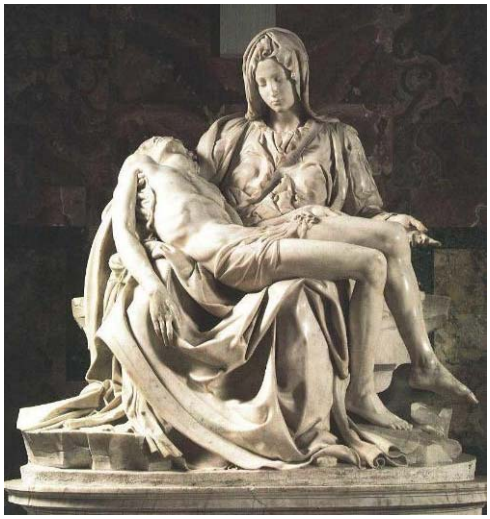
ってしまっているのである。』

『サン・ピエトロのピエタはキリストとマリアが殆ど同じような年齢に表現されていて、しかも同じような顔をしている。これはマリアとキリストという汚れない母と子の姿が、ある意味で男女のカップルの原型であるというミケランジェロの考えを反映していよう。』(下左図)

『ドゥオーモ美術館の像は制作途中で壊されたらしい。キリストの左の腕は肘の所で折られているし、左足が切られているのである。切り取られた足の復元を考えると、奇妙なことにその足は聖母マリアの足の上に置かれていることになる。レオ・スタインバークは、それが当時の図像からすると女性と愛欲関係にある象徴的仕草であるとしているが、そのように解釈するとキリストとマリアが近親相姦の関係にあることになる。

それを指摘されたため、ミケランジェロはキリストの左足を取ってしまったのかもしれない。いずれにせよ、ここにはミケランジェロが死に対峙する時の、一つの思想を見て取ることができる。ミケランジェロが見届けたかったのは、キリストと聖母マリアとが一体となった姿ではなかったか、ということである。しかし彼はこれを完成させないまま制作を中止してしまったのである。』(下中図)

アッカデミアのピエタは、その一体化が更に進んだ形で表現され(下右図)、その行き着く先は、ロンダーニのピエタとなり、そこでは、キリストとマリアは完全な一つのブロックになってしまっているのである。



ホテルに戻り一休み後、夕食に　Al　Matarel（地下鉄２号線 moscova 駅から徒歩５分、「個人旅行」にある）に行ってみる。

なかなか良い店だったが、カード使用不可、レシートも出て来ない店だった。

第三報 (#15689)

【５月２２日（土）】

今日から３日間、レンタカーの旅となる。

午前９時頃ホテルから歩いて５分ほどのところにある Herz のオフィスに行き、日本で予約しておいたレンタカーを受け取る。

去年と同じ、オペル・アストラ　のワゴン１５００ｃｃ　オートマティックである。

スペイン、フランスと使ったＡｖｉｓはオートマを扱ってなく、Herz もオートマはこの車種しかないのであった。

ホテルに戻り、荷物を積み込もうとしたら、後が開かない。

ホテルの男に助けてもらって鍵の使い方を教わる。微妙な手の動きをしないと鍵が開かない事がある事が分かった。この男には何でもない事のようだったが、私が昨年、このタイプの車を２台借りた時はこんな事はなかったのである。

これで３０分もロスをしてしまつた。

とにかく、ヨーロッパで借りた車は、問題が多い。
今度の車は更に右のドアミラーが中から動かず調整に手間取った。
４年前スペインではじめて借りた車は、すぐロックしてしまったし、２年前フランスで借りた車は、ドアを強く閉めたらドアのガラスが「爆発」してしまった。

とにかくホテルを１０時頃出発したが、高速に入るに手間取り、ブレシアに着いたのは１１時半を回っていた。

Ⅳ．ブレシア

町には着いたが、何時もの事で駐車場を見つけるのに苦労する。
＜ｉ＞に比較的近いところに駐車して行ってみたが、閉まっている。この時は昼休みだと思ったが、実は土曜なので休みだったのである。

４．１トジオ・マルティネンコ絵画館

ミシュラン・レッドの地図を頼りに先ず、フォッパ、モレットの絵が沢山あるトジオ・マルティネンコ絵画館に行って見る事にした。
試行錯誤を数回繰り返して、やっと行けたが昼休みになってしまっていて午後は２時半開館となっていた。
小さな店でサンドイッチとビールでランチをとり、あと町の中を車を走らせ感じを掴んだりして時間を過ごした。
絵画館の前の道はモレット通りと名づけられていた。

２時半の開館を待って絵画館に入る。
フォッパ（ブレシア　１４２７～１５１６）もモレット（ブレシア　１４９８～１５５４）もブレシアの出身で、特にモレットは活躍の中心がブレシアだったので、二人特にモレットの画はブレシアにここや教会に沢山ある。

私が特に見たかったのは、ここにあるモレットの「エマオの晩餐」である。
「美術大事典」によると、カラヴァッジョに重要な影響を与えたモレットの絵として、この絵とパイトーネの聖所記念堂にある「羊飼いのもとに現れる聖母」（１５３３年頃)を挙げている。
この後者は、私の調査不足で場所も分かっていない。　(ご存知の方がおりましたら教えて下さい)[註]●

[註]● タルコさんのコメント #15760)
＞ パイトーネのモレットの絵というと、俗に「パイトーネのマドンナ」といわれている、Chiesa del Pellegrinario
＞ にあるものでしょうか。パイトーネの町は、ブレーシャから東14キロ、ガルダ湖へ向かう途中にあります。
を貰ったが、私の地図（４０万分の一）には出て無く、今もってはっきりしていません。

さて「エマオの晩餐」であるが、見た印象は、ブレラ美術館で見たカラヴァッジョの「エマオの晩餐」に近いものがあったと記憶している。
しかし、後から「ロンギ」やチノッティ「カラヴァッジオ」を読み返して見たが、そんな指摘はどこにも無かった。
実は、この絵画館も立派な印刷物(カラー写真入り)を発行しているのだが、その時現金の持ち合わせが無く、カードは使用不可(どこの美術館もカードは不可である)なので入手できなかった。
それで今となっては確かめようもないのが悔やまれる。
この「エマオの晩餐」は１５２８年に描かれたものらしい。と言う事はモレット３０歳の時の作である。上記「羊飼いのもとに現れる聖母」も３５歳頃の作品である。
ここには、モレットの作品が晩年のものに至るまで展示してあるのだが、晩年のものは画風が全く異なる。
それは銀灰色を基調とする渋い色彩、厳しい表情の聖職者たちと言った印象である。

（

モレットは、宗教心の深い画家だったと言う事だが、その宗教に対する認識は、例えばフラ・アンジェリコのそれの対極にあるものと言って良いものと思う。
アンジェリコの穏やかな宗教感は、仏教に喩えれば浄土真宗で、モレットのそれは臨済禅の厳しさであろうか?

本旨に立ち返って、カラヴァッジョはこれらの殆どを見ていたと思われるがモレットの若い一時期の作風に共感し、それを極端にまで発展させたのだと言う事が素人の私にも解かったような気がした。

この絵画館には、フォッパ、ロット、ロマニーノ、サヴォルドなどロンバルディアの主要な画家たちの画のほか、パオロ・ヴェネツィアーノ、ラファエッロ、ティントレットがあるが、それらは省略する。

絵画館を出、モレット通りを通って<i>に行ってみて休みが土曜の為なのが分かった。
絵画館に戻り、受付の女性に少し大きい市内地図をもらい、ミシュラン・レッドにある中では一番安いホテル Ambasciatori への行き方を教わる。
このホテルは、地図の外にあるので聞かないと解からないところにあった。
しかし、行ってみると休みになっていた。こちらはこういう事が良くあるので困る事が多い。

それで、鉄道の駅に行ってみる事にした。一般に駅の傍には、安宿がある事が多く、又 stazione の標識を見ながら容易に辿りつける事が多い事がここ５年のヨーロッパ・レンタカー一人旅の経験から解かっているからである。
行ってみるとはたして２星の Albergo Astron というホテルがあり、そこに泊まる事にした。
ガレージ、朝飯込みで１０万リラ。
しかし、ホテルの親父はカードが使えないと言う。現金は持ってないと言うと、駅に自動両替機があると言うので行ってみたが、結局旨く使えなかった。去年は使えたのだが、システムが違うのか。
結局親父には日本円で払う事にした。レートの交渉をしたがこっちに弱みがあり、あまり良いレートではなかった。
(１３リラ／円)
折角安宿に泊まったのだからと、傍の店で、焼き立てのピザとビール（４０００リラ）を買い、部屋で持参のお茶と佃煮で夕食とした。

【５月２３日（日）】

今日は午前中、モレットの画がある教会即ち　サン・フランチェスコ教会、サンティ・ナザロ・エ・チェルソ教会、サン・ジョヴァンニ・エヴァンジェリスタ教会、新ドゥオモ、及びロトンダを回り、それから次の目的地オルタ・サン・ジュリオに向かう事にした。

しかし、日曜の朝はどの教会もミサの最中で、画を眺められる環境、ましてや写真を撮る事など出来る環境にはなかった。上記の一つでは、肩にカメラをぶる下げて入ったせいか、観光客は遠慮してもらいたいと注意されてしまう始末だった。
それで、モレットの画にも満足にお目にかかれなかった。
ただ、最後のロトンダ(円形の建物)だけは、坊さんが全くいなかった(隣の新ドゥオモのミサの音声が場内拡声器で流れていたが)ので、ゆっくり見る事が出来た。
内陣の右の礼拝堂の主祭壇の「聖母被昇天」はモレットの画だが、バロックに繋がるものが感じられる良い画だったように思う。

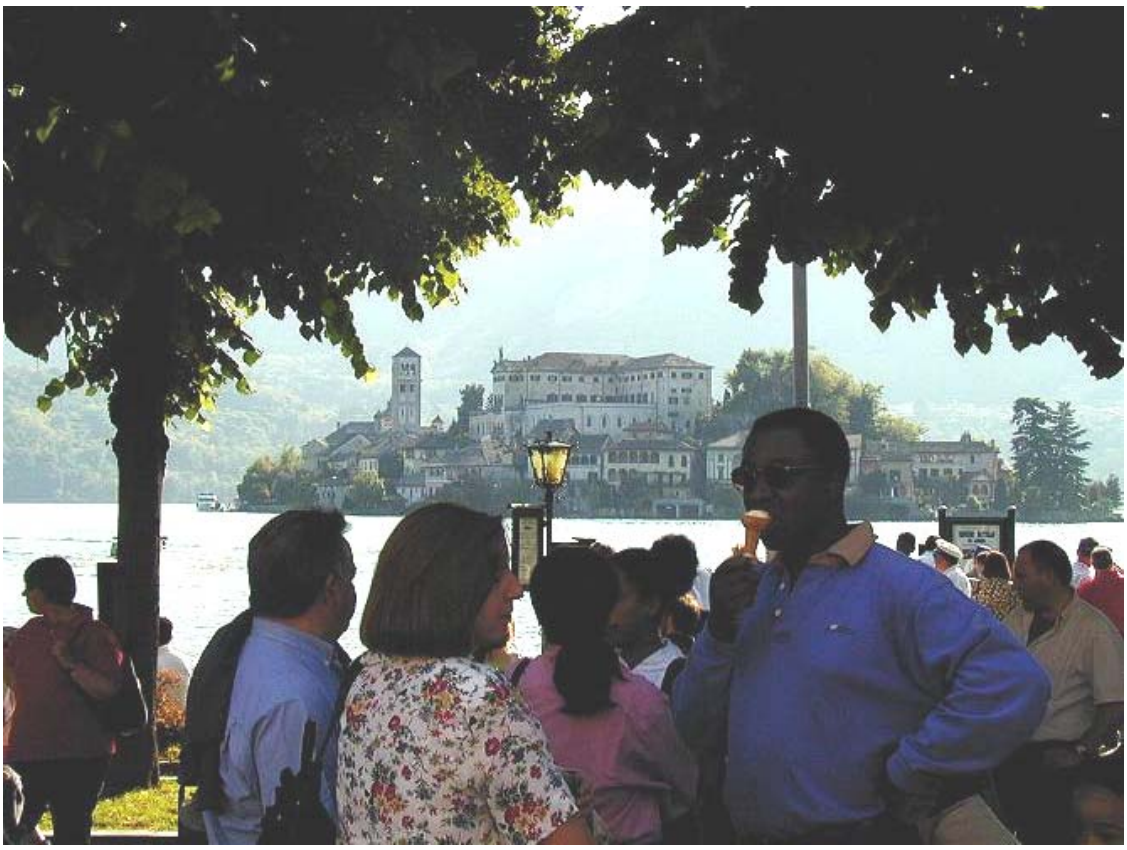
その前のカフェテリアでサンドイッチとビールでランチをとり、酔いを冷ましたところで次の目的地に向かった。

Ｖ．オルタ・サン・ジュリオ(Orta San Giulio)

昨年の５月のはじめにＮＨＫの衛星放送で放送された「イタリア　美の巡礼」(案内人は、金沢大学の宮下孝晴教授とオペラ歌手の中丸三千絵さん）の第２回目に「聖なる山のイエスの物語　～ヴァラッロ～」と言うのがあり、それはオルタ・サン・ジュリオからヴァラッロを訪れるものだった。(確か第一チャンネルの深夜でも再放送した筈)

猶、放送の第一回目は、パルマ、第三回目はラヴェンナ、第四回目はアクィレーィアであった。
昨年は、その中でパルマ、ラヴェンナを回ったが、これらの町は有名であり、訪れた事と放送とは、直接関係はない。
しかし、私の知らなかったオルタ・サン・ジュリオからヴァラツロの映像は誠に魅力的で是非行ってみたいと思った。
だが昨年は、スケジュールの関係で行けず、今年は初めから優先度の高い計画に入れたのである。

ブレシアからすぐ高速に入り、ミラノの北を抜けて Varese に向かう。
途中に料金所があり、そこを抜けて５ｋｍほど行った休憩所で道を確認すると既に分岐点を行き過ぎていると言われる。
言われた通り高速を戻り、Gravellona Toce を目指して走る。「公式ガイド」に付いている地図では工事中になっている高速は、マッジョーレ湖の西北端近くの Gravellona Toce　まで完成していた。
そこから一般道を５ｋｍほど南下するとオルタ湖の北端に達する。そこから更にオルタ湖の東岸を約８ｋｍほど南下してオルタ・サン・ジュリオに到着した。
ここスイスとの国境に近い湖水地方では、マツジョーレ湖、コモ湖が有名でオルタ湖は湖水地方の西の端にある小さい湖(南北約１０ｋｍ、幅は平均２ｋｍ程度)であるのだが、今日が日曜のせいか、道も駐車場も観光客と車でいっぱいである。
本日はここに泊まる積もりなので、道の傍にある３星ホテル Santa Caterina に行ってみたが満員で断られた。
それで< i >に行って見た。ここの　< i >は、日曜でも開いていた。
そこでホテルの予約を頼んだ。オルタ湖畔の３星ホテル　オルタである。
オルタ・サン・ジュリオは、オルタ湖に突き出している小さな半島で、その東岸に開けた所に町が出来ていてこのホテルもそこにある。
しかし、そこに至る道は狭く、車１台がやっと通れる程度で、さらにその道は観光客で溢れていて、それを掻き分けるようにしてやっとホテルに到着した。



チェックイン時に、夜車はここに置けず、高いところにある駐車場に持って行く必要がある事を告げられた。
それは、夕方観光客が減ってから行く事にして、取りあえずホテルの前の広場からモーターボートに乗って、サン・ジュリオ島に言ってみる事にした。
<u>広場から見るサン・ジュリオ島の景色（上図）</u>は絵の様に美しい。
島にある教会の塔がアクセントになっている。
ＮＨＫの放送で見た教会内にあるガウデンツィオ・フェッラーリのフレスコがが見たいのである。しかし行って見ると、教会は閉まっていて入れず、島を一周して見たが家の間を歩いて、殆ど湖は見えず、期待外れだった。
ホテルで一休みして、夕方車を駐車場に持って行く。半島をほぼ一周(約１０ｋｍ)した丁度町の上にあたる処に大きな駐車

場があったが、千台近くの車でほぼいっぱいになっていた。
そこからホテルには徒歩１０分程度で帰る事が出来た。

このホテルは、夕食込みである。
午後７時半に一階の湖畔にある食堂に行くと、私の席が作ってあった。
丁度目の前にサン・ジュリオ島が見える。
食事が始まったときは、まだ陽は高かったが、やがて陽が落ちて湖が段々暗くなる。しばらくするとテーブルのキャンドルに火を付けてくれる。
さらに暗くなってくると、島の教会の灯も映えて来、又大勢の客のテーブル上のキャンドルの光が、食堂を囲んでいるガラス窓に写って、それがまるで湖に浮かんでいるように見える。
実に素晴らしい環境でのディナーだった。

第四報 (#15759)

【５月２４日（月）】

朝、町を散歩しながら駐車場に車を取りに行く。まだ人影が殆ど無い。
小さな町だが、建物の壁にフレスコがあったりして、良い気分である。
しかしのんびりし過ぎていたせいか、小さな教会(Chiesa dell' Assunta １５世紀)を訪れたところで勘違いで道を間違え、駐車場に到着に３０分もかかり、最後の頃はすっかり焦ってしまった。
小さな町でも道は複雑であり馬鹿にしてはいけない。
駐車場はがらがらであった。昨日いっぱいにあった車は殆んど日帰りの客だったのだ。
こういう経験は、ヨーロッパの観光地では良くある事で、私も３年前の南仏フォアでの経験を思い出した。

そこから、この半島の山(標高４０１m)の上に展開しているサクロ・モンテ・ディ・オルタを訪れた。
ここにもサクロ・モンテ(Sacro Monte 聖なる山)がある事は初め知らなかった。ここのものは、聖フランチェスコに献じられたもので、１７～１８世紀に作られたものらしい。

ヴァラッロのサクロ・モンテ(本日の午後訪れる)で入手した資料によると、ヴァラッロに作られた後、各地に(ここの外、Varese, Oropa, Crea, Locarno)にサクロ・モンテが造られたのだとの事である。
上記は、スイスの Locarno を除いて全て北イタリアにある。

山の上に散在している２０ばかりの礼拝堂の中にフレスコ画やテラコッタの彫像などがある。フレスコは、バロック風なものが目立った。
彫像は、美的見地からするとあまり戴けるものでは無いように感じられた。ヴァラッロのそれもそうなのかもしれ無いとの不安が頭を過ぎった。(実際は、ヴァラッロの彫像には素晴らしいものが多かった)

ある礼拝堂は、数十の彫像で埋め尽くされていたが、表現されている情景が私には解からなかった(聖フランチェスコの物

語からとったのか?)。

山上の礼拝堂の傍からは、オルタ湖とサン・ジュリオ島が眼下に眺められここからの景観も素晴らしい(左図)。
ＮＨＫ放送にもここからの景観があったと思うが、放送は、ここのサクロ・モンテには全く触れていない。

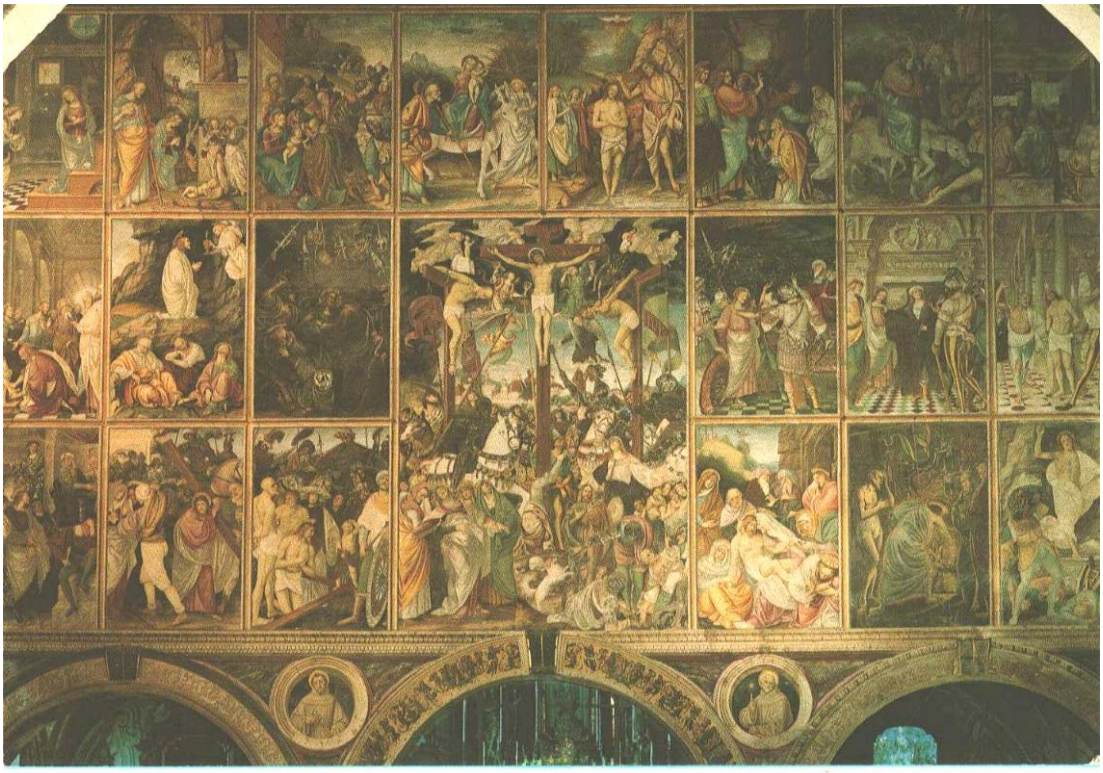
ホテルに戻り、車に荷物を積んで先ず< i >に立ち寄り、行き方を尋ねた後、ヴァラッロに向かった。

Ⅵ. ヴァラッロ(Varallo)

ヴァラッロの町は、オルタ・サン・ジュリオから直線距離にして西に１２ｋｍ程度しか離れていない。
しかし車では、オルタ湖の東岸を南下し、湖の南端から更に１５ｋｍ程度南下してセジア川沿いの町 Romagnano Sesia に至り、そこから川縁の道を北上すること３０ｋｍばかりでやっとヴァラッロの町に到着する。

ここは小さな町で、メイン・ストリートに簡単に< i >を見つける事が出来た。
しかし、本日は休みであった。週に３日、月曜も休む< i >など今まで経験がない。今夜はここに泊らねばならないのだが困った事だと思いながら周りを見渡すと、３星　Albergo Ristorante Italiano という看板が見えた。
それで中に入っていったが、中は人気が無い。どんどん奥に入っていくと男が一人いて、本日は休みだと言う。
その男に簡単な町の地図(簡単すぎてこれが元で後で悩む事になる）をもらい、本日開いている他のホテルとそこへの行き方を教えてもらう。
その男に教わった、この簡単な地図からははみ出している　２星　Albergo　Ristorante　"Monte Rosa" に行ってみる。
真っ赤な建物で私の趣味に合わないが、今更面倒なのでここに決めた。
女将が取り仕切っているのだが、彼女は英語がぜんぜん駄目なのである。
先ず２階の部屋を見て、シャワーが無いので、有る部屋を希望し、４階の部屋(シャワー、トイレ付き、ダブルベッド)にした。５万リラとえらく安い(値段は筆談)。その時おかしいなと思ったが、英語が使えず確認しなかったのだが、このホテルにはエレベータが無く、夕方荷物を部屋に入れるのに一苦労する事になるのである。

先ずサクロ・モンテに行く事にする。
前述の地図では、サンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会の横を通り、石段を登って山上のサクロ・モンテに至る道しか載ってない。
地図にあるイタリア語の説明を拾い読みすると、この石段は、キリストが十字架を背負って登ったカルヴァリの丘の坂道を



象徴している等と書いてあって、これは解釈しすぎかもしれないが、歩いて登るべきであるという雰囲気が感じられた。徒歩２０分もかかるらしいのだが。

これしか道が無いとはおかしいと思ったが、取りあえず**サンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会**に行ってみる。
比較的小さな教会だが、ここは、ガウデンツィオ・フッラーリ(1475～1546)が 1513 年に描いた大きなフレスコで有名である。
そこには**「キリストの生涯と受難」(前頁図)**の２１場面が描かれているが、これは単なるフレスコではなく、立体的表現が取りいれられていて、観者に強く迫る演劇的表現が既に現れている。この延長上にサクロ・モンテの彫像があるのである。
そこから少し坂を登ったところに大きな駐車場があり、そこに駐車して石段を登るらしい。山の上にはサクロ・モンテの建物群が見えている。距離は大した事はなさそうだが、相当きつい登りに見える。
尚、町の標高は４５０m、サクロ・モンテの標高は６０８mである。
石段の登り口のあたりで暫く逡巡していたが、たまたま通りかかった男にこの道で良いのかと尋ねると、男は私の年齢・風体を推し量ったのか、車があるのなら車で登る道があるからその方を勧めるといってその道に入り方を教えてくれた。それで、大分遠回りだったが、車でサクロ・モンテの入り口前まで行く事が出来て助かった。
後からに入手した資料によると、ケーブルカーも有るらしいのだが、地図には勿論出ていないし、その標識にもお目にかからなかった。

そこを入ったところにある小さな広場に、ここを開いた**ベルナルディーノ・カイミ修道士とガウデンツィオ・フッラーリの銅像（左図）**が立っていた。

カイミは、エルサレム巡礼後、ここに新しいエルサレムを作り、キリストが地上に現れた事を皆の心に強く呼び起したいと考え、1491 年にこの計画をスタートさせ彼が死ぬ(1499)まで続けた。
その計画を具体的に支持し、多くの礼拝堂をフレスコや彫像で飾ったのがガウデンツィオ・フッラーリであった。

ミラノの大司教・聖カルロ・ボッロメオは、1578 年ここを訪れ、ここに造られたものを大いに評価し、ここに「新しいエルサレム」という名を与え、この計画を発展させる事を命じた。
そのワークは延々と 1765 年まで続き、４５の礼拝堂が造られたのである。
そして、この聖ボッロメオの努力が更に各地にサクロ・モンテを造らせたのでもある。
ボッロメオはサクロ・モンテ(複数だから正しくは Sacro Monti)が、民衆をカソリックの教義に教化し、当時北イタリアを脅かしていた異端者たちから彼らを守り、彼らに大きな宗教的熱情を与えるのに極めて有効であると考えたのである。
この考えは、やがて現れるバロック芸術全体の根底に有る思想に繋がるものであると思う。
という意味で、私のヴァラッロの訪問は、今回の私の旅の縦糸であるバロック絵画の創始者の一人であるカラヴァッジョを訪ねる旅に繋がっているとも言えるのである。

ちょっと強引か？　もっとも私の議論も行動も若いときから強引さで通っていたが)

二人の銅像のすぐ奥が、第一礼拝堂になっている。(上左図は第２、第３、第４礼拝堂)
ここの主題は、「原罪」でイブがアダムを誘惑しているシーンが沢山の動物の彫像などを含めて構成されている。この建物は1567年に建てられ、彫像は１７世紀のもののようである。
第二礼拝堂は、「受胎告知」、第三礼拝堂は、「エリザベス訪問」と続いて行く。
第五「三博士礼拝」、第六「キリスト誕生」、第七「羊飼いの礼拝」がガウデンツィオ・フッラーリの作による彫像らしい。
ここの山上の売店で資料を入手するまで、知らなかったのだが、極めて小さい第六礼拝堂の赤子キリストを見下ろすマリアとヨゼフ（上右図）の表情の素晴らしさに感動したのだか、それがガウデンツィオ・フッラーリの作だった。
第五の博士は、彼自身と彼の息子ジェロラモ・フェラーリによるもので、フレスコは彼自身のものらしい。

という調子で、第四十八「キリストの磔刑」、第四十九「十字架降架」（左図）、第五十「ピエタ」へと続いて行く。
第四十八と第五十にも彼自身の手が入っているらしい。

もう一つ見る者に強い衝撃を与える彫像は、キリストを迫害する男達の表情にある誇張された憎らしさの表現である。
第３０「キリストの鞭打ち」、第３１「茨の冠」、第３４「カルヴァリへの道」などにあるそれらの彫像は大体１７世紀のものである。これは丁度カソリックの各教会に血だらけ、傷だらけのキリスト像が置かれるのと時を同じくしているようである。
私は、これらの表現の行き着く先が、新教徒、異端者やユダヤ人に対する残虐な行為への正当化に繋がっていったように思えるのであるが、これは読み過ぎであろうか。
山の上は、広場になっていて、周りをいくつかの礼拝堂と教会が囲んでいる。教会のファサードは１９世紀末のものらしい。
その建物の一つの中にある売店で英文の資料を入手し、この文もそれに基づいて記しているところが多い。

各礼拝堂の内部は、実際は格子で囲まれていてあまり見やすい状況には無い。

私は格子の間からデジカメを差し込んで出来るだけ写真を撮ったが、こういう場合デジカメは、液晶表示があるためファインダーを覗く必要がなく、便利であった。
しかし、入手した資料には、各礼拝堂の奇麗な写真がすべてついていたので、資料入手以降写真を撮るのは止めにした。

入り口から出て、そのそばにある茶店でビールで喉を潤して町に降りた。

「博物館の館」(Plazzo dei Musei)に行ってみるが、５月は休館だった。

その傍の通り(Via Albertoni だと思う)は、長い行列とそれの観衆でいっぱいになっていた。車は勿論通れないので、通り過ぎるまで見物した。

上記資料によると、５月の日曜日にこの地方の教会は、サクロ・モンテのマリア様に敬意を表するため行き、祈る習わしがあるという。そして女性達は、もっとも美しい衣装を纏って参加するのだという。

今日は月曜日なので、違う性格の行列だろうが、伝統的な衣装を纏った女性の一群も行列に参加していた。
行列の最後は黒いガウンを纏った男性達に担がれた、マリアの立像の入った輿であったが、そのマリア様の衣装の金ピカさは並たいていのものではなかった(左図)。
山上のガウデンツィオ・フッラーリによる素朴なマリア様の表現と、この金ピカ・マリア様が両立している心理的構造には理解し兼ねるところがある。

ホテルに戻り、明日はミラノからナポリに飛ぶので荷物の整理をしなくてはならず、大荷物を階段で４階まで揚げざるをえなくなった。
これで、外に夕食をとりに行く気力が無くなり、ホテルで夕食とした。
食堂にいくと、客は誰も居ず、お婆さん、子供を含めた女将の家族５人がちょっと離れたテーブルで夕食中だったが、私のところに持ってくる料理も同じもののようだった。
ハウスワインこみで３万リラとこれも安かった。

【５月２５日（火）】

朝、先ず郊外にあり、そこにもガウデンツィオ・フッラーリのフレスコがあるというマドンナ・ディ・ロレート礼拝堂に行ってみる事にした。
女将に地図を書かせるのに難儀したが、車を走らせてもそれらしいものが見つからない。
距離的にちょっと遠いところに一つの小さな礼拝堂を見つけたが、門が閉まって居て中に入れない。一応外から写真を撮って町に戻る事にした。
今日は開いて居るはずの<i>に行こうとして、メイン・ストリートに近づいて町の中心が市でいっぱいになって近づけないのに驚いた。

少し離れたところにやっと駐車し、<i>に行ってみる。
そこの女性に朝撮った写真を見せて、これが問題の礼拝堂かどうか聞いてみたが、違うものだという事だった。
デジカメには、こう言う使い方もある事を発見した。
ここから、高速道路に入り方を教わったが、女性達は、この地方 Valsesia 及びその周辺を含む地図の外、資料なども沢山くれた。
それによると、Valsesia(オルタ湖は入らない)は、緑と赤と金に溢れているとしていて、その赤が、ヴァラッロの西北スイスとの国境にある Monte Rosa(最高峰は標高 4633 m）で、金がサクロ・モンテとサンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会のフレスコなどであるとしている。
金は殆ど見たし、赤はその名のホテルに泊まったから良しとしよう。

<i>から歩いて数分のところにあるサン・ガウデンツィオ参事会教会にあるガウデンツィオ・フッラーリの多翼祭壇画を見てこの町の観光を終りとした。

教わった道順で高速に入り、ミラノ・マルペンサ空港に向かった。

第五報 (#15797)

ミラノ・マルペンサ空港でレンタカーを返す。
この空港には、データ通信可能な電話が設置されており、接続トライ。メール２通ばかり来ていたので、返信する。

Ⅶ. ナポリ(Napoli)

アリタリア航空でミラノからナポリに飛ぶ。ナポリ着１６：２５
空港からホテルまでタクシー。ホテルはナポリ中央駅前のガリバルディ広場に面している　３星　Cavour　である。

ナポリおよび周辺の観光の基本計画は、当初このホテルに２泊し、その後レンタカーを借りて、ポンペイ、ソレント、カプリを２泊しながら回るというものだった。
ここのホテル２泊は、私の長期間旅行の基本パターンの一つで、旅の中間の平日(土、日は洗濯屋休み)に２泊を入れ、そこでラウンドリー・サービスを使って洗濯物を処理するためである。
ところが、この計画がここで狂ってしまった。洗濯物は明朝受け付けるが、４８時間サービスしか無いというのである。
これでは洗濯物を頼む事が出来ない。
私は、ここ５年もヨーロッパ旅行を続けているのだが、２４時間サービスの無い町にははじめてお目にかかった。
これがナポリの悪い一番目の印象だった。
中央駅の<ｉ>に行ってみる。
先ず、駅前の交差点で、信号はあるのだが、壊れているのか点灯していなく、車の流れの中を泳ぐように人々が道を渡っていた。私も初めは、恐くて渡れなかったが、そのうち地元の人の後ろについてやっと渡る事が出来た。
これがナポリの強烈な２番目の印象である。
私の娘が去年ここを訪れているのだが、この交通無法地帯の印象がよっぽど強かったのだろう。ナポリだけは車の運転を止めて貰いたいと懇願され、出国のちょっと前に予約していたレンタカーをキャンセルしたのである。

<ｉ>で市内地図、バスルート地図を貰う。ここには日本語を少し話せる６０歳ぐらいの男が居て、日本人から貰ったお土産を見せべらかしたり、世間話を良く話すのだが(主体は英語)、ポンペイへの行き方を尋ねると駅からＦＳ鉄道で Paola/Cosenza 行きに乗れば良いという。便利な便は、一日２本しかないらしい。
これは、私のもって居た情報と違っていた。私の友人が去年ポンペイという駅で降りて発掘遺跡に遠くて苦労した話を聞いていたからだ。
確認しても「ダイジョウブ、モンダイナイ」を繰り返すだけなのである。
結局ナポリには４泊するのだが(経緯は後述)、その後３回ばかり<ｉ>に立ち寄って見たのだが、その後<ｉ>のオフィスは何時も閉まったままだった。この<ｉ>の対応が、ナポリの悪い３番目の印象である。

以上の 3 つの印象からは、ナポリという町もそこに住んでいる人々の感覚もまだ十分近代化されていないという事が感じられた。
夕食はホテルでとる。

このホテルでは電話機にパソコンの接続出来ない。

【５月２６日（水）】

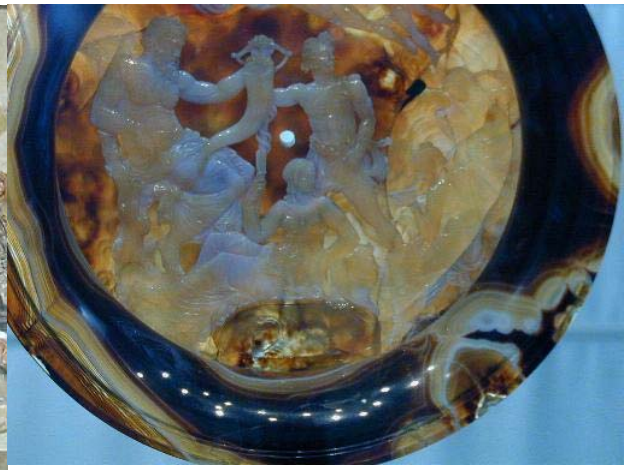
このホテルは、今晩までしか借りていない。朝、延長の可能性を尋ねてみたら空いた部屋は無いとの事であった。(あれば洗濯物を頼めたのだが)
今日中に、車を借りるか、何処か違うホテルを予約するかしなければならない。
それは、夕方にする事にして先ずは、国立考古学博物館でポンペイ関係の発掘美術品、カポディモンテ美術館でカラヴァッジョ関係を見る事にした。

７．１国立考古学博物館

中央駅の売店で一日券を購入。地下鉄で Plaza Cavour まで乗り、国立考古学博物館まで歩く。
ここでは、重点的にヴェスヴィオ火山の大爆発(紀元７９年)で埋没した古代ローマ時代の諸都市(ポンペイ、エルコラーノなど)から発掘された絵画やモザイクを鑑賞した。
明日行く予定のポンペイの絵画やモザイクについて予め予備知識を得る為である。
ポンペイの絵画に第一～第四様式というのがあるのだが、画集などで見ても良く分からない。
ここには、それについて展示の初めのところにパネルで説明されていた。
英語の解説も付いていて比較的わかりやすのでそれによって簡単に説明する。
様式の分類は、１９世紀後半、August Mau によってポンペイ絵画についてなされたものだが、これはその後ほぼローマ時代の絵画全体に拡張された。

第一様式、紀元前２００年～紀元元年。
色付き漆喰による浮き彫り(色付き大理石を模したもの)による室内装飾。絵が描かれる事は希である。
第二様式、紀元前８０年～紀元元年。
漆喰の仕事を絵で置き換えた。絵は非常にリアルに描かれ建物と溶け込んでいる。
第三様式、紀元前２０年から紀元４５年　　絵が独立してくる。
第四様式、　火山爆発後もローマで用いられた。幻想的な絵(第二、第三様式)が多数取り入れられ、極めて装飾的である。ポンペイでは、紀元６２年の大地震の復旧では大いに用いられた。

そのパネルの例のほか多数の壁画(ポンペイ、エルコラーノなど)が展示されており、その解説には殆ど様式に付いても書かれていて、それらを見終わった頃、なんとなくこの分類に付いても解かったような気がしてきた。
絵は、ギリシャ神話からとったものが多い。
モザイクも素晴らしいものがある。
特にポンペイのファウヌスの家にあった<u>アレキサンダー大王とペルシャのダリウス王との戦闘(紀元前３３１年)を描いた</u>



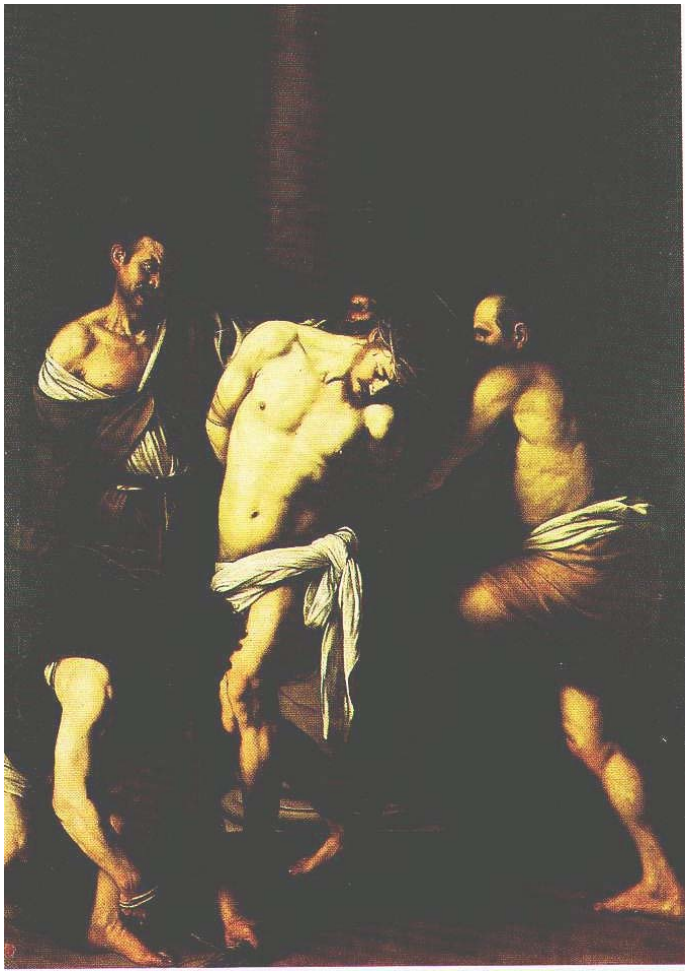
大きなモザイク（前頁左図）(3.42x5.92m)は素晴らしい。
　これはオリジナルが紀元前３００年頃のもので、ここのものはその紀元前１００年頃のコピーなのだという事である。

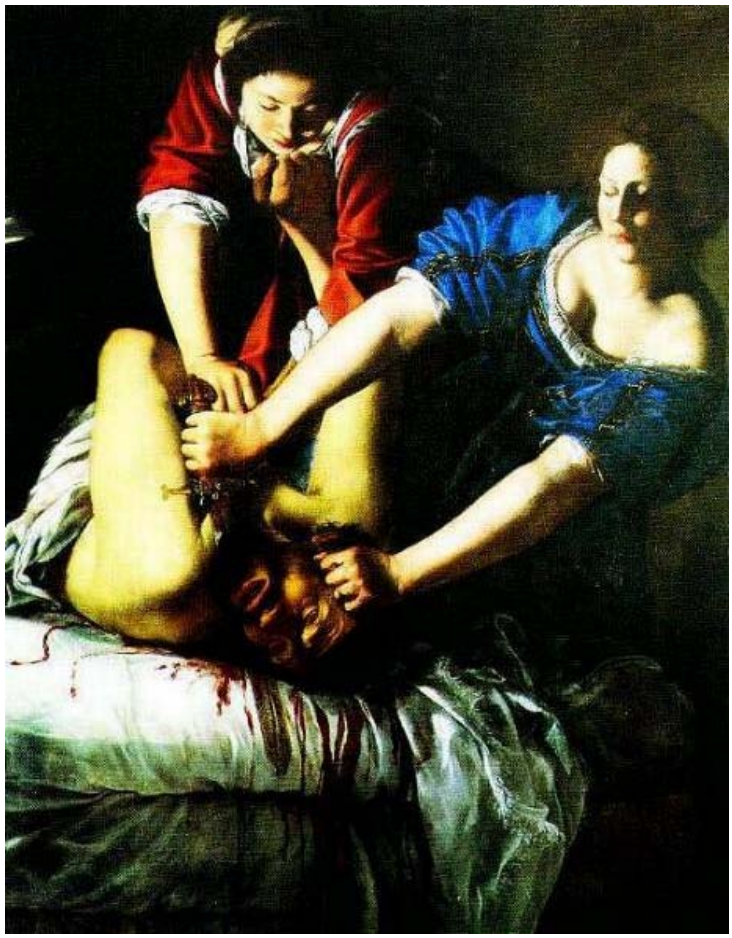
　他に、大理石彫刻も素晴らしいものが多かった。
　又宝石部門にあった「ファルネーゼの皿」（前頁右図）は直径２０ｃｍの赤縞瑪瑙板を彫刻したもので、半透明の作品の裏から通ってくる光の美しさといい、図柄の精妙さといい、絶品である。これは、紀元前５０～３０年頃アレキサンドリアで制作されたものだという事である。

７．２．カポディモンテ美術館

　博物館の前のバス停から、バス(１１０番)に乗り、カポディモンテの丘に向かう。どこで降りるべきか悩んだが、尋ねた男が幸いな事に美術館に行く夫婦連れだったので、このご夫婦と一緒に美術館まで行く事が出来た。
　ここにも素晴らしい画が沢山あったが、ここでは、先ずカラヴァッジョとその関連について触れる事にする。

　カラヴァッジョは、ローマでの大成功の後、次々と裁判沙汰になるような事件を起こしたが、最後に殺人事件を起こし、ローマを逃亡する事とになった。
　彼はナポリには、２回滞在し、その累計でもほんの数ヶ月にしかならなかったのだが、この地にひとつの活発な画派が誕生し、発展していくのに決定的な役割を果たす事になるのである。





　彼はナポリで、かなり多くの(１２，３枚？　チノッティ「カラヴァッジオ」にあるカタログより数えた)の絵を制作しているらしいのだが、消失したり、他に行ったりして、ナポリには真作とされるものは３枚(他に模作とされるものが２点)、そのうち見られるものは２枚だけである。
　その一枚がこの美術館にある。サン・ドメニコ・マッジョーレ聖堂から寄託されている「キリストの鞭打ち」（上左図）(286x213cm)である。

チノッティ「カラヴァッジオ」によると、
『人間によって刑を受ける人間=神の物語は、人間の罪（刑吏たち）と人間=神の至高の価値（犠牲者キリスト）の最大限の対比によって表されている。そこでは、刑吏たちの獣的な残忍さに見られるなまなましい自然主義と、苦痛に耐えているというより、人間的な物思いに耽った顔ーーそれは人間の罪に対する果てしない悲しみを映し出す鏡であるーーとアポロのような美しい肉体をもつキリストの古典的な高貴さが融合している。
この作品はナポリの同時代の画家たちに著しい影響を与え、無数の反響を呼び起こした。』とある。
ここには、カラヴァッジョの影響を受けた画家達の作品が多数展示されている。
その中には、生涯ナポリに留まりカラヴァッジョ派らしい画を書き続けこの地方のカラヴァッジョ主義の発展に貢献した**アルテミジャ・ジェンティレスキ**の**「ホロフェルネスの首を斬るユディット」（前頁右図）**(162x126cm)がある。
彼女の殆ど同じ構図で描いた画がウフィッツィ美術館にあり、その方が有名だが、そちらは１６２０年頃のもので、ここのは１６２５－３０年のものである。
彼女は若い時、父オラツィオ・ジェンティレスキィの友人アゴスティーノ・タッシ(いずれも画家)に強姦されたという心の傷を持っているのだが、それが女が屈強な男の首を切るという画を繰り返し描かせる事に繋がったのだろう。

『ベッドの上で男の首を切る二人の女という残酷で劇的な場面を、暗い限定された空間のなかに強烈な光線を当てて浮かび上がらせる手法は、カラヴァッジョ様式の完全な継承を証明している。カラヴァッジョの《聖マタイの殉教》の影響が強いとみられるが、映像的効果はこちらのほうが格段に進展している。また重要なことは、侍女アブラが殺害に重要な役割を果たしている異例な解釈であり、いかに眠っているとはいえ、凶暴な軍人を殺すには女二人の協力が必要だと作者（女性）が実感していたことを示している。』　　世界美術大全集（若桑みどり）

若桑みどりさんは、《聖マタイの殉教》の影響について記していて、カラヴァッジョの同じ題材の画（２つあり、一つはローマ・**バルベリーニ国立絵画館のもの（左図）**、もう一つは現在は模作しか残っていないが、ナポリで描かれたもの）との関係に触れていない。しかしこれらは構図的には良く似ていて、彼女がそれらから影響を受けたと考えるほうが自然だと思う。
私は、彼女がカラヴァッジョの画からヒントを得て、それを繰り返し描く事により、心の中で男に復讐し、心の傷を癒そうとしたのではないかと思うのだが。

他にもカラヴァッジスティ(カラヴァッジョ派の画家)の画がいくつもある。

Battistello Caracciolo の「円柱のキリスト」、
Jusepe de Ribera(スペインではホセ・デ・リベーラとなる)の数点、
Massimo Stanzione　の２点、
Mattia Preti (後述)、
Luca Forte や Giovan Battista Recco　の静物などである。

さらに今年は　Mattia Preti(１６１３～１６９９)死去３００年に当たるというので６０点の画を含む特別大展示を行っていた。
１７世紀いっぱいを生きた　Mattia Preti　の画は、当初は全くカラヴァッジョの画そのままのようだが、次第に独自の画風を確立して行ったのだが、それらは、ジョルダーノに近づいたり、プッサンに近いものになったりもしている。
彼は、かなりの長寿であったが、その中で大幅に画風を変化させた事で知られている。それは又この時代の社会の好みの変化にも関連していて、一堂に集められた(ルーブル、ティッセン、ウィーンなどから)一人の画から時代の流れを知る事が出来る。

以上は、１７世紀を中心に記したが、この美術館には、他にも名品が多い。
１５世紀のマザッチョ(磔刑)、フィリッポ・リツピ、マンテーニャ、ヴィヴアリーニ：
１６世紀のラファエロ、とその工房、フラ・バロトロメオ、ヴァザーリ、ドッソ・ドッシ、コレッジヨ、ロレンツォ・ロツト、チチアーノ(ダナエ)、エル・グレゴ、アンニバレ・カラツチなどである。

美術館内のカフェテリアで軽いランチをとり、美術館を出る。

バスで　Plaza Cavour　に戻り、バスを乗り換えて(Ｅ１)、ドゥオー前で降り、そのそばにある<u>ピオ・モンテ・デッラ・ミゼルテルディア</u>を探す。
そこにはもう一つのカラヴァッジョの有名な画があるのである。細い道を入った所にあり、分かり難いのだが、やっと探し当てたが、閉まっていて、何時開くという情報が無い。尚ドゥオモも閉まっていて同じく情報が無かった。

午後３時頃バスで中央駅まで戻り、今朝のところに記したいくつかの必要事項などを片付ける事にした。

１）ナポリの交通事情にも慣れて、車の運転も出来そうな気分になったので、駅にある２、３のレンタカーの会社に当たってみた。しかし、どの会社にもオートマ車は無かったのでこれは諦める外無かった。
(私の免許はオートマ限定付き。オートマ以外に乗った事がない。)

２）となると、ホテルを予約しなければならないが、大荷物を転がしてあの交通無法地帯を移動するのは、自信が持てず、近くのホテルを予約する事にした。
今のホテルから車道を渡らずに行ける　３星ホテル　Nuovo Rebecchino を明日から２泊予約した。このホテルは、ミシュラン・レツドにも「個人旅行」にも出ていて、「個人旅行」では女性に人気があるとなっていた。

３）<i>に行ってみたが、閉まっている。すると一人の男(風体があまり良く無い)が寄ってきて、英語で何が知りたいのかと聞く。怪しげな男なので用心しつつも、教会の開く時間が知りたいのだというと「殆どの教会は午前８時半には開く」と教えてくれた。外にも、ポンペイへの行き方なども尋ねかったのだが、あまり関わりたくない雰囲気の男なのでここで質問は止めた。
明後日、朝ピオ・モンテ・デッラ・ミゼリコルディアに行ってみよう。

これで、ナポリのスケジュールがほぼ決まった。
明日　　ポンペイ
明後日　ピオ・モンテ・デッラ・ミゼリコルディア拝観の後ナポリの港からカプリ島へ日帰り。
というスケジュールである。

後、問題は溜まった洗濯物である。
ホテルに戻り何年ぶりかで大洗濯し、一休みした後、近くのレストラン Da Mimi alla Ferrovia に行ってみた。ここは、ミシュラン・レツドにあり２フォークの店である。行ったときは空いていたが、午後８時半頃からは大繁盛の店だった。
この店特製のパスタは、スパゲッティの上にボンゴレ、ムール貝、かなり大型のエビなどがたっぷり乗っているもの。カツレツは２００ｃｍ^{2}もある大きなもの。ワイン付きで５４０００リラと値段も安かった。
ここらがナポリの良い点なのだろう。

第六報 (#15820)

【５月２７日（木）】

<u>Ⅷ．ポンペイ</u>

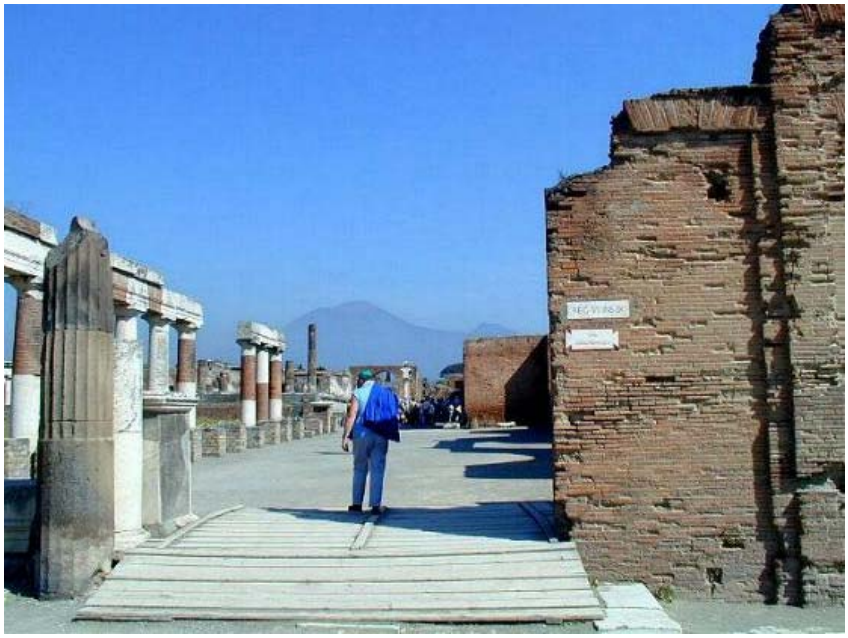
朝、ホテル Cavour をチェック・アウトし、荷物を近くのホテル Nuovo Rebecchino　まで転がして行き、預けてポンペ

イに向けて出発した。

中央駅の地下から、循環線(Circumvesuviana)に乗って、Villa dei Misteri(秘儀荘)駅で降りる。電車は途中で小学生の一団が乗り込んで来るなどあってかなりの込み様だった。

駅からすぐのところが Pompei Scavi(ポンペイ遺跡発掘現場)の入り口になっている。その傍の露天商で、案内書(16000 リラ)を求める。この「案内書」でも、ここが入り口となっているのだが、一昨日駅の<i>で聞いたポンペイ駅の事はどこにも書いてない。その関係は今でも分からない。

この「案内書」を参考にして、主要なところを訪れる事にした。



【フォロ】(宗教、政治、経済活動の中心となっていた広場)からは、遺跡の向こうにヴェスヴィオ火山が紫色に良く見える(左図)。

先ず、ポンペイで最大の個人邸宅だった【ファウヌスの家】に行ってみた。

入り口近くに、小さなブロンズの彫像が立っている。これが「牧神ファウヌス」でこれからこの家の名前が付けられた。ここにあるのはコピーで、オリジナルは昨日行ったナポリ国立考古学博物館にある。

この広い邸宅には、殆ど何も残っていない。有名な「アレキサンダー大王とダリウス王との戦闘」のモザイクもそれが発見された広間の床にコピーが作られていたが。

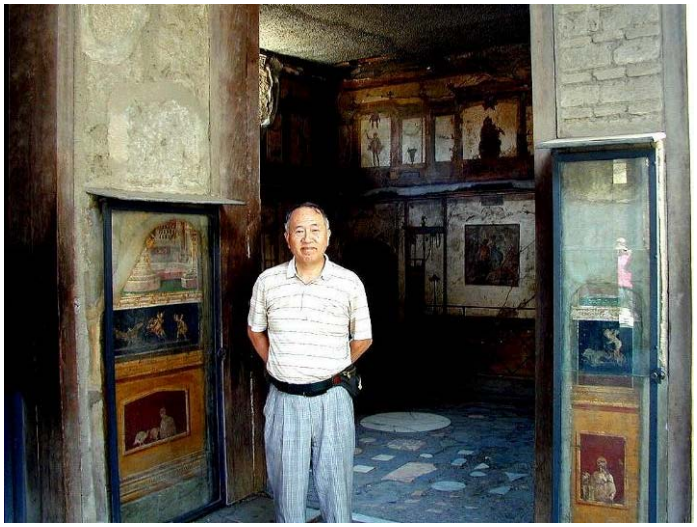
多分ここは、早く発掘が進み、その頃の常識として、美術品は全部剥ぎ取って博物館に持っていったのだろう。

出来るだけ現地にそのまま残すという考えは、比較的近年のものらしい。

『発掘された壁画をそのままの状態にしておけば、壁を伝わってくる湿気によって壁画が傷んでしまうからである。このような破壊的な保存法(剥がして博物館に置く事)に疑問が呈され、湿気を防ぐ方策を施すことによって壁画をそのままに残して保存するという方法がとられるようになるのは１９世紀末からである。湿気を防ぐには、壁画が描かれている壁体の床面近くに鋸を入れて間隙を作り、そこに鉛の板を挿入する方法が採用された。

また日光による彩色の劣化を防ぐために、できる限り屋根を掛けることも行われた。このような努力の積み重ねによって、ポンペイは古代の状態をよみがえらせることに成功したのである。』

世界美術大全集　５　「古代地中海とローマ」　青柳正規



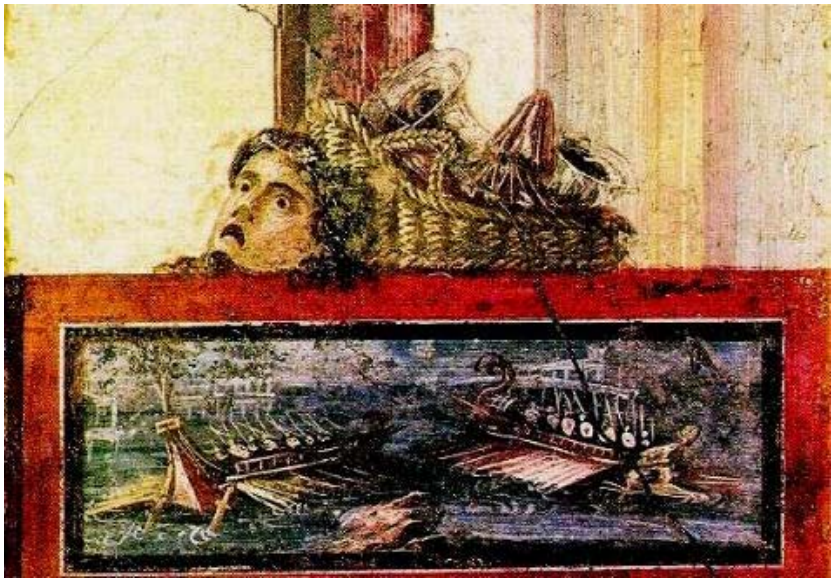
次にファウヌスの家の近くにあり、壁画が最も良く残っている【ベッティの家】(前頁左図)を訪れた。
入り口にある巨大な男根を持つ豊穣の神プリアプスのフレスコで先ずびっくりした。

中はさして広くは無いが、かなりの数の部屋があり、各々は保存の良い多くの絵で飾られている。第四様式のもので、その殆どが紀元６２年の大地震の後に描かれたものらしい。
題材はギリシャ神話に取ったものが殆どで雰囲気は解るがストーリーは殆ど解らなかった。
帰国後、神奈川県立図書館で、「ポンペイの壁画」全２巻　ジュゼッピーナ・チェルッリ・イレッリ、青柳正規　他編集　岩波書店　１９９１　定価　４２０００円と言う豪華本を見つけ、それとギリシャ神話辞典とを見比べながらどうやらある程度は解ったが。

とある小部屋の傍で、係りの者が、「ポルノの部屋」と言って呼び込んでいる。中は小さな部屋（多分寝室）だが、壁には何枚ものポルノが描かれている(前頁右図)。
又巨大男根を持つ彫像も飾ってある。
「案内書」で、位置を確認すると、エロチックな絵のある婦人部屋ジネチェオとある。gineceo は私の伊和辞典では、古代ギリシャ語で婦人室とあるだけだが、もう少し解説がほしいところである。

尚、ヴェッティの家の後、スタビアーネの浴場に行く途中、Vicolo di Lupanare（遊郭小路）に入り込んだが、とある小さな家の前に居た係りの者が、日本人と解ったのだろう、「ココ、バイシュンヤド」と言って指差した。
ここにもポルノの絵が何枚か飾ってあった。

上記「ポンペイの壁画」によると、これらの他、百年祭の家、エフェボの家などにもあり、ポンペイのこの種の絵は、他に見られるものより露骨、俗悪なものが多いとある。　ファウスト・ゼーヴィ「民衆美術」



尚、上記「ポンペイの壁画」を読んでいて、ベッティの家にあった不思議な仮面とそれが立てかけられている籠が描かれている壁画についての記述を見出した(左図)。
『タブロー画の上には悲劇の仮面がミュスティカ・ウァンヌスに立てかけられており、ウァンヌスの中には布に包まれたファロス（男根）がリュトンとともに入っている。』

リュトンは、新潮世界美術辞典に出ていて西洋式の広口の杯だが、ミュスティカ・ウァンヌスは種々調べたが解らない。ラテン語の辞典より多分 misticus vannus だとすると「神秘の箕」となる。
しかし、ミュスティカ・ウァンヌスは、「世界美術大全集」の秘儀荘の所にも出ていて（後述）この場合は、「豊穣を願う儀式」とある。これは「神秘の箕」を用いて行う儀式を言うのだと解釈した。
「ポンペイの壁画」はやや専門家向けの書籍らしく、この程度の事は知っている読者を対象にしているのかも知れないが、「世界美術大全集」で、ラテン語（？）の専門用語を説明も無しに使うのはどう考えてもおかしいと思う。

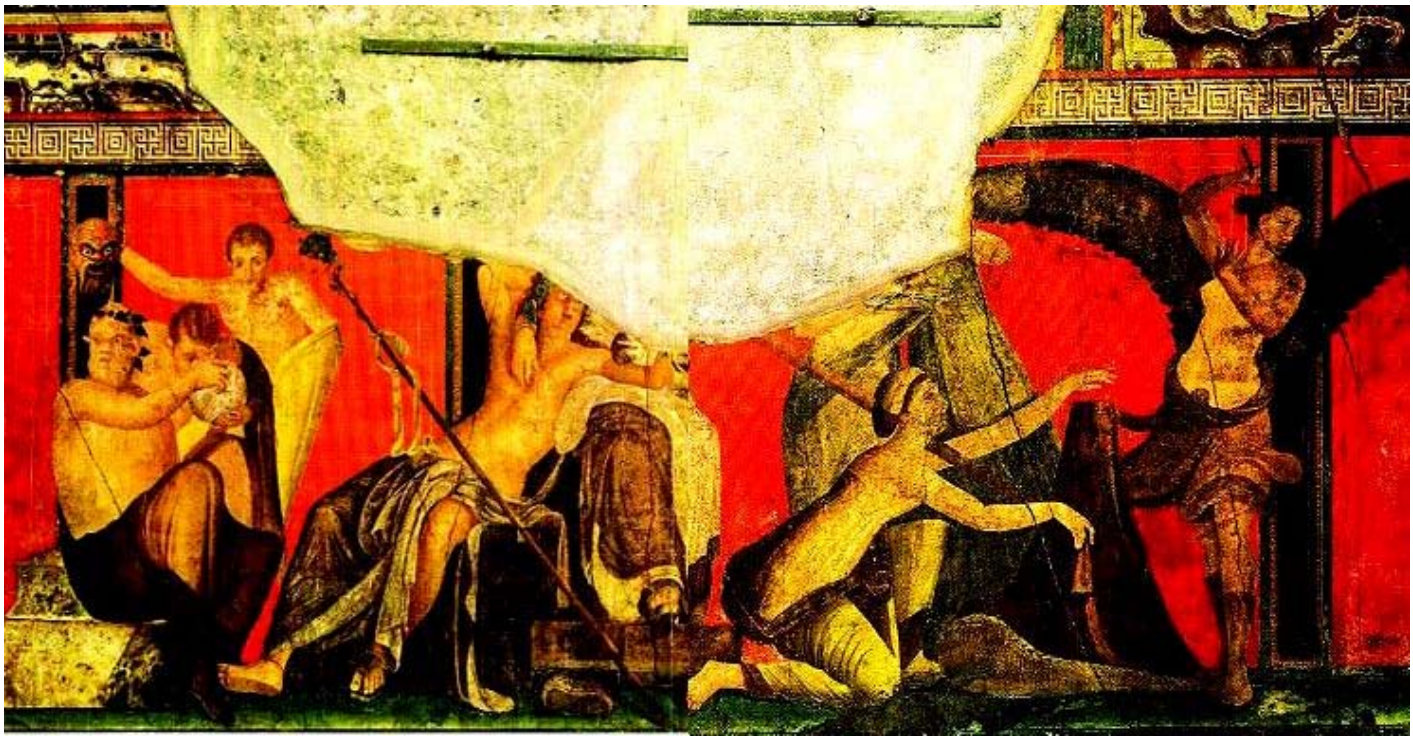
この絵（複数）のある所が、「案内書」ではアトリゥム（大広間）となっているのだが、「ポンペイの壁画」ではトリクリニュウム（ローマ式横になって食べる食堂？）となっていて、記憶が薄れた現在では、あった場所がはっきりしないのだが、婦人部屋などより開かれた所である事は確かである。
このように、ちょっとディテイルに関心を持って調べようとすると、種々の書籍間の記述の不一致、説明不足が目立ってならない。

いずれにしても、ポンペイの町は、秘められた所には、より露骨な絵、開かれた所にも相当性的な絵がかなり飾られていたらしい事が分かる。
これらはその時代の文化、精神構造を知る上から興味深い。
より詳細な参考書などをご存知の方が居りましたらご教授下さい。

この精神構造はキリスト教の導入によって完全に破壊されてしまったのだが少し残念な気がする。

さらに、アッポンダンツァ通りをサルノ門近くまで行き、いくつかの家を見たが、直射日光中の歩行が多く疲れた。
フォロの近くまで戻り、レストランで、スパゲッティとビールで一息いれる。
それから少し離れた所にある【秘儀荘】に行ってみることにした。

ここのお目当ては、ディオニュソスの秘儀を描いた大壁画である。
建物は、前２世紀に建てられた別荘だが、前６０年頃大改造がおこなわれ、壁画はその時のものだという。その内、大壁画は、古代から現代に至った最大規模(17mx3m)のものだとのこと。



画の解釈は種々提案されているようだが、ディオニュソスの秘儀への花嫁の入信式という説が有力なようである。
世界美術大全集によると、　そのもっとも重要な壁面(東壁)（上図）には、ディオニュソスとアリアドネの聖婚と、豊穣を願う儀式ミュスティカ・ウァヌス(ひざまずく女が籠から隆起する男根を覆う紫のカヴァーを取り除こうとしている)が描かれているとある。

帰国後図書館でいろいろ調べたが、たいした事は分からなかった。
ただ、神話・伝承事典ーー失われた女神たちの復権ーー　バーバラ・ウォーカー著　大修館書店　によると、デュオニュソスのエムブレム(象徴)は、テュルソス、男根の形をした芍杖であり、又デュオニュソスが出現したとき彼は新生児として「箕の籠」に入っていたという説もあるとの事である。
これが「神秘の箕　ミュスティカ・ウァヌス」なのではあるまいか。

どうやら、ヴェッティの家の不思議な壁画から、秘儀荘の壁画まで、デュオニュソス信仰が、何回も禁止令が出たそうなのだが、大衆に広く受け入れられていた印として理解する事が出来るように思える。

秘儀荘から駅までは徒歩１０分程度である。
朝と同じ路線で中央駅に戻り、ホテルに着いたのは午後４時近くになっていた。

部屋の電話機を調べてみたが、ここもパソコンの接続は出来ない構造になっていた。
ナポリはやはり遅れている。

今日は終日炎天下を歩いて疲れがひどく、一休みの後、傍の小カフェテリアで軽食をとって就寝した。

第七報（#15870）

【５月２８日（金）】

Ⅸ．ナポリ(再)

9.1 ピオ・モンテ・デッラ・ミゼリコルディア

朝、９時頃バスを乗り継ぎ先ずドゥオモに行ってみる。
内部は身廊全体が細かい鉄骨で覆われ大修理中であり、落ち着いて参観出来る雰囲気にはないので早々に引き上げそばにある　【ピオ・モンテ・デッラ・ミゼリコルディア】を訪れた。
ミゼリコルディア misericordia　とは英語では　mercy　で「慈悲」の意味である。

これは、ピオ・モンテ信心会に所属する建物で、そこに組み込まれている教会がお目当てなのである。
その教会は八角形の小さな建物（差し渡し約１５m）で、主祭壇の他７つの礼拝堂ならなっているのだが、その何れにもカラヴァッジョ自身の画、および彼と関係の深い祭壇画が飾ってある。

主祭壇の絵はカラヴァッジョの「七つの慈悲の行い」（左図）(1606 年末頃)であり、この信心会の性格を表現している。
この絵は、カラヴァッジョのものの中でも最も複雑な構成をなしており、一つの絵の中に 7 つの行いを複雑に入り組んだ形で描いている。

『そもそも「慈悲の七つの行い」とは、マタイ伝 25:34-37 に基づくものであり、又「最後の審判」に緊密に結びつくものである。マタイの福音書の審判者キリストの第２の到来、さらに正確には、選ばれた者と呪われた者の選択の記述中で述べられているからである。　つまり人々がキリストの右側か左側に、選ばれた者および呪われた者としておかれるのは慈悲の行為をなし遂げたか否かによっているからである。　福音書は六つの慈悲しか記さない。①空腹の者に食物を、②渇者に飲物を与え、③旅人に宿を貸し、④裸の者に衣服を着せ、⑤病人を見舞い、⑥獄舎にある者を訪ねる。⑦死者を埋葬することは１２世紀にフランスの神学者ジャン・ベレツによって加えられたものである。』
以上は、柳宗玄・中島義宗編「キリスト教美術図典」吉川弘文館　による。
カラヴァッジョは、この７つを６つの行為として描いた。
即ち「ローマの慈愛」を描く事により、上記①

と⑥二つの慈悲の行いを現わしているのである。

『このエピソードはカラヴァッジョをナポリに招いたルイジ・カラファの叔父アスカニオ・コロンナとフェデリコ・ボッロメーオが管轄者であったサン・ニコラ・イン・カルチェレ聖堂と関係があったかららしい。
中世では、「ローマの慈愛」の物語、即ち餓死の刑を受けた年老いた父親に乳を与えようと監獄にやってくる褥婦ペーローの物語は、このローマの聖堂に付属する「監獄のなか（ｲﾝ･ｶﾙﾁｪﾚ）」で起こったことと考えられていたのである。』チノッティ「カラヴァッジオ」

『複雑な物語構図は、さまざまな解釈を引き起こしてきたが、重要な点は、構図全体を絵画的に処理したカラヴァッジオの力量であり、祭壇画のなかに、生活の悲惨さが芸術的霊感や希望に変じる、ナポリの人びとの現実を映し出していることである。人びとの群れの上には、祭壇画の真の主役である聖母子が浮かんでいる。彼らは画面の上端に追いやられてはいるが、このうえなく詩的に表現されている。色彩は重要な役割を演じているが、全体を支配しているのは光である。それは自然主義的な光（松明）でも形而上学的な光でもなく、反自然主義的な光であり、闇のなかから発する「形をうみだす光」なのである。』チノッティ「カラヴァッジオ」

この大画面（390 x 260cm）の絵は、１７世紀ナポリのすべての画家の発想源となり、造形語彙として役立ったのだそうである。

各祭壇画の手前に大きなパネルがあり、解説が付いていて英文もあるので助かった。

この主祭壇から時計回りに第 2～第 7 礼拝堂がある。
そこに掲げてある祭壇画は、次の通りである。(上記パネルによる)

第２礼拝堂　Giovan Vincengo d'Onofrio da Forli　　「良きサマリア人」(1608)　(上左図)

第３礼拝堂　Fabrizio Stanfede(1560 頃-1628)　　「イエスとサマリア人」(1612)　(上中図)

第４礼拝堂　Giovan Bernardo Azzolino, 所謂　the Sicilian(1594-1645)　　「奴隷を自由にする聖 Paulinus」(上右図)
カラヴァッジョの画では、新しく付け加えられた八番目の善行、すなわち奴隷の解放を除外しているのだが、当時ピオ・モンテ信心会が最も熱心に活動していた善行は、奴隷の解放であった。
聖 Paulinus はトルコの捕虜となり奴隷にされたキリスト教徒の解放に生涯を捧げた聖人らしいのだが(パネルの説

明による)、帰国してから種々調べても検索には掛からずそれ以上は不明である。

第５礼拝堂　Battistello Caracciolo (1578-1635)　　「脱獄する聖ペトロ」(1615)　(下左図)

第６礼拝堂　Luca Giordano(1634-1705)　　「十字架降下」(1677)　(下中図)

第７礼拝堂　Fabrizio Stanfede　　「タビタの復活」(1612)　(下右図)

教会内には、２，３人の信者らしい者しかいないので、座席に鞄を置いて祭壇画、パネルと写真を撮っていると、中年の男が現れ、荷物から絶対に手を放すなと注意された。一見信心深そうに見える人間にも心を許すなと言う事か。

世界美術大事典には、相当数の芸術家が載っているのだが、上記第 2、第 4 礼拝堂の画家は現れず、Stanfede も Battistello と Stanzione の項に出てくる程度である。

『Stanfede　は後期マニエリストに入るのだが、光の取り扱いにカラヴァッジョの影響が見られる。
Caracciolo は、ナポリにおける主要なカラヴァッジョの後継者とされているが、この画は画風が近いと言う以外に、描かれている人物もカラヴァッジョの画の中の人物に似ているとの指摘もある。
Giordano　の画のあるところには他の画があったのだが、1677 年に置き換えたらしい。Giordano　も初期にはカラヴァッジョの影響を受けたが、この画では、ピエトロ・ダ・コルトーナのスタイルになっている。』
これもパネルからの要約である。

ここでは、カラヴァッジョとその影響を受けた画家の画をゆっくり鑑賞できかつ十分に写真も撮れて大いに満ち足りた気持ちで教会を後にする事が出来た。
これでナポリのカラヴァッジョ探訪は完了とした。

バスを乗り継いで、ヌオーヴォ城の傍まで行き、そこから波止場まではすぐである。
せっかくナポリに来たのだから、カプリ島と青の洞窟ぐらいは見ておきたいと全くの観光気分でカプリ島に向かう事にしたのである。

Ｘ．カプリ島

水中翼船で、約３０分強でカプリ島マリーナ・グランデに着いた。
そこからモーターボートで【青の洞窟】（上左図）に行き、小船に乗り換えて青の洞窟に入った。
乗り換えの場所には小船が群がっていて、モーターボートの親父が手際良く観光客を捌いていた。私の乗った船の船頭は２０歳ぐらいの青年だった。

洞窟の中は青い幻想的な光が水の底から湧き出てくるようで想像していたより素晴らしい景観だった。
撮った写真もかなり良く写っていた。
そのうち青年が大声を出し始めた。どう聞いても唄には聞こえないどら声であったが、洞窟をでてから特別サービス料２０００リラを請求された。

行き帰りのモーターボートは、潮風が心地よかったが、半袖シャツ姿がたたったのかここで風邪を引いてしまったらしい。

マリーナ・グランデからケーブルカーでカプリ地区へ登り、ウンベルト一世広場のあたりを散歩したが、身体がだるい(上右図)。
ランチをとりゆっくりしてからナポリの町に戻った。。
ホテルに戻ってもひどくだるく、少し熱もあるらしい。(体温計持参せず)
持ってきた携帯用お粥(熱湯をかけると出来上がり)を造って食べ、風邪薬を飲んで就寝した。途中で２度ほど目が覚めたが、午後７時から翌朝５時半まで眠る事が出来た。
大分疲れも溜まっているらしい。

第八報 (#15923)

高島賢治さん（#15825）、PAS DE QUOI さん（#15867）
私の旅行記（６　ポンペイ）へのコメントで、ご教示を頂きありがとうございました。
先日、神奈川県立図書館で、高島さんご推薦の「ポンペイ・グラフィティ」と PAS DE QUOI さんご推薦の「ディオニュソス・バッコス崇拝の歴史」を借りて来ました。
前者は気楽に読める本ですが、後者は７００ページもあり、読み難そうな本ですね。
尚、高島さんご推薦のもう一冊「ローマ　愛の技法」は置いてなく、係員に他の図書館などの調査を依頼してあります。

【５月２９日（土）】

今日は午後１２時４０分のフライトで、シチリアのパレルモへ飛ぶ計画なので午前中多少時間は取れるつもりだったが、身体がだるく、ホテルで何となく時間を過ごした後、タクシーでナポリ空港に向かった。
ナポリ空港でも、デジタル通信機能の付いた電話機が在るのではないかと思い探したが、見当たらなかった。
この点でも地域格差が有り、進んでいるのはミラノなのである。
（実は、６月６日帰国の時、ローマの空港（国際線）でもそのような電話機が無い事がわかる。）

ＸＩ．シチリア

ナポリからパレルモは一時間足らずのフライトであった。
今回の私のシチリア旅行は、３泊４日で、シチリアにあるカラヴァッジョの絵を見るのが主であった。旅行計画確定後に見たアトムズさんのホームページ「それ行け！シチリア隊」[註]• を見て、行きたい場所を沢山知り、あと少なくとも２泊あればと思ったが後の祭りだった。

[註]• http://www.asahi-net.or.jp/~mf6t-tkhs/atoms.html
このホームページによると、アトムズさん達女3人組は、1998年7月23日～8月2日の１２日間シチリアを回っている。
そのメンバーの中にはペルージア留学中（?）のMattinaさんが入るという恵まれたグループである。

１１．１カラヴァッジョとシチリア

カラヴァッジョは、ローマでの殺人事件の後ナポリに逃亡し１６０６年１０月～１６０７年７月まで滞在した。
彼にとってナポリ滞在は極めて順調だったが、彼はそれに甘んぜず、マルタへ渡る事を望んだ。マルタ滞在は１６０８年１０月まで。
『彼が、この島に１年間留まったのは、マルタ騎士団の称号を取得したかった為で、彼はその芸術上の功績（マルタでもいくつかの大作を物にしている）により、「カヴァリエーレ・ディ・グラツィア」の称号を与えられた。

しかし、その後ここでもトラブルを起こした。カラヴァッジオは「カヴァリエーレ・ディ・ジュスティツィア」の称号をもつ貴族に手ひどい侮辱を加えたために投獄されたという。しかし、注意深く隠されていたローマでの殺人と死刑宣告の報が、騎士団の総団長の耳に届いた可能性は大きく、そのことが宗教団体の騎士の一員でいることを不可能にさせたのであろう。
そして牢からの脱獄、マルタ騎士団からの放逐という具合に、劇的な展開を遂げるのである。』　チノッティ「カラヴァッジオ」

脱獄後、カラヴァッジオは、首尾よく一番近いシチリア島に辿り着き、シラクーザに上陸した。それは１６０８年１０月の初めのことであったらしい。
（シチリア島滞在は１６０９年１０月まで）
彼はシチリアでシラクーサ、メッシーナ、パレルモに滞在し、大作を含めて相当数の画を制作している。
チノッティ「カラヴァッジオ」の記述から数えてみると９点になる。
しかし、盗難などにより、現在シチリアで見られるのは、３枚に過ぎない。
それらは、現在メッシーナとシラクーザの美術館にある。

１１．２パレルモ

現在パレルモにカラヴァッジョの画はない。一枚あった(サン・ロレンツォ祈祷堂にあった「キリストの降誕」)のだが、残念な事に、１９６９年１０月１７・１８日の夜半に盗難に遇い、現在まで取り戻されていない。
しかし、シチリア洲都であり、シチリア最大の都市でもあるバロック都市パレルモとその近くにある**モンレアーレ**をちょっと見たくて先ずパレルモに飛んだのである。

空港でレンタカーを借り、取りあえず市内のホテルに入る事にした。

（

パレルモの町は海沿いに開けた町で、その海岸線に平行に幹線道路が走っていて、空港からのハイウェイはその幹線道路の一つ(シチリア洲道路)に繋がっている。それは岡の中腹を走っていて、走行左手下に町と港が見える。
見当を付けて左折し岡を下って町の中に入っていくと、運良く比較的容易にホテルにたどり着く事が出来た。
４星　Astoria Palace Hotel（日本で予約済み)である。

モンレアーレ

市内の観光は明日にして今日は【モンレアーレ】に行って見る事にした。
ホテルで道順を教って出発したが、何時ものように道を間違え２．３回地元の人のお世話になり、モンレアーレの町に到着した。　これも毎度の事だが、駐車場を見つけるのに苦労する。
ここでは、駐車場を探してうろうろしていると、少年が現れ、駐車場への道を教えてくれた。そこはちょっとした広場になっていて、１００台程度の車でほぼ一杯になっていた。一人のお爺さんが車の留めるところを指示し、料金の徴収もやっていた。駐車料　２０００リラ。先ほどの少年はこのお爺さんの下働きなのか。

そこから繁華街を抜けてドゥオモに向かった。繁華街は狭い道路を横切ってネオンサインが約２０mおきに掛けられていて、日本の門前町とは雰囲気が違う。どちらかと言うと新宿歌舞伎町の雰囲気に似ている。
やがてドゥオモのファサード前の広場に至る。広場には棕櫚などが植えてあって南国の雰囲気を醸し出している(上左図)。
ファサード自体は、立派ではあるが、それほど印象的と言う事はない。
しかし、中に入って、その金ピカ装飾の派手やかさに驚いた。
ここは、１１７４年グリエルモ２世によって着工された。
金ピカの元である金地モザイクも１２世紀末から13世紀半ばのものらしい。
中央後陣（上右図）には、パントクラトール(全能)のキリストの下に玉座の聖母、諸天使、諸聖人などが描かれている。
身廊の壁には、旧約・新約の物語がある。
参拝者も多く、かつ雰囲気が陽気で華やかであった。ギターの伴奏を伴って合唱していた集団もあったほどである。

去年から、華やかな金地モザイクは、ローマのサンタマリア・イン・トラステヴェレ、ヴェネツィアのサンマルコと見てきたが(ラヴェンナの美しさはちょっと違う)、ここのが一番華やかなのではないかと思った。

教会の隣にある回廊(Chiostro)（左図）に入って又驚いた。
それは回廊の円柱がすべてモザイクの象嵌で華やかに飾られている事である。
ここは、ベネディクト会修道院の一部で、やはりグリエルモ２世の時代に溯のぼれるものらしい。

回廊もここ数年数多く見てきた。立派なものをいくつか挙げてみると、
スペインでは、サント・ドミンゴ・デ・シロス、ポブレ等、
フランスでは、モワサック、キュクサ、エルネ等である。

これらの中では、南仏・エルネの回廊の柱が各種の色付き大理石を使ったりして一番華やかに思っていたが、華やかさではこれもここが一番と感じた。

ホテルに戻り、体調が優れず、夕食も魚にしたが、食欲が無い。
夜中、数回猛烈な下痢に襲われ、クレオーソート、ビオフェルミンを通常の１．５倍飲んだ。

【５月３０日（日）】

朝(朝食抜き)、ホテルでダウタウンへの行き方を聞き、出発する。
Liberta 通りを南下すると、ヴェルディ広場のマッシモ劇場の横を通る。
やがて通りの名が Maqueda 通りと変わり、Quattro Canti を通過する。
通過してすぐのところに駐車出来そうな広場があったが、そこに入るタイミングを失してしまう。後でもう一度アクセスする事にした。そのままどんどん進み、結局中央駅に着いてしまった。

州立考古学博物館

そこで、先ず州立美術館に行こうと思い、そこに居たタクシーの運転手に道を尋ねた。彼は、この道をまっすぐ行けばあると指差して教えてくれた。
地図上からは変だなと思ったが、その通り進み大通りにぶっつかる。
そこに<i>(小さな小屋)があったので、そこに居た女性二人に改めて場所を尋ねた。すぐそこの建物の裏にあるという。又彼女らは、暇なのかおしゃべりで、資料(日本語のもある)も沢山くれた。
車を道端に駐車し、行ってみると、何と！それは州立美術館ではなく、【州立考古学博物館】であった。
この間違いには、いくつか原因がある。先ず私が地図を示しながら Museo の場所を尋ねたのだが、ここでは美術館は Museo ではなく、Galleria である。
又彼(女)らには、地図を示しているのだが、ちゃんと見ていないのである。
これは、何回も経験した事なのだが、地図をちゃんと見られる人は極めて少ないのだ。
一瞬呆然としたが、気を取り直して、博物館を見学する事にした。

ギリシャ時代の考古学の知識は極めて乏しいので、「公式ガイド」をたよりに一通り眺めることにした。

帰国後、少し勉強してこの項を纏めてみた。

代表的な彫刻としてアルカイック時代（前 700～480 頃）の一例とヘレニズム時代（前 330～40 頃）の一例を示す事にする。

セリヌンテ(シチリアの西南海岸近くの遺跡)の神殿遺跡の彫刻（前５．６世紀）が見事であり、Ｃ神殿、Ｅ神殿、Ｆ神殿、Ｙ神殿のものが展示されていた。

上図は、その中でも一番はっきりと残っているＣ神殿のメトープ３点で左からヘリオスの四頭立て二輪馬車、メドゥサを退治するペルセウス、ヘラクレスと
ケルコペスたちである。

この最後のものは、ヘラクレス神話の一挿話で、アルカイック時代の美術に好んで取り上げられたものという。（その挿話については、世界美術全集　３巻　参照）

下右図は、**リュシッポス派**の原作を古代ローマ時代に摸刻した「牡鹿を倒すヘラクレス」の像である。

リュシッポスは、ギリシア最後の大彫刻家（活動期　前 370 頃～310 頃）である。

車に戻り、気を落ち着けて付近を歩きまわったりして位置を確認すると、ここは、今朝通ったヴェルディ広場に近いのである。

それが分かれば容易に今朝見つけた Quattro Canti 近くの駐車場に入る事が出来た。若者がいて、昨日のモンレアーレのお爺さんと同じ役割をしていた。マルトラーナ教会の前の広場である。

Quattro Canti

先ず【Quattro Canti】（前頁左図）に行ってみた。クアットロ・カンティとは四つ角の事である。

『この街では古くから、王宮のある高台（西）からカテドラルの横を通り、海（東）に向かってまっすぐ伸びるトレド通り（現在のヴィットリオ・エマヌエーレ通り）が貫いていた。

１７世紀初頭に、これに直交するマクエーダ通りが建設され、その交差点に「クァットロ・カンティ」と呼ばれるバロックの壮麗な広場が実現したのである。

「オッタンゴロ」（八つの角）とか、「テアトロ・デル・ソーレ」（太陽の劇場）といったニックネームをもつ、まさに市民の誇るパレルモの顔としての広場となった。

四つ角のそれぞれは大きく隅切りをなされ、湾曲した美しいファサードを四面対称に見せている。ここで四つというのは、極めて大きな意味をもつ。

十字に交わる道路が分割線となって、パレルモには四つの地区（クァルティエ）が成立し、角のそれぞれの建物が地区を代表するものであった。

また四つの建物の足元に設けられた噴水は、春夏秋冬の四季をそれぞれ表現している。各建物の２層目、３層目のニッチ（壁龕）には、それぞれ４人のスペイン王と４人の守護聖人の像が象徴として置かれている。さらに、この直交する２本の道路はキリストの十字架を暗示し、さらに真四角で十字にクロスする道路をもつ都市は、天国のエルサレムのイメージから由来していると考えられるのである。多くの寓意が込められたコスモロジカルな空間なのである。』

世界美術大全集　バロックＩ　陣内秀信　「イタリア・バロツクの都市と建築」

類似のものとして頭に浮かぶのは、ローマのクアットロ・フォンターネだがここの方がはるかに規模が大きい。

ただ、交通の激しいところで、全体が煤け過ぎている感じがするのが残念な気がした。

マクエーダ通りから西に少し入ったところにある【ジェズ教会】に行ってみた。

ここはシチリアにおける最初のイエズス会教会であり、創建は１５６４年に溯る。その後１７世紀に規模を拡大していて、シチリアのバロック様式の卓越した作例とされている。

『大理石の象嵌細工と彫刻、浮き出たスタッコ細工、彫刻や絵画の豊かな装飾が豪奢な装飾マントのごとく、あらゆる処を覆

い尽している。』「公式ガイド」

　そのスタッコ細工や彫刻は、かって見た中では最も激しくフレスコを覆い尽くしていて、これはやり過ぎ、バロックの中のバロック（ミリーツィアは、「バロックとは過度のビザッロ（風変わり）、極端な奇妙さ のことである」と定義している）と言う感じがする(前頁左図)。

。　次に、駐車したところからすぐ行ける【サンタ・カテリーナ教会】に行ってみた。
　１６世紀末に建てられたものだが、内部は大理石の象嵌細工、フレスコ、彫刻で覆われていて、シチリア・バロック様式の典型とされているらしい。
　ヴォールトに大きく黄色で描かれた腕をいっぱいに広げたキリストの表現は私にとって珍しく、又迫力のあるものだった(前頁右図)。

　最後に【マルトラーナ教会】に入った。
　１１４３年に建てられたこの教会はノルマン時代建築の珠玉と言われているそうである。
　ここのモザイクも素晴らしいが、パラティーナ礼拝堂(今回行かず)のものと共にシチリア最古のモザイクなのだそうである。

　以上でパレルモの観光は完了にして、そばのカフェテリアでビールで一息いれ、ボトルの水を求めて、正午ごろメッシーナに向けて出発した。

第九報 (#15949)

　パレルモからメッシーナへの海岸に沿った道路(全長約２３０ｋｍ)は高速道路の一部中間が未完成である。
　その部分は、海岸線に沿ったカーブの激しい普通道路でスピードが出せない。
　再び高速に入って休憩所で一休み。腹の具合もまあまあなので、卵と野菜のサンドイッチとビールを取る。
　そこでメッシーナの町のホテルを研究、身体の調子も考えて道が分かり易い事を最優先にして駅のそばの Royal Palace Hotel を第一候補にした。(このホテルは、ミシュラン・レツドには出ず、公式ガイドに出ている)

　高速からメッシーナの町に降りていく道路からは、町の先にメッシーナ海峡(狭いところは数ｋｍ)を隔ててイタリア本土がはるかに広がって見えて気分がいい。

　町に入ってからは標識 "Stazione" を目標に進み、駅のそばにある４星ホテル　Royal Palace Hotel に車を着け、問題なくチェックイン出来た。午後４時を回っていた。

１１．３メッシーナ

　お茶と佃煮と梅干しで一息ついたが、又下痢をした。
　考えてみると、去年の旅行でも後半下痢に悩まされた。
　それで考えてみると、佃煮と梅干しが怪しく思われてきた。近年の佃煮や梅干しは、塩分が薄く、旅行中の環境(車の後ろの荷物入れの中はかなりの高温)に耐えられるかどうか疑問になってきたのである。
　それで残っているものはすべて捨てる事にした。次回からは、少さな缶詰を複数個とかを再検討する事にしよう。

　それでも、少しは食事をしないと旅行が続けられないと思い、午後８時過ぎホテルのレストランで、スープと水だけの夕食を取った。スープは、豆、人参、じゃが芋などの煮込んだものだった。

　このホテルの部屋の電話機は、モデムが接続可能だった。
　友人、娘よりのメールを受信した。
　nifty のこの部屋にも久しぶりでアップした。(#15320)　アクセス・ポイントはローマである。
＞ナポリも無事に終わり、今シチリヤ島メッシーナにいます。
＞ここでやっと久しぶりに通信出来るホテルに巡りあえました。

(以下省略)

【５月３１日（月）】

州立博物館

【州立博物館】は、市街から少し離れていて、ホテルで貰った地図や、「公式ガイド」の市街地図にも出ていない。それでホテルの受付で道順を聞き、出発した。

博物館は、海岸沿いのリベルタ通りから少し登った小高いところにあり、駐車場がなく、そばの細い道に駐車した。

ここにはカラヴァッジョの画が２枚ある。

その一つは**「ラザロの蘇生」（下左図）**(380 x 275cm)である。

『カラヴァッジオは、包帯を体中に巻かれたラザロが直立している伝統的な場面からも、直接良く知っている後期マニエリスムの作例からも完全に離れて、主題のまったく新しい解釈を示している。

ルーヴル美術館の《聖母の死》やシラクーザの《聖女ルキアの埋葬》を想起させる、横からの光を受けたラザロの顔の仰視表現、《聖マタイの召命》を反復するキリストの堂々としたジェスチャーなど、カラヴァッジオの他の作品と重なり合う要素が見出される。キリストの手首の上には、すでにオデッサの《キリストの逮捕》でも見られた横顔の自画像が見られる。

この作品では、主題は死からの蘇生であるにもかかわらず、構図の中心をなすのは、覚醒するというより絶命していくような表情をしたラザロの姿である。　こうした死の観念は、ローマ逃亡以後、カラヴァッジオの晩年にずっと彼の頭に取りついて離れなかった。しかしそれはまた、福音書のエピソードをキリストの復活や最後の審判の日における人間の復活と同一視する教義的着想でもある。この絵に大きな魅力を与えているのは、自分自身に対してではなく他のあらゆる人間に対する恩寵を信じるラザロの形象のこの両義性なのである。

様式的には晩年独特の特徴が見られるが（奥行きをわずかに異にする二、三の平面からなる圧するような壁体ー空間に比べて、人物は小さく表されている）、構図は、著しく複雑な構造と運動の感覚ーー面の交差や、対角線、平行線、三角形、直角、曲線の、交錯、対置、整然たる配置ーーを回復している。

キリストの腕の上に「斬られた」ような頭部を配する着想は卓抜である。　粗描きのテクニックが、とりわけ頭部では、完結した画法として使われているが、それは、悲劇性の集約されたマルタとラザロの接近した二つの顔において、最も強烈な生彩を放っている。』チノッティ「カラヴァッジオ」

もう一枚が「羊飼いの礼拝」（前頁右図）(314 x 211cm)である。

『祭壇画《ラザロの蘇生》がきっかけで、メッシーナの評議会はカラヴァッジオに公的な委嘱を行った。それは、カプチン修道会の聖堂であったサンタ・マリア・デリ・アンジェリ・フオーリ・レ・ムーラ聖堂のための《羊飼いの礼拝》で、シチリア島でもっとも人びとから愛されている作品である。』

『この絵は晩年のすべての作品にみられる瞑想と悲嘆の感覚を強調しつつも、フィリッポ・ネーリのオラトリオ修道会士たちの詩的な清貧主義を想い起こさせる。しかしこの作品を「貧しき降誕図」としている主たる要因は、人物と事物を徹底して本質的なものだけにしぼり込むという、芸術上の動機によるのである。

際立った彫塑性をもって突き出したむき出しの肩の表現は、ナポリの《キリストの鞭打》を想い起こさせ、マドリードの《洗礼者の首を持つサロメ》の死刑執行人を直接先取りしている。

聖母の形象を引き伸ばされた楕円形に収める着想は、非常に優雅で洗練された幾何学の感覚に基づいており、若い時期の作品が想い起こされる。幾何学的着想がこの絵を支配しており、色彩と光がこの着想のために動員されている。』チノッティ「カラヴァッジオ」

『この《羊飼いの礼拝》には、１７世紀絵画の中で最も美しい表現の一つである羊飼いが描かれているが、しかし、この絵は何ら牧歌的でも、のどかでもない。「救世主」の誕生に対する喜びが、彼を待ち受ける苦悩と死の運命に対する悲しみの陰に隠れてしまっている。深い悲しみが画面全体を覆い、死が迫っている事を感じさせるのである。』

ボンサンティ「カラヴァッジョ」

この博物館には、このほかカラヴァッジョがシチリアの画家たちに与えた影響をうかがわせる作品(メッシーナ出身のアロンソ・ロドリゲスの作品「エマオの晩餐」、「聖トマスの不信」)がある。

この博物館は、写真撮影が可能なのでありがたい。目ぼしいものは、かなり写真を撮った。

勿論、このほかにも１２世紀以降の画が数多く展示されているのだが、有名なものとしては、アントネッロ・ダ・メッシーナ(1430 頃～1479)の「聖グレゴリウスの多翼祭壇画」(1473 年)がある。(保存状態は良くない)

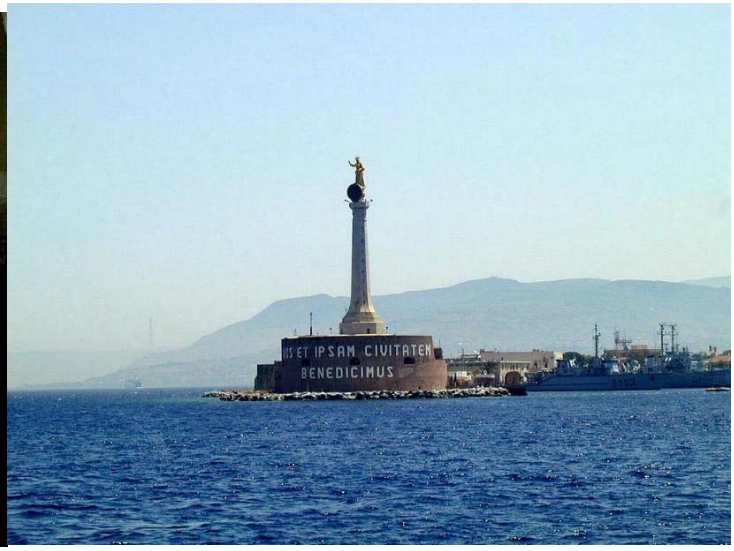
これでメッシーナに来た主目的は済んだので市街に戻り、ドゥオーモの近くに駐車し、少し散歩する事にした。

【ドゥオーモ】は、ルッジェーロ２世によって創建され、１１９７年に献堂されたものである。中世時の輪郭をおおむね再現しているという現在の外観は、１９４３年の爆撃後の再建工事によるもの。

左隣に鐘楼を持つファサードは、３つの扉口を持ちそのいずれも小さなタンパンを持っているのだが、それらには小さな聖母子像が飾られていて、壁面の色調を含め、全体として極めて清楚な印象を受けた。

少し離れたところにある【サンティッシマ・アヌンツィアータ・デイ・カタラーニ教会】を訪れた。

ここはノルマン時代の１２世紀後半に創建されたものである。



外観も、内部もアラブの影響が強く感じられる。特に内部の白と赤の色違い煉瓦によって組まれたアーチやヴォールトからは、コルドバのメスキータを思い出させるものがあった(前頁左図)。

そこから歩いてすぐのところにある港に立ち寄ってみた。
海を越えて約１００ｍ？のところが丁度防波堤の先端になっているのだが、そこに金色に輝く聖母像が高く掲げられている。町の守護聖人が「書簡の聖母」と「公式ガイド」にあるから、多分聖母像なのであろう。
その先に薄く本土が見える(前頁右図)。
暫くのんびりと風景を眺めた後、カフェテリアでビールで一息入れ、シラクーザに向かって出発した。

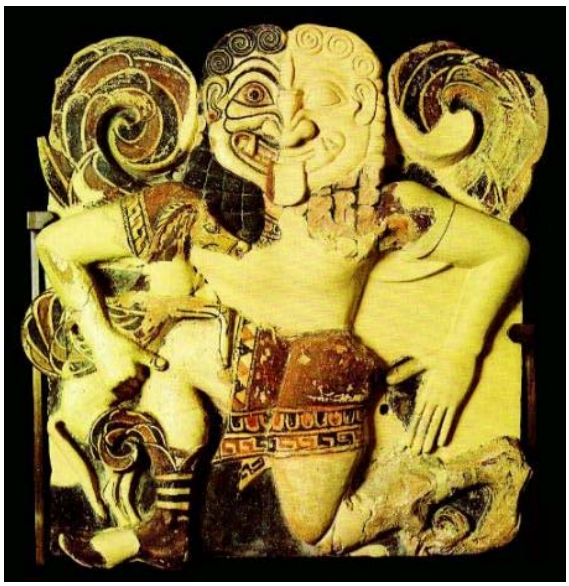
１１．４シラクーザ

メッシーナからシラクーザは、１５８ｋｍ離れているが、途中のカターニア(９３ｋｍ)の先までは高速道路である。
そこから普通道路に合流する時に、今年のイタリア旅行のドライブでは、最も危ない目にあった。
それは、私の感覚では十分余裕を取って２．３台やり過ごして合流しようとした積もりだったのだが、青い色の大型観光バスが強引に突っ込んできて、私は衝突を回避するべくハンドルを切ったが、ガードレールにこすってしまったのである。
暴力団で有名なシチリアで、この件以外には恐い経験は全く無かったのだが、このバスの運転手は暴力ドライバーである。しかも、この青い観光バスの暴力的運転の被害を、明日再び被る事になるのであった。
なんと言う観光バスの会社か知らないが、これこそシチリアの暴力団と言っても良いだろう。
皆さんもシチリアでドライブする時は、青い観光バスには気をつけて下さい。

シラクーザの町に入っていくと、異様な高い塔が目に飛び込んできた。
(左図。図中左の遺跡はサン・ジョバンニのカタコンベ　)
そのそばに駐車し、ミシュラン・レッドや「公式ガイド」でこれが【マドンナ・デッレ・ラクリメの聖所記念堂】である事、及び近くに<i>がある事が分かった。
記念堂には後で来る事にして、先ず<i>に行ってみたが未だ昼休み中で閉まっていた。
そこで、又車に戻って調べると、Forte Agip という４星ホテルが、<i>のすぐ裏にある事が分かった。このホテルもミシュラン・レツドには出ず、「公式ガイド」にあるものである。
それでホテルの大きな駐車場に車を留め、チェック・インした。午後２時半頃だった。

州立パオロ・オルシ考古学博物館

一休み後、身体もだるい(この一両日まともに食事をしていない)ので、今日はこの近くの散歩で過ごす事にした。
先ず、<i>からすぐのところにある【サン・ジョバンニのカタコンベ】に行ってみたが、ここは７月まで休みになっていた。(「公式ガイド」では開いている筈なのだが)
それで近くにある、「公式ガイド」では本日月曜日は休館の筈の【州立パオロ・オルシ考古学博物館】(次頁左図)に行ってみた。すると本日も午後３時半からオープンとなっていた。開館まで１０分ほど待って、入る事にした。



この博物館は、シチリアで最も重要な博物館で、ヨーロッパ有数の博物館のひとつとの事である。面積延べ９０００ｍ２、収蔵品は１万８千点を越える。
先史時代から初期キリスト教時代までに、この地域で次々に興った文明の様子が説明されている。
展示は、Ａ区(先史時代からギリシャ植民時代直前まで)、Ｂ区(ギリシャ植民時代)、Ｃ区(シラクーザの植民都市など)に分けられ、いずれもその展示は膨大である。
しかし写真撮影禁止になっていたので、この分野の知識の持ち合わせが乏しい事と相俟って、何を見たのかはっきり思い出せない。
ただ、有名な「アフロデイテのヴィーナス」に顔が無かった事と、これも「公式ガイド」で２星のついている「勝利の女神像」が、係員に尋ねても誰もなかなか分からず(私の英語の表現と係員の英語力の関係もあるが)、多分これだろうと連れていってもらったものが、誠に異様な怪物の様な表情の女神像であった事が強く記憶に残っている。

この女神像について、帰国後調べて見ると世界美術大全集の３巻に出て居てそれによると「メドゥーサ」像(上右図)となっていた。それなら異様な怪物の様な表情も分かる。
『アルカイック時代のギリシア神殿には魔除けとして怪物ゴルゴンの形象が飾られることがしばしばあった。
ゴルゴンは神話の上ではペルセウスに退治される醜い怪物とみなされているが、その前身はギリシアの地において古くから崇拝されていた豊穣の女神であった。すなわちギリ
シア人が北方からギリシア地方に移住する以前に、この地域の先住民族の信仰していた母親神が、ゴルゴンの本来の姿であった。先住民の神格は移住したギリシア人によって
醜い怪物とみなされ、英雄によって倒されるべき邪悪な化け物として神話中に描かれるに至ったのである。首を切られたメドゥーサが神馬やクリュサオルを生んだとするギリ
シア時代の伝説は、より古い時代の母親神の多産性を記憶し伝えるものにほかならない。醜悪な化け物でありながら同時に神殿を守護する者という、聖と悪の共存するゴル
ゴンの矛盾した性格は、こうした歴史的出自に由来するのだろう。』　世界美術大全集　３巻　長田年弘
私の見たのは、「勝利の女神像」ではなかったのか？

次に、ここからすぐのところにある【マドンナ・デッレ・ラクリメの聖所記念堂】(次頁左図)を訪れた。
この巨大な円錐形の建物(高さ約９０ｍ)は、１９５３年に奇跡が起こったとされる場所に建てられたものだが、大工事と資金不足の為、完成までは随分長く掛かったらしい。
中に入ってみたが、近代的で巨大な空間と言うしかないものだった(次頁右図)。

帰りに<i>に寄ってみると開いていて、市街地図(ここのは大きくて立派)、開館時間の入った案内資料などを貰った。

夕食はホテルで又スープにした。
Zupa de Verdura は野菜のスープで豆、人参などの入ったもので想像通りだったが、Zupa de Pesce は、魚のスープでブイヤベーズ的なものを想定したのだが(他ではそうだった事がある)、ぜんぜん違って魚介類がいろいろ皿の上に乗ったものだった。これは消化の良さそうなものだけを選んでとる事にした。

このホテルは、中々近代的で、テーブルの前の壁にモジュラージャックの孔がついていた。早速試してみたが、通信しようとするとパソコンに「混雑」との表示が出て繋がらない。
夜中にもう一度試みる事にして、午後１０時頃就寝した。

【６月１日（火）】

午前２時に目が覚めたので、再び通信を試みた。
いろいろ試みたが旨く行かず、念の為と「パルス」接続にしてみると、何と！通信できたのである。
ちゃんとしたモジュラージャックの孔がついているのは進んでいるのだが、「パルス」方式とは、何と言うアンバランスなのか。
これこそシチリアだと感じいったのだが、実は次に泊まったローマのホテルもそうだったのである。
即ち、これはシチリアだからではなく、イタリア全体のインフラの整備が遅れていている事によるのだった。

もう６月に入ったので、帰国後の事が少しは気に掛かりだした。
私が関係している団体の常任幹事の皆さんに、出国前に検討を依頼していた件があり（中旬に討論の為の臨時会議を予定している）、そろそろ結果も纏まっているかと思い、メールを送った。
次の滞在地ローマに結果をメールで貰い、討論をしてみようというのである。

午前３時過ぎ再び就寝した。

第十報（#15965）

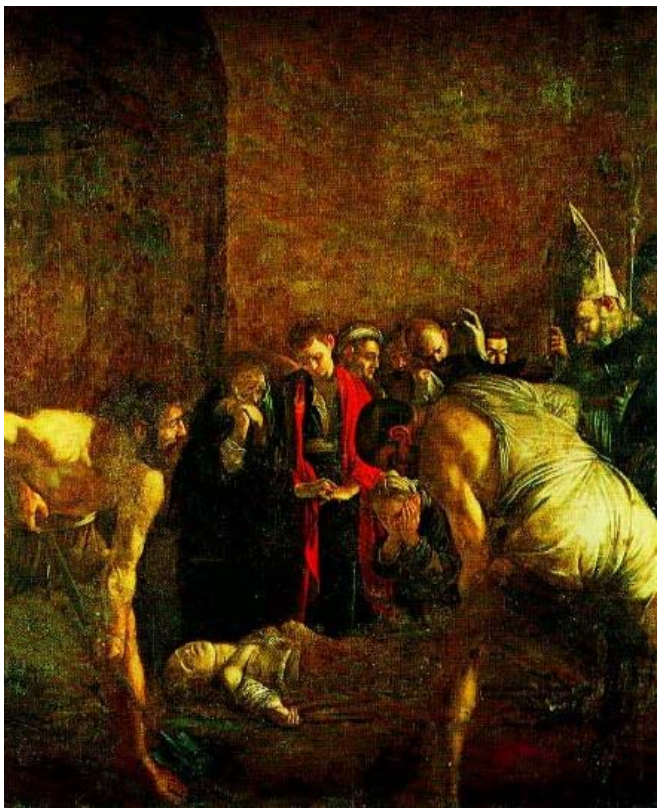
州立美術館

朝ホテルで道順を聞き、オルティジア島に向かった。

橋を渡り島に入り、州立美術館を目指して走ったが、島の中は一方交通が多く、又道路の端には隙間なく駐車されていて、旨く近いところに駐車できなかった。

島の中を２回ほど回ったのだが、結局それは諦めて、橋を渡ったところの大きな駐車場に車を留め（ここにも取り仕切っている男がいた）、近くのパンカーリ広場からタクシーで【州立美術館】に行った。

運転手は、初め美術館と言ってもなかなか通じず、ベッローモ館と言ってやっと分かる始末だった。あまり観光客の行くところではないのかもしれない。



ここにはカラヴァッジョの「聖女ルキアの埋葬」（上左図）（408 x 300cm）がある。

『これはカラヴァッジョのシチリアの最初の仕事であり、サンタ・ルチア聖堂のための祭壇画であった。作品は傷みと加筆が甚だしいため、ローマ中央修復研究所での徹底的な修復作業の後、海に近い聖堂の湿気を避けるために、ここの美術館に保管されているのである。』

聖女ルキア又はルチアは、シラクーザで生まれ、ここで殉教した聖人で、シラクーザの守護聖人である。

『埋葬という主題は、聖女ルキアの図像表現においてはむしろ珍しいものだが、この主題は、この祭壇画が彼女の殉教が行われたと伝えられる場所に立つ聖堂のためのものということと関連している。

ディオクレティアヌス帝時代の若くて裕福なシラクーザの娘ルキアは、処女のままでいることを決心していたが、婚約者が彼女がキリスト教徒であることを告発したため、処刑されてしまった。場面はカタコンベの入口ないし内部に設定されているが、これは多分カラヴァッジオが訪れた古代の石牢（ラトミア・デル・パラディーゾ）を描いているのであろう（後節を参照）。

マルタ島での《洗礼者聖ヨハネの斬首》や《ラザロの蘇生》と同様、構図は、空間の半分を占めているばかりか、諸人物とともに主役の役を果たしている。のしかぶさるような巨大な壁を背景に、組み立てられている。それと平行に組み立てられて前景の地面に横たわるルキアの亡骸の上に、悲嘆にくれる人びとが垂直の列をなして立ち、さらに手前の両側に画面からはみ出さんばかりの巨大な二人の墓掘り人夫が配されているが、これは卓抜な着想というべきであろう。

聖女の身体にはカラヴァツジオの最も大胆な短縮法表現のひとつが見られる。右肩と右手の間は３０センチメートルもない。

Ｘ線による調査から、最初の段階ではルキアの首は胴体から切り離されていたことが分かった。奥行きに逆らう空間の表現において重要な役割を演じているのは、光である。光は、右側から射し込んできて形体を浮かび上がらせ、うす暗い透明な調子によって形体どうしを結びつけている。マルタ島時代の大型祭壇画にすでに見出されるこうした重厚な色調は、晩年の作品に典型的なものであり、そこでは地塗りの基調色が広範囲に生かされている。唯一の鮮やかな色は、助祭の衣裳の赤で、これはここに居るすべての人びとの悲しみを集約し、聖女の蒼白さを際立たせる象徴的な色である。カラヴァッジオの絵画的構想のなかでは、中心人物はこの助祭なのである。筆のタッチ、断続的な筆遣い、そして渋い光の輝きによって、カラヴァッジオは比類なく繊細で力強い構図をつくりあげており、そのなかで人物たらは普遍的な苛悩を体現している。』チノッティ「カラヴァッジオ」

聖女ルキアの通常の画像とは何か、「キリスト教美術図典」で調べてみた結果が興味深いので紹介する。

『彼女の持物は一般に皿や杯にのせられた二つの眼球、ときにはそれが掌中にあったり、短剣の切っ先に突き刺さったりしている。

それはLuciaが光を意味することから生まれた後代の伝説で、求婚者の１人が彼女の美にうたれ憔悴すると聞いて、自分の目がその原因であると目をくりぬいて与えた。男はその信仰心に感じて、改宗した。しかし彼女が祈ると目は回復し、以前にまさる美貌となったという。画像は彼女は眼病の守護聖人となっている事から来ている。』

目玉を刳り貫く話が面白い。ふと私は２年前、出羽三山を回ったとき知った注連寺の即身仏「鉄門海上人」の話を思い出した。

鉄門海上人は、生前から死後まで波瀾万丈だった。ここに簡単に紹介する。

上人は、鶴岡大宝寺に生まれた荒くれで、青龍寺川の水争いから武士２名を殺し、逃れて注連寺に至って木食行者となり、湯殿山仙人沢に参籠した。そこへ馴染の女が追ってきたが、自らの男根を切って女に渡し、もはや俗念を断ったことのあかしとした。その後、江戸に登って眼病の流行するのを見、われとわが左目をくり抜いて隅田川に投じ眼病退散を祈願した。

本明寺、海向寺の再建、南岳寺、盛岡の金剛珠院などの建立など幅広い活躍をし、今でも鉄門海の碑は東北一円から関東にも及び多く見られる。

ちょっと話しが脱線しすぎたようだ。

この美術館のもう一つの有名な絵は、**アントネッロ・ダ・メッシーナ**(1430頃～1479)の**「受胎告知」（前頁右図）**（1474）である。

これは、板に描かれたものをカンヴァスに移行したものだが、落剥が多い。

アントネッロの生涯は謎に包まれている部分が多いのだが、１４７５年ヴェネツィアに招かれ、そこに翌７６年中頃まで滞在する。そこで彼も「ヴェネツィア化」された画家に変貌するとともに、１５世紀末のヴェネツィアの画家たちに深い影響を与えたといわれる。

この絵は、ヴェツィアに行く少し前に描かれたものだが、『室内空間の遠近法的構成や、人物と事物の明晰で規則化された量感表現（とくに最前景の円柱に注目）にピエロ・デッラ・フランチェスカの影響が感じられるが、全体の画像構成はある種のフランドル主義への回帰を示している。』森田義之　「世界美術大全集」１３　イタリア・ルネサンス３

美術館を出て、狭い道を通って【ドゥオーモ広場】に出る。

オルティジア島の最も高い場所にあるこの広場は、前ギリシャ期から至聖所であった場所で、１６９３年の地震後にシチリアのバロック様式で再建された周囲の建物によって全体として華やかな印象を与える。

【ドゥオーモ】は、前５世紀に起源をもつドーリア式の古代のアテナ神殿を７世紀に改造してできたもので、後にノルマン時代と１６世紀に改修され、１７～１８世紀に大規模な再建工事が行われた。

ドゥオーモのファサードは、堂々としたバロック様式で、両脇に２層に２本づつ建っている巨大な柱と、上部に飾られた大きな彫像が印象的である。
それに反して、内部はきらびやかさの殆ど無い、落ち着いた雰囲気に満たされていた。

そこから少し歩くと【アルキメーデ広場】(前頁図)に至る。
この名はギリシャ時代の有名な数学者・物理学者アルキメデスに由来する。
彼は、ここシラクーザで活躍し、前２１２年町がローマ軍に包囲された時は、新しく発明した武器を用いてローマ軍を悩ませた。しかし町が陥落後ローマ軍に殺害されている。
あまり大きな広場ではないが、広場中央に大きなアルテミス女神の泉（１８世紀）がある。その中央に弓矢を背にしたアルテミスがすっくと立ち、周りに噴水を浴びながらニンフ達や馬などの彫像群が躍動していた。

ギリシャ劇場

これでオルティージャ島の観光を終え、昨夜泊まったホテルのそばにある【ネアポリス考古学公園】に向かった。
ここは、ギリシャ人とローマ人が活躍したシラクーザの古典期の記念建造物の大部分が集まっている。
公園の入り口の門の近くに駐車し、【ギリシャ劇場】（上左図）に入ってみた。
ここは、前５世紀に建造され、前３世紀に拡張されたもので、１万５千人を収容できる大劇場だった。ギリシャ３大悲劇詩人のひとり、アイキュロスの「ペルシャ人たち」が初演（前４７０年頃）されたのもこの劇場だったという。
青空の下、上まで登って見下ろせば、白い舞台のかなたにシラクーザの町並みとはるかに広がるイオニア海が展望でき、炎天下ではあったが、すがすがしい気分になった。
すぐ傍の【天国の石切り場】にも行ってみた。
この付近には、シラクーザの城壁と建物を建設するために石灰岩を切り出した石切り場の跡が沢山あるのだが、その中で最大規模で有名なのが、ここである。その中に有名な【ディオニュシオスの耳】(上右図)がある。
これは、長さ８５m、幅５～１１m、高さ２３mの人工の洞窟であり、尖頭アーチのように上に行くに従って幅が狭くなっている。
『短いシラクーザ滞在中に、カラヴァッジオは考古学者ヴィンチェンツォ・ミラベッラと知り会いになった。ミラベッラは、１６１３年の自著のなかで、カラヴァッジオを僭主ディオニュシオスの牢獄ラトミアを見せに連れていったと回想しているが、この牢獄は、反響が良いためにこの僭主が１人１人たちの喋っていることを聴くことのできる洞窟として有名だった。響きの

良いこの牢獄が人の耳の形に掘られているのを見て、それを「ディオニュシオスの耳」と名付けたのは、「自然物の形を鋭く察知する才に富んだ」（ミラベッラ）、カラヴァッジオであったのだろう。この逸話は、カラヴァッジオの自然主義の評判がいかに高いものであったかを証拠立てている。』　チノッティ「カラヴァッジョ」

次に【古代ローマの円形闘技場】を見て、シラクーザの観光を完了としてカターニア空港に向かった。
腹の具合も良くなってきたように思われたので、途中で道端のカフェテリアに立ち寄り、スパゲティ・カルボナーラとビールで一息入れた。

空港でレンタカーを返す。返却時、fine かと聞かれたが、昨日「こすった」事など言い出せば面倒なので everything fine と答えておいた。その後、何に言ってこないので問題なかったのだろう。
これで今年のレンタカーの旅は完了した。
次の今回最後の滞在地ローマでは、今回は地下鉄とバスだけにする積もりなのだ。
一昨年は左ドア・ガラスの爆発、昨年はドア・ミラーの破損と言うトラブルがあったが、今年のレンタカーの旅はどうやら無事に済ます事が出来た。
これでほっとしてチェック・イン・カウンターに行ったのだがここで一悶着あった。
私のチケットは、グループ旅行のものなのだが、カターニァ・ローマ間は普通のチケットの上に違うチケットが貼ってある。これは計画の途中でシチリアからローマへのルートをパレルモ・ローマからカターニァ・ローマに変更したからかもしれない。係員がこのチケットは、プロモーション用のチケツトで、これはローマからその日のうちに次の目的地（私の場合は成田）に飛ばなければならないものだと主張して退かないのである。
ここですったもんだ、係員が２．３個所に飛んで行って相談していたが、結局了解という事になった。

本当の事情は分からないが、ここは小さい田舎の空港なので、実際の商売上種々のチケットが流通している複雑な取り引き事情などに疎いのではないかと想像してみた。

飛行機は定刻通り午後５時にローマに向けて出発した。

１１．５シチリア以降のカラヴァッジョ

（１６０９年１０月～１６１０年7月１８日）
『マルタ島からの逃亡において、シチリア島はナポリへ戻るための中継地に過ぎなかった。ナポリはローマに近かったし、追放令の恩赦のための折衝にも都合がよかったのである。彼がナポリに居たことは、ある流血沙汰ーーチェッリリオの居酒屋の入口で引き起こした喧嘩ーーによって知られる。　１６０９年１０月２４日、ローマの情報提供者からウルビーノ公爵に送られた「報告」には、彼が殺されたか、あるいは顔に傷を負った、と記されている。
この事件にはバリオーネも言及しているが（「数多くの傷のためほとんど彼と見分けがつかないほどであった」）、彼は、これらはすべて、シチリアからナポリまで彼を追跡する使命をおびていたマルタ島の「敵」の仕業であったと考えている。』
しかしここでカラヴァッジョは翌年７月までにかなりの画を描いている。
その内の２，３はローマ・ボルゲーゼ美術館で見る予定である。
『そして、１６１０年７月の初めか、やや後に、彼はまさしく一枚の《洗礼者聖ヨハネ》の絵（おそらく現在ボルゲーゼ美術館にある作品）を含む身のまわりの品を積み込んで、二本マストの小型船で、ローマへ向けて出航したのである。』
その後７月１８日にはカラヴァッジョは死ぬのだが、この間の経緯についてはいろいろ説がある。ここではその中では一番信じられているらしい話を記す事にする。
『ゴンザーガ枢機卿の交渉によって実現したパウルス五世の恩赦の公式の知らせは、まだ届いていなかった。このため、カラヴァッジオはローマ教皇領の海岸にではなく、アルジェンタリオ山の麓にあるナポリ王国領の海岸に上陸した。そして人違いのために、彼はスペイン衛兵に捕らえられてしまった。解放されると、消えてしまった彼の小型船を探して７月の灼熱の太陽の下、海辺を必死に歩き回った。そして、ついに悪性の熱病にかかり、数日のうちにポルト・エルコレで息絶えたのであった。』
ポルト・エルコレは、ローマの北西約１２０ｋｍのところにある港町で、ナポリからはローマをだいぶ行き過ぎた場所である。

『主人公が舞台を降りた今、この苦悩に満ちた生涯の決算をすることができるだろう。カラヴァッジオが望んだことは正常

なことであった。働き、稼ぎ、人に抜きん出た地位を得、仲間と一緒にいること。ただ彼の才能と性格の常軌を逸した力が、この当たりまえの要求を、うち続く悲劇で色づけてしまったのである。彼が起こした事件は、彼の天才的な気質、暴力的で競争心に富んだ気質と重なり合うが、事件が芸術家の心に直接何を刻みつけたのかが解明されなければ、それらはあまり重要なものとは言えないのである。』

『内面的な原理に従って展開した彼の人生において、１６０６年５月の殺人事件は、私見では彼にそれほど大きな心理的衝撃を与えるものではなかった。古今の注釈者はこの殺人に晩年の人生と芸術の絶望感を解く鍵を見出してきた。

私の考えでは、カラヴァッジオは一般的な意味での「人殺し」の意識をまったく感じていなかったと思われる。この事件は、当時頻繁にみられた決闘とよく似た、喧嘩の最中に起きたことで、彼自身もそれで重傷を負ったのである。

それなくしては決して立ち去らなかったであろうローマから、カラヴァッジオを無理やり引き離して他の町を遍歴させ、彼の芸術に新しい刺激を与えたこと、そして彼の直接の影響を受けることになる町々の新しい運命を決定づけたことにおいて、この事件ははかり知れない価値をもっている。

カラヴァッジオの人間と精神の推移は、晩年の作品やローマ時代の最後の事件が示すように、正義か不正義かを問わず、社会の約束事と、太刀打ちできない武器で戦おうとする意識をますます増幅させていったが、その戦いは、絵画を本質的なものに凝縮することによって、画布の上でのみ勝利を収めうる類いのものであった。それは、聖体拝領を受けていたにもかかわらず、良いカトリック教徒とは言えず、彼の時代の信仰の枠内で信仰の人であったカラヴァッジオにとって、神のなかに自らの生の唯一つの正当化を見出すために世のしがらみから自分を解放する信仰者の行為と、等価値の行為であった。１７世紀のヨーロッパ絵画の別の二人の巨匠、写実家ベラスケスと幻視家レンブラントとは異なり、カラヴァッジオは、隠された意味で満たされた自然主義というメッセージを我々に残したのであり、それが彼の芸術の読解を魅力的なものにしているのである。』
以上の『』内はすべて　チノッティ「カラヴァッジオ」

このチノッティの歴史感は、私の「歴史とは糾える縄のごときもので、善悪などを超越した人類の巨大なエネルギーの流れの発露である」という歴史観に近いもので納得出来るものである。

第十一報 (#16002)

★ローマ・愛の技法

高島賢治さんご推薦の「ローマ　愛の技法」ようやく入手出来ました。
相模原市立図書館のものを県立図書館経由で借りたのです。

それで、高島さんがどこかで内容も紹介しているのかも知れませんが、私の今回の旅行との関連に重点を置いて紹介してみます。

この本は、Michael Grant "Eros in Pompei"を書籍情報社編集部が訳したものがベースになっているですが、この編集部が加えた部分がかなりあり、それが必ずしも明確でないところがある点が多少気になります。

ナポリ考古学博物館の有名なアレキサンダー大王のモザイクが展示されている部屋の後ろに別の部屋があり、そこには公開禁止になっている、ポンペイで発掘されたエロティックな作品（壁画、彫像など）が約２５０点も収蔵されているのだそうであり、それをグラント教授（元ケンブリッジ大学教授）の監修のもとに公開したのが"Eros in Pompei"なのです。

本「ローマ　愛の技法」には、このほかヴェッティの家や「ルパナーレ」で現在公開されている壁画なども加わっています。

大きなカラー図版が数十点入ったこの本は、しっかりした出版社ならもっと厳密である筈の上記の気になる点はありますが、気楽に読める楽しい本でした。

又この本は私が持った疑問点、即ち発掘の初期の段階では、エロティックな芸術品は無かったのだろうか、ヴェッティの家の主人は特別好色なのかと言う疑問に答えるものでした。

それはポンペイ中に広く流行していたものだったのです。

ＸⅡ．ローマ

ローマ・フィウミチーノ空港からテルミニ駅まで鉄道で行き、そこからホテルは近い（約３００m）のだが、タクシーを利用した。タクシーはぐるぐる回って４万リラもとられた。正規の乗り場から乗った積もりなのだが、ぼられたらしい。

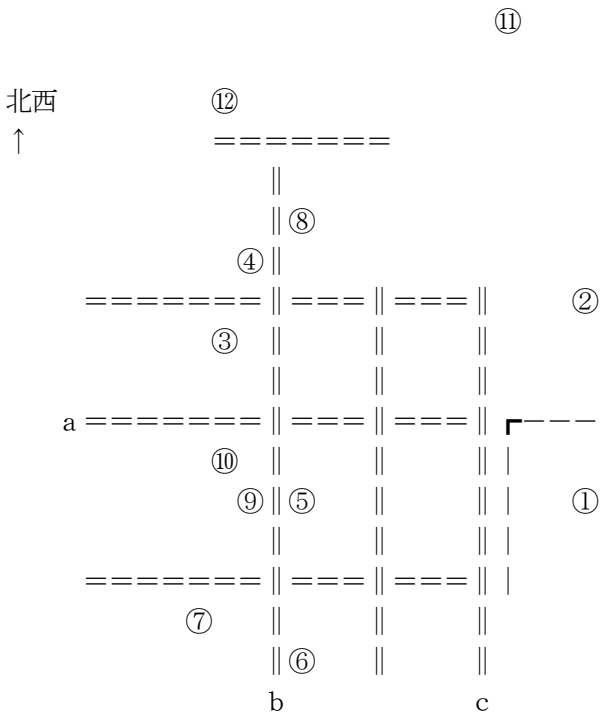
今回の３星ホテル　サン・レモは、安かったので５泊を日本で予約しておいた。去年はそのそばの４星ホテル　ウニヴェルソを頼んだのだが、高かったので２泊だけにして、後はこれもそばにある　３星ホテル　ツーリングに乗り換えたのだった。

１２．１テルミニ駅近辺

去年も含めると、この界隈に１１泊もする事になる。この近辺は知っている人も多いと思い、付近の略図を書いてみた。

先ずホテルのフロントでラウンドリー・サービスについて尋ねると、やっていないとの事。しかし近くにラウンドリーがあると言って地図に印を付けてくれた。

その場所は、次ページの地図で⑤のあたりである。このあたりには去年４泊もしたホテル・ツーリングがあるのだが、気が付かなったのでおかしいなと思いつつ、明朝行って見る事にした。



ａ：カヴール通り　　ｂ：プリンシペ・アマデオ通り　　ｃ：ジョヴァンニ・ジョリッティ通り
①：テルミニ駅　②：五百人広場　③：ホテル　サン・レモ　　④：ホテル　ウニヴェルソ
⑤：ホテル　ツーリング　　⑥：コイン・ラウンドリ　⑦：トラットリア　ヌオーヴォ・ステラ
⑧：トラットリア　エスト・エスト・エスト　　⑨：トラットリア　トモコ　　⑩：雑貨屋
⑪：共和国広場　　⑫：オペラ座

①～⑪は、今後この旅行記に出て来ます。

このホテルの電話機は、モジュラージャックになっているので、パソコンが繋がるのだが、接続の孔がベッドの下になっているので、接続しにくい。

それでも繋いでトライしたが繋がらず、又明朝トライする事にして、食欲も無いのでそのまま就寝した。

【６月２日（水）】

午前４時に目が覚め、通信トライ。驚いた事にはここも「パルス」方式だった。

本旅行記第九報の最後に記した常任幹事の一人K氏から報告が送られてきていたが、情報が大きすぎて、（エクセルのテーブルとグラフを送ったらしい）、受信にえらく時間が掛かりそうなので途中で打ち切り、結論と考察だけをテキストファイルで再送付するよう依頼した。

実は、通信速度が 2400bps と極端に遅い事を知らせるのを忘れていたのである。

朝、洗濯物をビニール袋に詰めて、昨日フロントに教わったあたりに行ってみたが、それらしい店は無い。イタリア人の言

う事はあまり信用出来ない事は分かっているので、その付近を捜すと、一つ通りを過ぎたところ（⑥）にコイン・ラウンドリーがあった。
　そこのおばさんに使い方を教わって、洗濯機を動かし（洗剤が１５００リラ、洗濯機が６０００リラ）、４０分かかるというので、その間にテルミニ駅（①）の<i>に行く事にした。
　<i>で市街地図と、開館情報のプリントした紙を貰う。
又、駅の構内のスタンドで、交通の一日券を購入。さらにミシュラン・グリーンの「ローマ」があったのでその英語版を購入した。その時も、置いてあったのがイタリア語版だったので、英語版が無いか尋ねると、私の持っているのがそうだと言って他の仕事をしだした。私が大声で「良く見ろ、これが英語か」と突きつけると、やっと英語版を探し出した始末だった。
　コイン・ラウンドリーに戻り、洗濯が終わると次は乾燥機（これも６０００リラ）である。乾燥が終わるまで（約２０分）、そばで開館情報の勉強をした。

　カビトリーニ美術館は修理の為閉館だった。ここには、カラヴァッジョの「洗礼者聖ヨハネ（1599-1600）」と「女占い師（1594-95）」があるのだが。

　雑貨屋（⑩）でミネラル水を購入。私が調べた中ではここが一番安い。　大ビン１、小ビン１で計２５００リラ。

１２．２ドーリア・パンフィーリ美術館

　洗濯物をホテルに置き、ミネラル水小ビンとカメラなどを小鞄に詰めて出発。
　先ずヴェネツィア広場にバスで行く事にした。
　バス６４号線は、五百人広場（②）を渡って共和国広場（⑪）に近いところから出ていた。
これは正規の乗り場ではない。これを探すのに苦労したが、それが明朝役に立つ事になった。
　ヴェネツィア広場からドーリア・パンフィーリ美術館は分かり難い。その積もりで入って行ったところが、ヴェネツィア宮だった。
　しかし、ここでベルニーニの特別展をやっていたので見る事にした。
　法王とか偉い人達の半身像が多数、又彼は自画像を沢山描いているのでそれも沢山。さらに私の知っている彫像、例えばポポロの「ダニエル」とか、ナヴォーナ広場の「四大河の噴水」とかのテラコッタ習作やスケッチなど多数が展示されていた。その中には、明日行く予定のボルゲーゼ美術館からの出品も多数含まれていた。

　この傍に美術館があるはずなのだが、中々分からない。パトロール中の警官にも２度尋ねてみたのだが、彼らは全くいいかげん。ぜんぜん違う方向を教えて平気なのだ。
　特に、暫く探した後の２度目の時は、又とんちんかんな事を教えて行ってしまったのだが、そこから角を曲った２０mほどのところに入り口があったのだ。
　この美術館のレイアウトは、最近改革されたのか、ミシュランにある配置や絵画番号がぜんぜん違っていた。
　ここは、入場料の中にオーディオ解説システム貸与が含まれていて、絵画番号を押すとイヤホーンから解説が聞こえるよう

になっている。
　ただし英語までで日本語はない。
　なかなかカラヴァッジョの絵が現れない。終わりのほうに「'600」の間と言うのがあり、ここは、１７世紀の絵画を展示しているのだが、そこにあった。
　この部屋だけは、画の説明場ネルが付いていた。

　ここにはカラヴァッジョの画が２点展示してある。
　『ここの《悔俊のマグダラのマリア》と《エジプトへの逃避途上の休息》は、互いに非常につながりが強く、１５９６－９７年に位置づけられるが、注文主は不明である。』
　『《エジプトへの逃避途上の休息》（前頁左図）（135.5 x 166.5cm）の画面には、これまでにない、楽器を持つ天使が加えられて、奏楽の場面に変えられているが、カルヴェージは、花婿ヨセフと花嫁マリア（キリストと教会の象徴）の前で、天使によって人間に伝えられる救済の約束を意味すると解釈している。
　構図は魅力的である。優雅な形体表現、野外に置かれた全身像、彼の作品に再びこれほど明瞭に登場することのない広々とした風景描写、赤、黄、褐色、青緑などのあらゆる色相を駆使したパレットの豊かさ。空間構成は未だ初期の特徴をとどめ、人物は画面と平行な面上に展開する空間に配置されている（こうした構成はコンタレッリ礼拝堂の《聖マタイの召命》まで続く）。
これらの要素はブレッシャ派の絵画に遡るもので（とりわけ天使の衣襞表現はサヴォルドを想わせる）、構図に名残をとどめるマニエリスム的要素については、北イタリア絵画全般に源泉がたどれる。いずれにせよ、これは「成熟の第一段階」を示す作品であり、最初の宗教画の大作を予告しているのである。』
　『《悔俊のマグダラのマリア》（前頁右図）（122.5 x 98.5cm）も、《エジプトへの逃避途上の休息》の聖母と同じ明るい栗色の髪をしたモデルを用いている。
　この絵はもともと、偶然出会った髪を乾かすひとりの少女を写し取ったもので、香油壷や装身具といった象徴的持物を描き加えてマグダラのマリアに扮装させたのではないかと考える者もいるが、説得力があるとは思えない。壺のなかには、神の愛への陶酔をもたらす、「雅歌」に歌われた永遠の生命の象徴である葡萄酒が入っている、という指摘もある。
　カルヴェージは、「ウァニタス」と「メランコリー」という二つの概念を結びつけ、聖アウグスティヌスの教理に基づいて、救済をもたらす恩寵の光と罪の闇との対置と解釈したが、後には「雅歌」のなかのキリストへの愛と結びつけて解釈している。同じカルヴェージは、１９８６年には、カラヴァツジオのマグダラのマリアを、花嫁としてのマリアに結びつけ、さらにそれを処女マリアと「雅歌」のなかの天の花嫁と見なしている。
　様式的には、意味と形体の間に緊密な関係が見られ、そして事件が起こっている場所、つまり「歴史的な場所」の探究の芽生えが見られる。』　チノッティ「カラヴァッジオ」

　この他には、ヴェラスケスの「イノセント１０世の肖像」だけが特別室に入っていた。

１２．３コルシーニ宮

　次にテヴェレ川の向こうにあるコルシーニ宮に行ってみる事にした。
　ここには、カラヴァッジョのナルキッソス（1598-99 年頃　122 x 92cm）と「洗礼者聖ヨハネ」（1605 年頃　94 x 131cm）がある。
　　コルシーニ宮は、バスを使って行きにくい。ヴェネツィア広場より６４号線で、先ずバチカンまで行き、そこから２３号線で行ける筈なのだが、その乗り場を見つけるのに一苦労した。
本来のバス停が変更になっていて、その案内がイタリア語、大体の勘で探した。
　炎天下で暫く待ってやっとバスに乗り込む。
　行き先を告げると若い運転手は胸をたたいて任せろとのジェスチャー。
　その運ちゃんがイタリア人、ぜんぜんいい加減。　運ちゃんの指示で降りたところは、１ｋｍも行きすぎていたのだ。
　運ちゃんは、サンタ・マリア・トラステヴェレ(ここは観光地としては有名、昨年行っている)と勘違いしたのかも知れない。
　このように、イタリア人は調子良くすぐ反応してくれる人が多いのだが、そのレスポンスには間違いを含んでいる事が極めて多く、今回もやられた。
　気持ちを整理するためもあって、その付近にあったレストランでランチとビールで一息入れる。
　この道は、一方交通なので、テヴェレ川の橋を渡り、ティベリー島を通って対岸の川沿いの道まで歩き、バスでマッツィーニ橋まで戻り、この橋を渡り、町中に入って行ってやっとコルシーニ宮に到着した。

ここの国立美術館の第３室にカラヴァッジョがあるはずなのだが、見当たらず、係員に聞くと、パドヴァに行っている。今年中に戻ってくると言う。
パドヴァでカラヴァッジョ展をやっているらしい。
これを聞いて、特に苦労して来たという思いが強かったので、力が抜けてしまった。
しかし、気を取り直し、一通り見る事にした。カラヴァッジョの影響を受けたナポリ派の画が沢山あり、これらは参考になった。

バスを乗り継いで、ホテルに戻った。
どうやら、腹の具合も正常になったようなので、夕食は、昨年も行ったトラットリア　ヌオーボ・ステラ（⑦）に行ってみた。
ここは、昨年ホテル　ツーリング（⑤）のフロントが推薦してくれたところであった。
昨年と同じ親父（昨年私の注文を忘れ、いい加減の勘定をしたた男）が対応してくれたが、今年はちゃんと計算したようだ。
スバゲッテイ・ボンゴレとムール貝２ダースをニンニクの利いた汁で茹でたものにワイン（ハーフ）と水で５３０００リラ。やっと何日がぶりで普通の夕食がとれてほっとした。

ホテルに戻り何回か通信を試みるが、線が混雑の為か繋がらず、午後１０時過ぎ就寝。

第十二報（#16024）

【６月３日（木）】

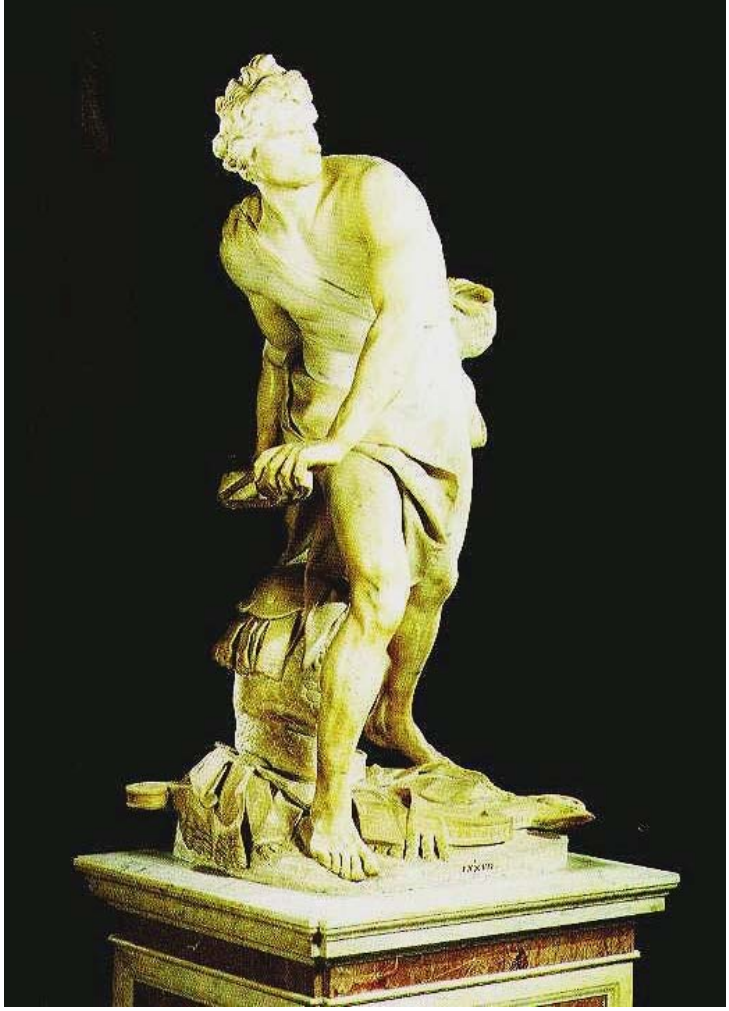
午前２時に目が覚め、通信を試みるが、こんな深夜なのに回線混雑の為接続出来ず、又就寝する。

１２．４ボルゲーゼ美術館

朝、少し早いと思ったが午前８時ホテル出発、ボルゲーゼ美術館に向かう。
ここは、昨年訪れた時は、満員で且つ予約が１週間先まで詰まっていて入れなかったところである。今年はミラノから５月２０日に午前９時の予約を取ってある（第２報参照）ので安心である。
五百人広場バス停の９１０号線の乗り場に行くが、黄色い注意書で、発着場が変わった事を知らせているのだが、変更場所の通りの名が書いてあるのみでその場所が分からない。傍のバス運転手の詰め所で聞いてみたのだが、そこから出るよ大丈夫と（と言っているらしい）、ばかりで全然頼りにならない。
このバスは、共和国広場を通過して行くので、昨日の経験から、多分そのようなバスは運行時間の短縮の為、共和国広場の近くから発着するようにしているのではないかと推定し、昨日の６４号線の発着場に行って、そこにいた運転手に尋ねると、そのそばに目的の発着場を見つける事が出来、ほっとした。
ピンチアーナ門を出て、一つ目のバスストップで降りれば、美術館までは５分程度である。（このあたりの勘は、去年の経験がものを言っている）
８時４０分頃到着、ちょっと待って居ると地下のカウンタで受け付け開始、入場券購入後、売店で解説書（２万リラ）購入、クロークに荷物を預けねばならず、解説書のみを持って９時に入場する。

この美術館は、部屋の装飾と言い、展示物と言い、実に素晴らしい。
ここでは、その中からバロックの雄、ベルニーニとカラヴァッジョ及びその関連に絞って記す事にする。
この美術館の地上階は、玄関大広間と８つの部屋からなっているのだが、第８室がカラヴァッジョとその関連になっているのを除くと、他の部屋の第一の主人公はベルニーニである。
第２室には、ベルニーニ２５歳の作「ダヴィデ」（次頁左図）（1623-24）がある。

『《ダヴィデ》はミケランジェロの《ダヴィデ》（1501－04 年フィレンツェ、アカデミア美術館）が次の瞬間にとるであろうと予想される姿勢を選んだ。これは、ルネサンス古典期のダヴィデが、勝利の記念碑としてゴリアテの首を踏んだ姿でと



らえられていたのとは対照的に、まさに敵を討つ瞬間の肉体の動きそのものを表現したものである。また、ミケランジェロとは異なり、ダヴィデによって＜勝利＞や＜堅固＞を象徴したのでもない。』　若桑みどり「世界美術大全集　バロック１」

『緊張に顔を顰めたこの若者の表情は、ベルニーニが硬い大理石に鉄の鑿で挑む姿そのものだったのかも知れない。』解説書

第３室には、有名な「アポロンとダフネ」（上右図）（1622-1625）があり、この部屋は「アポロンとダフネの間」と呼ばれている。

『これはまさにバロック的なヴィジョンの結晶である。アポロはニンフを追いかけてその体に手を触れようとしているが、追いかけられているニンフはいままさに植物に変身しかけており、その恐怖のために絶叫している。

柔らかい少女の肌と髪の毛が、堅い月桂樹に変形しつつある瞬間が作者の興味の中心であって、アポロの表情には驚きや内面の情熱はまったく感じられない。ニンフの体は空中に飛んでいるように見えるが、それは月桂樹に変身しているためというよりは、逃走の行為の抽象化である。このようにベルニーニは、逃走と変身という様態の時間的変化に関心を集中し、さながらスポーツ写真のようなショットを把握したのである。』若桑みどり　同上

昨年はこの彫刻を美術全集で知って、これを見たさに訪れたのだった。

この作品がベルニーニの２５歳前後の作だという事には今更のように驚く。

この部屋の変身の主題は、ドッソ・ドッシの「アポロンとダフネ」と「魔女キルケ」にも見る事が出きる。

第４室には、ベルニーニの「プルトンとプロセルピナ」（前頁左図、部分）（1621-23）がある。

『これは、大地の女神ガイアの娘プロセルピナを略奪する冥府の王プルトンを現していて、プロセルピナの手は、プルトンの顔面を歪ませ、又プルトンの指は抱きかかえたプロセルピナの腰に食い込んでいる。』解説書

その食い込んでいる表現は、実に肉感的である。

第６室には、さらに彼の若い時の作「アエネアスとアンキセス」（右図）（1618-20）がある。

『ローマの祖国愛を表すアイネアスが老父アンキセスを背負い、幼い息子アスカニウスとともにトロイの戦火から逃れる姿を表している。

アスカニウスは、家の聖火を携え、アンキセスは、ペナテスつまり古代ローマの家の守護神の像を捧げている。さすがにこの作品には父親ピエトロの寄与が著しいとする研究者も多いらしい。』解説書

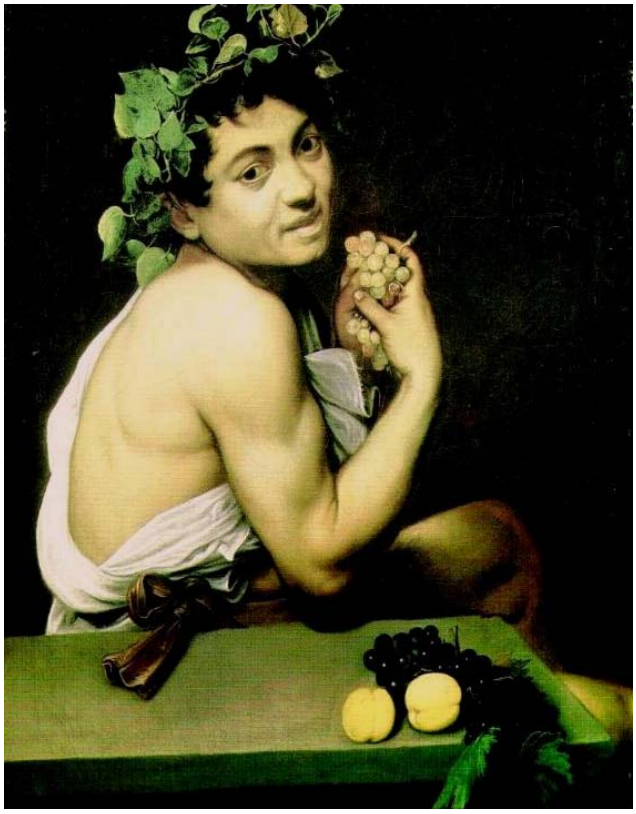
第８室にはカラヴァッジョの画が６点ある。

案内書によると、それらはかっては１２点あったのだという。

現在ロンドンのナショナル・ギャラリーにある「エマオの晩餐」（1601）がここにあった事は分かっているのだが、他の４点は消失してしまっていると思われる（チノッティの本に付いている消失作品リストより推定：敏翁）

これらは、この美術館の収蔵品の大半を収集した教皇パウルス５世（ボルゲーゼ家）の甥のシピオーネ・ボルゲーゼ枢機卿のコレクションだった。

それを制作年代順に紹介する。（①～⑥　展示の順とは異なる。）



①　『《病める少年バッコス》（上左図）（67 x 53cm）は、１５９３年か、１５９３－９４年に描かれたものと思われる。

自分の姿をバッコスとして描くという発想は、現在ブレラ絵画館にあるジョヴァン・パオロ・ロマツツォの《月桂樹と樫と葡萄の葉の冠をかぶったバツコスとしての自画像》のようなロンバルデイア絵画からの示唆による可能性がある。　この絵に関しては数多くの解釈が存在する。』　（煩雑な神学的な解釈などあるが省略：敏翁）

『こうした解釈は、カラヴァッジオを当時の神学的・精神的諸問題のなかに深く位置づけようとする点で魅力的ではあるが、彼の解釈がこの絵を見る我々の愉悦を増すわけではないし、それは、ブランデイが言うように依然として「多義的」なのである。

このバッコス=自画像は、病んでいるが頑強な男、年寄りじみた若者、憂鬱な享楽者であり、そこでは世俗的・神話的着想は、画家の未熟だが思いがけない感受性によって、つまり現実を外面と内面という二つのレヴェルで追求しながら荒々しく把み取る能力によって変質させられているのである。この際立って芸術的な気質と要求が結びついた探究の方法こそ、カラヴァッジオを衝き動かして、新しい造形思考の成熟とより広い精神的問題に立ち向かわせたものなのである。

様式的な分析から分かることは、この作品が周知のカラヴァッジオの「自然主義」を示す最初の確実な作品であるということである。（中略）

画家がそれまで習得したものをすべて動員して描いたこの最初の若描きの作品では、蒼白い色調やとげとげしさがやや曖昧な調子で画面を覆っているが、若いカラヴァッジオは他の作品でも自然をこうしたやり方で性格づけしている。
彼は、マニエリスム的な椀曲語法を用いずに、自然を、溌剌として魅力的なもの、しかし崩れやすくもあるものとして見ており、またマニエリストの先人たちが教えた方法（様式）にではなく、その類型（手段）に拠りながら、自然に即した色彩と光と陰を用いている。

その結果は全く新しいものであった。実際このような絵はローマではこれまでに一度も見られなかった。カラヴァッジオは現実を「切り取る」ためにロンバルディア的趣味を再生させたが、しかし彼はそのやや羅列的な性格を退け、北イタリアに由来する「半身像」をローマで摂取した古典主義によって総合化したのである。彼はダルピーノの工房で義務として描いていた静物画の蓄積に、裸体と特に自分の頭部をよく研究した神話の人物を加えることによって、初めて完全な絵をつくることに成功し、それは、若描きではあるが、すでにひとつの祖型になっている。環境空間を描き込まず、人物要素を大きく前景に配する傾向、とりわけ「ありのままのもの」を受け入れる、明白で衒いのない、しかし深く内面化されたやり方は、様式の発展においても消えることのない常数となるのである。』　チノッティ「カラヴァッジオ」

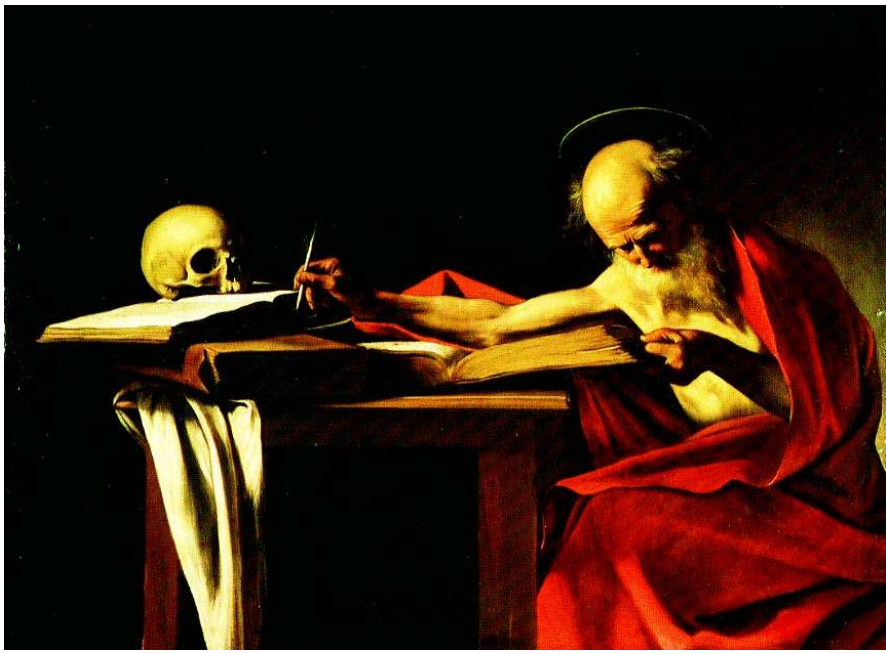
②　『<u>《果物籠を持つ少年》（前頁右図）</u>あるいは《果物売り》（70 x 67cm）の制作年代は《病める少年バッコス》と同様、１５９３年か１５９３－９４年であるとするのが最有力である。
この作品のような青春と自然を結びつけるテーマは初期のカラヴァッジオに特有なものである。
《病める少年バッコス》と同様、この作品をめぐってはさまざまな図像学的解釈がみられるが、カルヴェージのキリスト論的な解釈（籠のなかの果物の象徴的意味との関連で、人間の罪を贖い永遠の生命を授ける「愛」としてのキリストと見なす）もそのひとつである。

様式的には《病める少年バッコス》に続く発展段階を示している。すなわち、角張った顎や肉づき豊かな口、強く輪郭づけられた目をもつ頭部のフォルムの強調、彫塑的量塊の突出と背後の陰影面の対比を利用した首や肩の解剖学的表現の巧妙さ、折れ目がぎっしりと条をなして重なり合う袖の衣襞表現がそれである（衣襞表現にはまだたどたどしさが残るが、のちにはいっそう精確になる）。ここに描かれた静物もまた、破壊の兆しを秘めたあの生命の豪奢さの祖型である。これは自然を観察して描いたものであるが、画家はその過程で微妙な意味の考察へと促されたのであろう。こうした表現は、ウフィツィ美術館の《バッコス》や、いっそう明白に内面化された形でアンブロジアーナ絵画館の《果物籠》やロンドンの《エマオの晩餐》で繰り返されることになる。　（中略）
この絵でカラヴァッジョは最初の未熟な若描きの状態から脱して、初期様式の最初の成熟への動きを示していることは明らかである。それはカラヴァッジオがローマにもたらした北イタリアのリアリズムという新要素を証言している。』チノッティ「カラヴァッジオ」

この美術館は、絵に近づき過ぎるとブザーがなるというような仕掛けはない。

この絵に目を近づけて果物の描写のディテールを見つめたが、まるで近年のカラー写真のように本物そっくりに描かれていた。

カラヴァッジョの絵は、テーマの解釈、構図の新しさ、光の取り扱いなど革命的なところが多々あるが、その基本は、精密描写の群を抜いた巧妙さにあるように思えた。



③　カラヴァッジオはパラフレニエーリ（教皇庁専属馬丁）の聖アンナ信心会からサン・ピエトロ大聖堂内の彼らの新しい礼拝堂に《パラフレニエーリの聖母》（上左図）、別名《蛇の聖母》（292 x 211cm）を描く注文を受け、当時の記録から、この絵は、１６０５年１０月３１日から１６０６年４月初めの間に制作されたことが分かる。４月８日に支払いが行われ、絵はサン・ピエトロ大聖堂のこの信心会の祭壇に置かれたが、すぐに取り外されて、信心会の教会堂であるサンタンナ聖堂に移しかえられた。そして信心会は、７月２０日に、この作品をシピオーネ・ボルゲーゼ枢機卿に、カラヴァッジオに支払われたよりも２５スクード多い１００スクードで売却してしまうのである。

作品の拒絶の理由が「品位」の明らかな欠如（聖母の広く開いた襟元、幼児イエスの刺激的な裸体）にあったことは間違いないが、スペッツァフェッロが推測するように、ボルゲーゼ家出身のパウルス五世の教皇即位（１６０５年5月１６日）後、非常に大きな勢力をもった親スペイン派のトロメオ・ガッリオ枢機卿の厳格主義が大きな役割を演じたと考えられる。

カルヴェージは、拒否の直接の指示者は教皇パウルス五世であったと考えている。

何人かの研究者によると、拒否の最も深い原因は、主題の、異端とはいわないまでも、非正統的な解釈にある。原罪の象徴である蛇を踏みつぶす「無原罪の御宿り」という主題は、蛇を踏みつぶすのは聖母であると主張する者と、幼児イエスであると主張する者との間に論争を巻き起こした。ピウス五世は、１５６９年に、聖母が幼児イエスの助けを受けて蛇を踏みつぶしたと宣告した。この教皇の大勅書に想を得て、ロンバルディアの画家アンブロージオ・フィジーノが最初に絵を描いたが、カラヴァッジオはおそらくそれを見たと思われる。カラヴァッジオの絵では、幼児イエスは、蛇を踏みつぶすのに聖母の左足の上にその左足を重ねている。

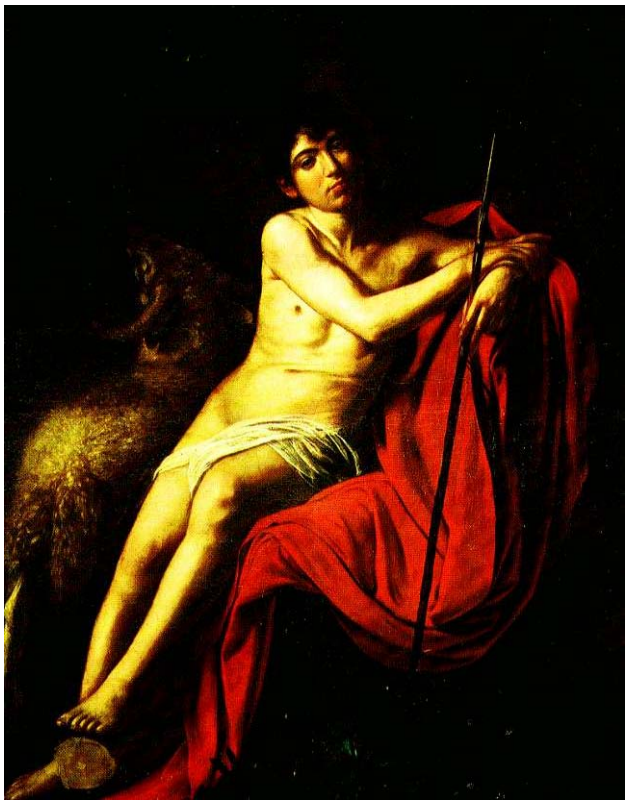
しかし同時に、カラヴァッジオは異端撲滅のテーマに、祭壇画に描き込む義務があった聖アンナのテーマを結びつけ、聖母子との三者一組の構図のなかに組み込むという独創的な解釈をはかっている。こうした斬新な二重の解決は、ピウス五世の大勅書の内容と一致していたとしても、枢機卿たちを当惑させたに違いない。カルヴェージは後に、この絵が撤去されたのは、パウルス五世下の親スペイン派の厳格主義者たちの勝利を反映していると推測し、一方セッティスとスペッツァフェッロは、枢機卿の不満をかったのは聖アンナの部外者のような態度であると見なしている。

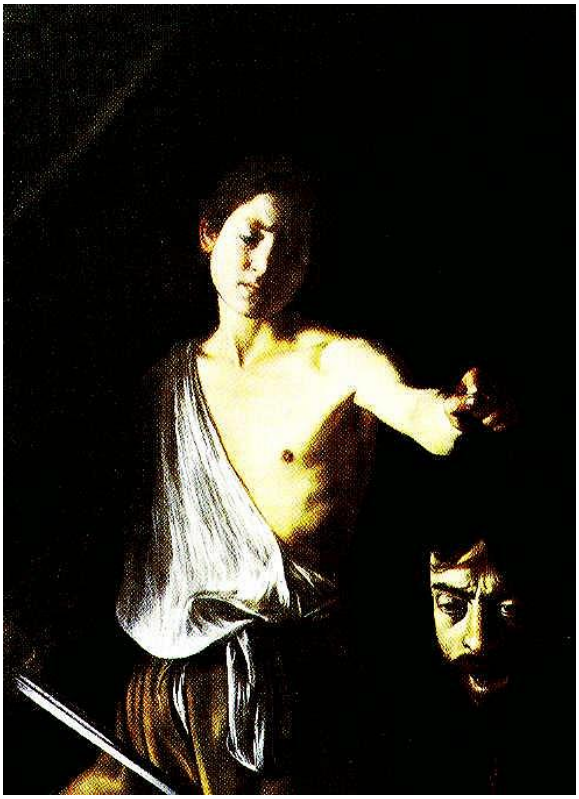
私見では，カラヴァッジオに再び作品の拒絶という災難を招いたのは、様式的理由によるものである。二つの主題を接合するのに、彼は中央に「陰の空隙」のあるピラミッド型として群像をとらえ、同じように明るく浮き立つ二つの量塊を結びつけているが、この結果、混乱した効果が生み出されているのである。カラヴァッジオが用いたさまざまな彫塑的・色彩的な要素から、強い造形的統一性が生じているが、それが彼にとっては主題を高める働きをなし、枢機卿たちにとっては主題を埋没させるものと感じられたのである。カラヴァッジオは、人間のなかに神聖なものを再創造しようとする彼の方法のために、しっぺ返しを受けたのである。』　チノッティ

④　『<u>《書き物をする聖ヒエロニムス》（前頁右図）</u>（112 x 157cm）は、１６０６年５月のラツィオへの逃亡前の、ローマ滞在の最後の時期の作と思われる。

この作品では、形体が暗くなる傾向を示し始めており、瞑想の主題がいっそう強められている。

ベッローリが述べているように、シピオーネ・ボルゲーゼ枢機卿の直接の注文によって描かれた可能性は否定できない。聖ヒエロニムスは、ヘブライ語聖書のラテン語訳「ウルガータ聖書」の訳者として、反宗教改革期には非常に大きな重要性をもっていた。《蛇の聖母》におけると同様の、力強く荒々しい筆遣いによって仕上げられた絵画的イメージは、カラヴァッジオの最も独創的なもののひとつである。四分の三に切り取られた人物、水平的構図における平行線の支配、離れたところにあるインクにペンを浸すために伸ばされた腕による、ほぼ同一面上にある聖人の頭部と頭蓋骨との接続（この絵全体の鍵をなす着想）、死せる自然（静物）と生ける自然（人間）との完璧な統合は、ロンギからこの絵を詳細に分析したバルドンまで、多くの研究者によって繰り返し指摘されてきた。ローマ滞在期の末やラツィオ滞在期の他の作品と同様、色彩としては、マントの驚くべき赤色ーーこれは画家の最晩年の作品にまで登場するーーを除いて、暗褐色と白が支配的になっている。』　チノッティ





⑤　『<u>《洗礼者聖ヨハネ》（上左図）</u>（159 x 124cm）は第二次ナポリ滞在期の１６０９－１０年に位置づけることができる。この絵は、カラヴァッジオが１６１０年７月中頃にローマに戻るためにナポリを出発したとき、所持品一切とともに二本マストの小型船に持ち込んだ「洗礼者聖ヨハネ」と考えられる。この作品は保存状態が悪く、背景が真っ黒に変色しているが、このことは、ほとんど子供のような洗礼者聖ヨハネを描いた、この絵の本来の優れた特質を理解することを妨げていない。背景にはわずかな葡萄の葉がかすかに見られるが、カルヴェージはそれに復活と永遠の生命のシンボリズムを認めている。カピトリーニ美術館の《洗礼者聖ヨハネ》と同様、子羊の代わりに雄羊が描かれていることは、キリスト論的な意味を示唆している。モデルの少年は、ほぼ間違いなく《ゴリアテの首を持つダヴィデ》と同じ人物である。少年は、画家と同時代人のフランクッチがそのギャラリーについての小詩で、神の諭しを待って沈思黙考していると謳ったダヴィデと、同じ漠としたメランコリーのなかに沈んでいる。』　チノッティ

⑥　『<u>《ゴリアテの首を持つダヴィデ》（上右図）</u>（125 x 191cm）は、確実に１６１０年か１６０９－１０年の作品であり、ダヴィデが持つゴリアテの首=自画像は、チェッリリオの居酒屋で負った傷のおぞましい記録と考えられる。

（中略）この画の図像表現はきわめて独自のものである。つまり、これは常に旧約聖書におけるキリストの予型として解釈された、勝ち誇る青年という伝統的な図像ではなく、尋常ならざる悲劇的雰囲気に包まれた、悲し気で放心した英雄の像なのである。モデルの少年はボルゲーゼ美術館の《洗礼者聖ヨハネ》と同じ人物である。剣の刳型のところには〈Ｈ－ＡＳＯＳ〉の文字が刻まれており、マリーニはこれを聖アウグスティヌスの言葉（謙譲が傲慢を打引到す）の頭文字と解釈した。つまり、

慎ましい十字架によって、傲慢な天使ゴリアテを打ち倒す、救世主としてのダヴィデのことを指しているのである、と。しかし、自分の勝利を悲しんでいるダヴィデによって、この作品の意味は著しく心理的かつ自伝的なものに転じている。（中略）
カルヴェージは、悪に対する徳の勝利というな解釈を提出している。すなわち、神の恩寵を信じる画家は、ゴリアテのなかに謙遜に自己を描き出すことによって、罪人の特権たる「恩寵」を祈願しているのである。
意味解釈は別として、作品の優れた価値は、純粋で著しく絵画的な探究、素速くやや放縦な描法、色彩を和らげる光の働き、光と陰の交替に見出される。
ダヴィデのシャツの「無頓着」な描写はマルタでの《洗礼者聖ヨハネの斬首》以前には考えられず、素速い筆遣いは最晩年の絵であることを推測させる。極度に簡潔に描かれた作品であり、このことによっても、カラヴァッジオの生涯の終わりに位置づけられるのである。』　チノッティ

第８室には、カラヴァッジョの影響を受けた画家の作品、例えばバリオーネの「ホロフェルネスの首を持つユディット」や、カラヴァッジョの師であったカヴァリエール・ダルピーノの作品も展示されている。

第８室で、地上階は終わり、２階に登る。
２階には、第９～２０室があり、年代別に展示されている。ここにも名画、名作が多いが、バロックに限って紹介する。
第１４室には、カラヴァッジョ様式、カラッチ様式の画が沢山ある。
又ベルニーニの数枚の自画像や彫刻（「シピオーネ・ボルゲーゼ枢機卿」の胸像など）と彼の彫刻の為の習作テラコッタがあったのだが、それらは昨日訪れたヴェネツイア宮のベルニーニ特別展に貸し出されていた。
第１８室には、ルーベンスの「ピエタ」（180 x 134cm）があるが、これは彼の最初のローマ滞在（1602 年）の折に描かれたものである。
彼も、カラヴァッジョから大きな影響を受けた一人である。
第１９室にもバロック画家たちとその先駆者たちの作品が展示されている。
バロツチ、ドメニキーノ、ランフランコ、アンニバレ・カラッチなどである。

見ていると時間の経つのを忘れるほどだが、１１時になると「時間になったから全員退場してください」とのアナウンスが流れた。　２時間で入れ替えのシステムを取っているらしい。
私は、丁度見終わった時だったが、ここを２時間では少し忙しい。
もう一度来たいと思ったが、そのチャンスがあるだろうか。

美術館を出て、バスで５百人広場に帰る。同じ９１０号線だが、帰りのバス・ストップは、違う道にあるのだが、これも昨年経験しているので、すぐ思い出す事が出来た。

ホテルの近くのトラッテリア　エスト・エスト・エスト（前報の略図の⑧）でランチ（特製のピッツァとサラダとビール）を取る。ここは昨年泊まったホテル　ウニヴェルソの真ん前にある。

たっぷり名画を見て心地よい疲労の下で一休みに昼寝をしたら、目が覚めたのが午後３時半になっていた。

第十三報（#16061）

１２．５サンタ・マリア・デル・ポポロ教会

今日の夕方は、あと昨年行った掲題の教会に行くだけにする事にした。
今年地下鉄に始めて乗った。A線フラミニオ駅で降りて、ポポロ広場(上図)に入ったが、昨年は工事中で感興を殺ぐ事著しかったのが、工事は完了していて面目を一新していた。

オベリスクの向こうにすっきりと建っている双子寺が素晴らしい。

広場の散歩と双子寺の参観は後にして、サンタ・マリア・デル・ポポロ教会に入った。

先ず、【チェラージ礼拝堂】で、一年ぶりにカラヴァッジョの２作品にお目にかかった。
昨年、初めてカラヴァッジョをここで見て、その強い印象が今年の旅行「カラヴァッジョを訪ねて」に繋がっているとも言えるのである。

去年まで主機種だったニコンはシャッター音が大きくて、他の参詣者が居る時はシャッターを切るのが気がひけたのだが、今年のデジカメは音がしなくて、思いきり撮れる。教会内の各礼拝堂の写真を撮る事にした。

ここで少し長くなるが、当時の宗教界の事情が垣間見られて面白い文がチノッティ「カラヴァッジオ」にあるのでそれを抜粋で記してみよう。

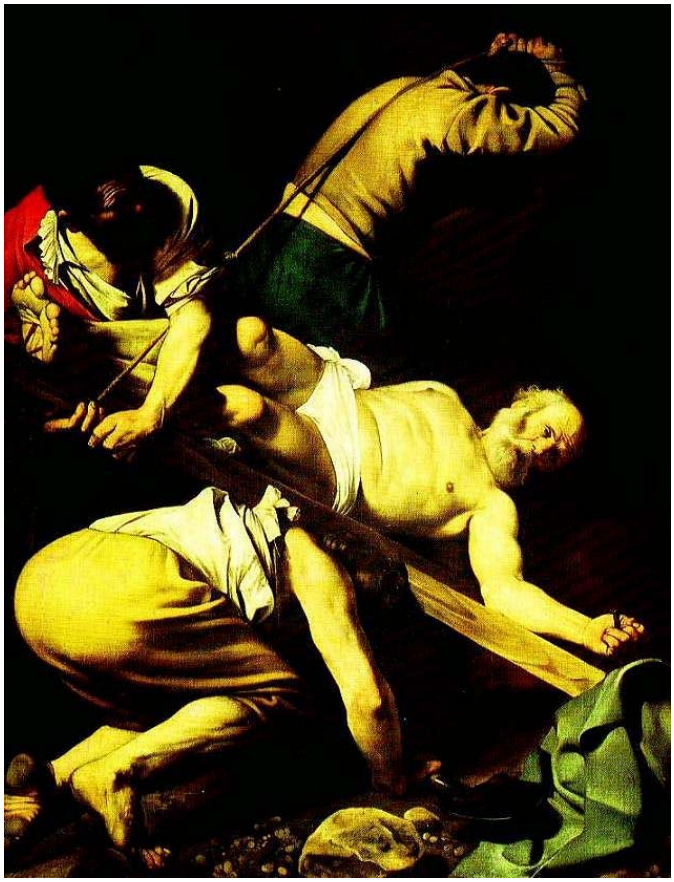
『１６００年9月２４日、カラヴァツジオはモンシニョール・ティベリオ・チェラージから重要な作品の委嘱を受けた。彼はクレメンス八世の財務長官で、ボッロメーオの親友であり、画家の支持者や友人のサークルとつながりをもつ人物であった。スペッツァフェッロは、チェラージの「反教会的」態度を指摘している。彼によれば、この人物は、デル・モンテ枢機卿のように高い教養と自由な才能の持ち主で、反宗教改革の厳格主義に反抗して、人間・神の自由で直接的な関係のうえに築かれた倫理を擁護し、宗教的実践を軽んじたわけではないにせよ、教会の外でもこうした考えを重視した。
チェラージは、サンタ・マリア・デル・ポーポロ聖堂に購入した一族の礼拝堂の両側壁のために、二点の作品をカラヴァッジオに注文した。これらの絵の支払いは、１６０１年１１月１０日に行われている。しかし実際には四点の絵が描かれた。というのも、杉の板に描かれた最初の二点は注文主の拒否にあい（ジャコモ・サンネージオ枢機卿がそれらを買い取る）、現在この礼拝堂に置かれている二枚のカンヴァス画にとり替えられたからである。
チェラージは、又祭壇画**《聖母被昇天》（左図）**を**アンニーバレ・カラッチ**に委嘱していた。

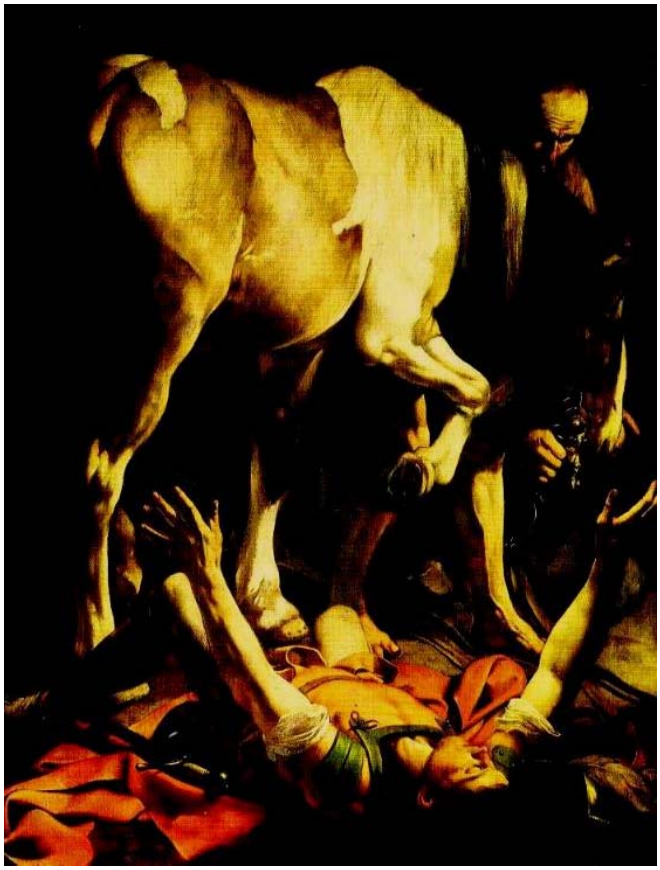
スペッツァフェッロによれば、初めの二点の作品の「反教会的な」解釈に想を与えたのはチェラージであったという。
最初の二点のうち《サウロの回心》だけが残されており、もう一点は消失してしまった。バリオーネによればこれらの絵は「注文主の気に入らなかった」。しかしこの注文主とは、おそらく１６０１年の５月３日に亡くなったモンシニョール・チェラージのことではなく、彼の財産を全面的に相続したコンソラツィオーネ病院のことであったと思われる。』

『最初の二点の板絵を拒否されたカラヴァッジオは、画布による新しい改作を急いで仕上げねばならなかった。しかし作品の引き渡しが大幅に遅れたために、報酬は契約よりも低い額で満足しなければならなかった（支払いは１６０１年１１月１０日）。』

『**《聖ペテロの磔刑》（次頁左図）**（230 x 175cm）は、礼拝堂の左側の壁に掛けられた作品である。図像主題は、十字架を立てるという珍しい場面で、キリスト論的解釈、すなわちイエスの十字架立てをはっきりと暗示しているが、ここでも至高の手本となったのはミケランジェロであったらしい。カルヴェージは、十字架を立てる行為を教会の建立の暗喩と見なレ、殉教における「キリストの模倣者」たるペテロを燦然と照らす光を救済の光の暗喩と見なしている。
カラヴァッジオは、出来事を殉教者と三人の刑吏に凝縮させている。外典の「ペテロ行伝」によれば、刑執行人に命令を下していたのはペテロであったというが、この「指図する聖人」という設定から、斬新で卓抜な場面が生み出されたのである。こうした発想が他の画家にも影響を及ぼしたことは、１６０１－０２年にローマのサンタ・クローチェ・イン・ジェルザレンメ聖堂のために描かれたルーベンスの《キリストの十字架立て》や、１６０４－０５年にサン・パオロ・アツレ・トレ・フォ

ンターネ聖堂のために描かれたグイド・レーニの《聖ペテロの磔刑》（現在ヴァティカン絵画館）によって証明されている。
カラヴァッジオの変化は、本質的問題、つまり、なまなましい現実感を保ちながら精神性に強調点を置くという主題展開の「方法」にあったに違いない。





ブランディは、白昼の光のなかの暗い背景を、自然を写したものではなく、「ヴァルール（色価）」と認め、身体の突出部に当たる光の形体創出的なはたらきや、単なる自然主義を越えて事物をありありと現前させる色彩の外見的な真実主義に注目している。コンタレッリ礼拝堂の《聖マタイの殉教》に比べると、圧倒的な彫塑的形体と光の操作による新しい構図上の熟練がみられる。
画面の枠を越えたイメージの連続性の暗示には、近代性を先取りする面が見られるが、こうした効果は、対角線構図を画面の左右の下端で断ち切ることによって生み出されている。そこではルネサンスの遠近法によるイリュージョニズムはのり越えられ、三次元的効果は、画面の空間に奥行きをつくることでも、闇のなかに沈めることでもなく、形体を闇から突出させることによって創り出されている。』チノッティ

『**《サウロの回心》（上右図）**（230 x 175cm）は礼拝堂の右側に掛けられている。 カラヴァッジオはここでは目に見えるキリストの姿を描かずに、サウロの視力を奪う神の光を主題化している。画家は目を開けているサウロではなく、キリストの発する言葉を耳にする前の、サウロの崇高な失明の瞬間を描いている。彼は両手を広げてキリストへの完全な献身を示す身振りをしている。画面のなかで馬に与えられた並はずれて大きな役割は、研究者の間に賛否さまざまな反応を引き起こした。カルヴェージによると、馬は理性の象徴である馬丁によって統制された罪・非合理を暗示しており、神の恩寵と天啓を暗示するこの絵の全体的な意図と完全に一致している。
この絵は、形体と意味の複雑な組み合わせからなっている。触知しうる形式として見れば、画面は黒々と開けられた空隙によって暗示された奥行きと、その周りを回転する彫塑的な諸要素からなりたっている。しかしその主題は、霊的に盲目な者を照らす光であり、やがて真理に目を開かれる人物の、一瞬凝結したような肉体的失明なのである。』チノッティ

本旅行記第２報に記したように、ミラノのサンタ・マリア・ブレッソ・サン・チェルソ教会にあるモレットの「聖パウロの回心」とこの画との関連を最初に指摘したのがロベルト・ロンギであった。
『何れの絵も画面いっぱいに馬が描かれていて、その下に横たわってキリストの光に打たれたパウロがいる構図である。（中略）
カラヴァッジョは、構図的には参考にしたかも知れないが、ポポロの絵の迫力はやはりカラヴァッジョの天才のなせる業で

あることが良く分かった。
　このあたりは、私の筆力ではうまく表現できず、画像の助けがないとわかり難いと思う。』第２報よりの抜粋

　チェラージ礼拝堂参観の後は、チギ礼拝堂で、セバスティアーノ・デル・ピオンボによる祭壇画「聖母の誕生」、ベルニーニによる彫像「ダニエル」（上左図）と「ハバククと天使」（上右図）などを見る。（チギ礼拝堂の説明は昨年の旅行記にあるので省略）

　『現在のサンタ・マリア・デル・ポポロ聖堂は教皇シクストゥス四世（１４７１－８４）によって再建されたものだが、彼はデッラ・ローヴェレ家の出身で、この家の墓所が当のポポロ聖堂にある。右側廊の一番手前と三番目の礼拝堂だ。
　これらの礼拝堂では、ペルージアの画家ピントリッキオが壁画装飾を受け持ち、一方、墓碑彫刻はアンドレア・ブレーニョとミーノ・ダ・フィエゾレが手がけている。それらは、装飾的で、そのうえ小じんまりとして慎ましやかで、いかにも初期ルネッサンスの作品の趣がある。それは、ローマが根本的にもっている壮大さとは大きくかけ離れており、初期ルネッサンスがフィレンツェの所産であることをひしひしと感じさせてくれる。』石鍋真澄　「サン・ピェトロが立つかぎり」

　ピントリッキオの「幼児キリスト礼拝」（次頁図）（一番手前のデッラ・ローヴェレ礼拝堂）は、牧歌的な和やかさに満ち満ちた画であった。

『右側廊二番目のヂーボ礼拝堂は一七世紀後半のローマを代表するカルロ・フォンターナが設計したもので、中にある祭壇画（聖母被昇天？：敏翁）は、「ラファエッロの再来」といわれたカルロ・マラッタが描いている。』石鍋

これも美しい画である。

サンタ・マリア・デル・ポポロ教会の美術を十分堪能して広場に出た。

オベリスクを囲むように配置された４頭のライオンが周囲に水を吐き出していて、触れてみると実に冷たい水で気持ちがいい。

双子寺も参観して帰路に着いた。

地下鉄に乗って、昨年とは感じが違う事に気が着いた。

その印象は今回のローマ滞在中、約１０回は地下鉄に乗ったのだが、変わらなかった。昨年あれほど居たジプシーのスリの集団が居ないのである。

その代わり、殆ど毎回お目にかかったのは、物乞いである。

セニョーリ、セニョーラ・・・・（後は聞き取れないが哀れな声調）　と言いながら車内を回っていた。

ローマの治安も大分良くなったのかと少し安心していたが、２日後に道でスリに襲われると言う経験をしたのである。（詳細後述）勿論油断は禁物なのは変わりがないのだ。

夜、トラットリア　ガブリエレ＆トモコ（第１１報の略図⑨）に行ってみる。ここは、昨年泊まったツーリング（⑤）の真ん前にあり、昨年から気になっていたのだが、初めて行ってみたのである。

さして深い意味がある訳ではないが、なるべく日本人が屯していそうなところは避けるのが、海外一人旅における私の習性なのだ。

日本人のウェイターが日本語のメニューを持ってくる店だが、日本人以外にも大勢客は居て繁盛していた。

ウェイターが日本語の情報誌 "COMEVA" ５月号を渡してくれた。　これはＡ３、８ページ、カラー印刷のミニコミ誌。ここも広告に載っていた。

スープ（ラーメン風の麺が入っている）とトモコ・スタイルのステーキ（醤油味）と赤ワインにした。味はまずまずといったところであった。

隣に若い日本人女性二人連れが座ったので、久しぶりに日本語の会話をした。

ここは、彼女ら（少し離れたところに泊まっているらしい）にも良心的であると評判になっているらしかった。

【６月４日（金）】

又、深夜午前３時に目が覚め、通信をトライ。今度は繋がった。

ｋ氏（第１１報参照）からメールが届いていた。

実は関係している団体の財務状況の解析を依頼していたのだったが、ｋ氏の解析結果は想像していたより状況が悪い事を示していた。

あるアイデアが閃いたので、その見地からの解析を依頼するメールを送った。

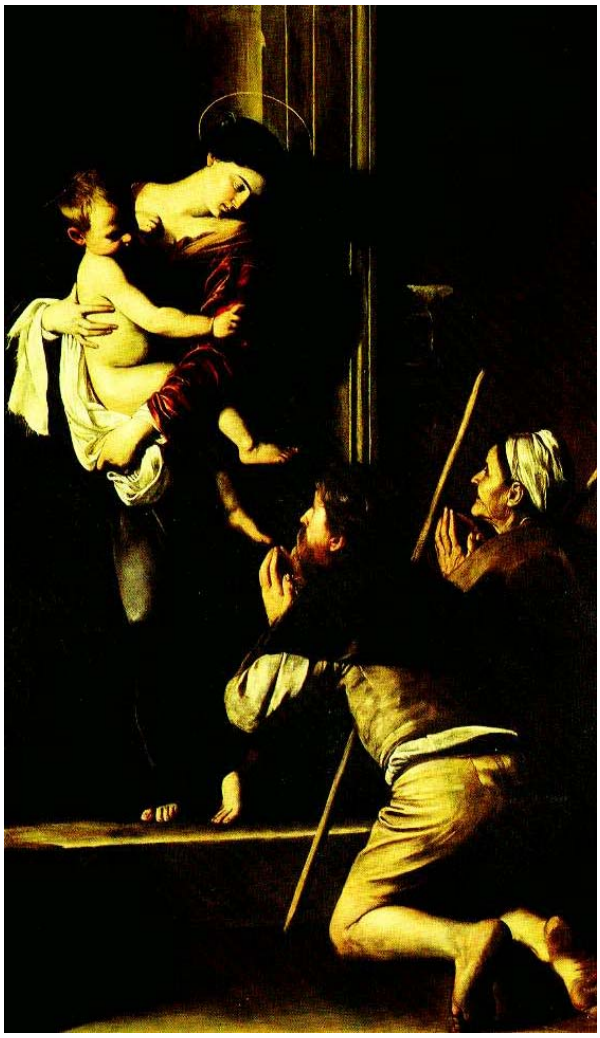
私は、技術者だったのだが、親会社Ｔに居た時も、その関連会社(TC)に居た時も独自の原価計算法や管理会計法を編み出したりして、経理の専門家を悩ました経験があるのである。

今日は【ナヴォーナ広場】の付近を中心に回る事にした。

又、６４号線のバスに乗る。ヴィットリオ・エマヌエーレ２世通りに入り、ジェズ教会から３つ目のバス停で降りれば良さそうなので、そうしたら大体正解だった。
そこから北上徒歩５分ほどでナヴォーナ広場に到達する。
未だ朝早いのであまり人影が無い。
そのせいか、一番南の「ムーア人の噴水」、真ん中の「四大河の噴水」は水が流れていなかった。水の流れていない噴水ほど味気ないものはない。
さらに一番北にある「ネプチューンの噴水」は修理中で板囲いの中だった。

１２．６サンタゴスティーノ教会

広場を通り抜けて、その北にあるサンタゴスティーノ教会を訪れた。
ここには、素晴らしい美術作品が沢山あるが、やはりその第一は、入り口を入って左側すぐのところにある「ロレートの聖母礼拝堂」の祭壇画、カラヴァッジョの「ロレートの聖母」（260 x 150cm）であろう。



『《ロレートの聖母》（左図）（《巡礼者の聖母》）は、実際１６０４－０５年に位置づけられる。
ボローニャ出身のエルメーテ・カヴァッレッティの孫たちと相続人は、サンタゴスティーノ聖堂の神父たちから聖堂の左側廊の最初の礼拝堂を譲り受けていた。エルメーテは、すでに述べたように、この礼拝堂がロレートの聖母に献じられ、この主題の祭壇画が置かれることを望んでいた。カラヴァッジオは、天使によってナザレから運ばれてきた「聖なる家」（イエスの生家）を、聖母とともに描くという２世紀来の「ロレートの聖母」の図像にこだわらずに、「聖なる家」の入口ーーそれは同時に龕になっているーーに現れた聖母子を礼拝する二人の年老いた巡礼者、というこのうえなく人間臭い場面を創案した。
この場面の最も妥当な解釈はカルヴェージによって提出されている。彼は、カラヴァッジオの作品を、アウグスティヌスおよびボッロメーオの思想との関連で読み解こうとし、この作品に、罪ある人間を（プロテスタントの命題のように）直接にではなく、聖母によって象徴化された「母なる教会」を仲介して救うという、信仰の礼讃の主題を見出している。
この作品の核心をなす思想は、人間的現象と人生の光景に対する生き生きとした飽くなき関心と、神の偉大さと慈愛という観念との和解である。ロンギは、この絵にロンバルディア絵画の影響、すなわちモレットの《パイトーネのサントゥアリオの聖母》の影響を認めている。
カラヴァッジオの作品では、聖母は龕の台石の上に描かれ、高貴で理想的な性格を保っており、その画像は滑らかで繊細に仕上げられている。全体は「大きな奉納画」（ロンギ）のような簡素さをもっているが、様式的な混淆が見られるためにさまざまな「読み方」がなされてきた。《キリストの埋葬》と比べると、とりわけ聖母の回転する身体には、一種のバロック的輪郭への回帰が指摘されている。カラヴァッジオは、矛盾しあう二つの要素から出発して、純粋なる絵画的操作を通じてヴイジョンの統一に到達し、二つの世界を、光によって弱められるのではなく統一された、唯一つの色調のなかに融かし込んでいる。というのも、それぞれの要素は独自の響きを保ちながら、画面全体には、多くの色によってモノクローム的な統一感が生み出されているからである。
聖母のモデルとなったのは、１６０５年の記録に「カラヴァツジオの女」と書かれ、パツセリの伝記で画家のモデルと述べられている、レナという女性であろう。彼女はローマの典型的な庶民的顔立ちの美人で、《パラフレニエーリの聖母》や、おそらくは《聖母の死》にも登場する。（以下レナの素性とか、関連したカラヴァッジョの暴力事件などに触れているが省略：敏翁）』　チノッティ

何の為か知らないが工事中で絵画の周りに木の枠が付けられていて、又その工事の為か画は強い照明に煌煌と照らされていた。

右翼廊端は、聖アウグスティン（イタリア語でサンタゴスティーノ）礼拝堂になっており、祭壇画はグエルチーノ（1591-1666）、両脇の画はランフランコ（1582-1647）によるものである。
又、左側３番目の柱には、ラファエロによるフレスコ「予言者イザヤ」がある。

この教会は､小さいが奇麗なカラー印刷の解説パンフレット（２０００リラ？）が用意されていて鑑賞に便利になっていた。

教会を出て、南に戻り【サン・ルイジ・デイ・フランチェージ教会】に向かった。
そこには、カラヴァッジョの画が３枚あり、この第１３報には収まりそうもないので、本報はここで終了とする。

第十四報（#16089）

１２．７サン・ルイジ・デイ・フランチェージ教会

この教会の､左側一番奥にあるコンタレッリ礼拝堂にあるカラヴァッジョの３枚の画（厳密に言うとその内初めの２枚）が、カラヴァッジョのローマにおける大成功の出発点であった。
以下チノッティ「カラヴァッジオ」からの抜粋引用になるが、これらの重要な作品についての解説は、かなりの長文であるので、勝手に思いきった省略を行った。省略し過ぎて、分かり難い点があればそれは勿論敏翁の責任である。

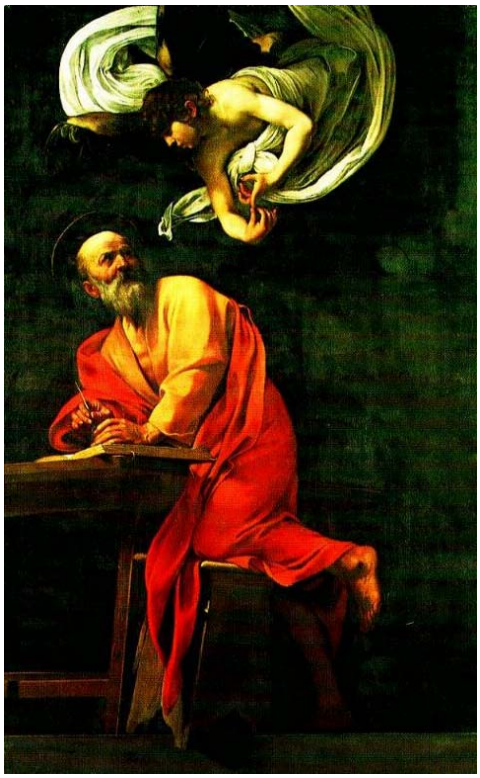
『カラヴァッジオとデル・モンテ枢機卿の関係がもたらした最も重要な成果は、枢機卿の計らいによって１５９９年に委嘱されたサン・ルイジ・デイ・フランチェージ聖堂コンタレッリ礼拝堂の二点の大作、**《聖マタイの召命》**と**《聖マタイの殉教》**であった。
枢機卿はサン・ピェトロ大聖堂造営局の一員であり、教皇は１５９７年の７月、この礼拝堂の装飾の完成をめぐって遺言執行人であったクレシェンツィ家との間で長年紛糾が続いていたマッテオ・コンタレッリの遺産を、この造営局に移管したからである。このときの造営局の代表はベルリンゲリオ神父であり、彼が１５９９年7月２３日に、仕事の遅延していたカヴァリエーレ・ダルピーノにかわってカラヴァッジオに二点の作品の制作を依頼したのである。
礼拝堂はすでに一般に公開されていたが（１５９９年5月１日）、ダルピーノはその天井（１５９３年完成）を装飾しただけであった。（中略）
X線調査の結果、最初に描かれたのは《聖マタイの殉教》（323 x 343cm）であることが明らかになっている。
この作品は、多数の人物を描いたカラヴァッジオの最初の公的作品であるが、X線調査が明らかにしたように、最終的な画面の下には、部分的な二つの構図が見出される。
ここにはエチオピア王エギッポスとその後継者ヒルタコス、そしてマタイの物語が描かれている。マタイは、ヒルタコスが貞潔の誓いを立てていた亡き王の娘エピゲネイアを妃とすることに反対したため､ヒルタコスの命令によって殺害されてしまう。（中略）
激しい動勢に富んだ構図は、テイントレツト、ミケランジェロ、ペテルッァーノ、バロッチなどの作品を想い起こさせる。これらの画家たちの構想は、彼が初めて大構図に立ち向かうときに、デッラックアが「聖なるカタストロフィー」と呼んだ独自の構想を形成するうえで刺激剤となったにちがいない。　カルヴェージは、この礼拝堂の装飾全体に救済のテーマを認め、このテーマとの関連で「マタイの殉教」を「キリストの犠牲」の寓意と見なしている。
また同じくカルヴェージによれば、同聖堂の他の「殉教図」と同様に、図像表現はバロニオ枢機卿によって示唆されたものと思われ、彼とフェデリコ・ボッロメーオの思想が近いことを考えれば、後者によって示唆された可能性もある。（中略）
《聖マタイの殉教》（次頁左図）は、現実の人生の研究に基づきながらいかにして物語画を構成するかという新しい問題に解答を与えると同時に、物語の儀式的な意味を表すことに成功している。この儀式的意味は、殺害者とマタイの人間像の関係に凝縮されており、マタイは、身を守ろうとして広げた腕に、祭壇上で今しがた行われた儀式の身振りを反響させているのである。
幾つもの制作「段階」が物語るこの仕事の困難さを考えると、画家はある時点で《聖マタイの殉教》の制作を中断して《聖マタイの召命》（322 x 340cm）に移り、それを完成した後で、再び《聖マタイの殉教》を再開し完成させた、と考えられなくもない。
《聖マタイの召命》（次頁右図）にも、《聖マタイの殉教》におけるほど著しくはないが、描き直しの跡がみられる。それは制作過程の第二段階で描き加えられた聖ペテロの像で、キリストの姿を部分的に隠している。
テーマは聖書に則ったもので、弟子たちと道を歩いていたキリストが、収税所で働いていたアルパヨの子レビと呼ばれるマ

タイを使徒として召すところである。しかし、この場面が聖書の記述のように屋外で起こっているのか、あるいは屋内で起こっているのかは分からない。

いずれにせよ、主題表現は伝統から全く外れたものである。陰と光が細部をくっきりと浮かび上がらせている構図においては、左側のリアリスティックな取税人たちの群像と、高い精神性をそなえたキリストと聖ペテロとが対比的に表されている。

この作品には、ある意味で彼の初期の作品とつながるジョルジョーネ風の要素が指摘されているが、それに関連して、フェデリコ・ツッカリが述べた「私がこの絵に見出すのはジョルジョーネの着想以外の何ものでもない」という言葉が想起される。しかしベッローリは、この作品に、初期のジョルジョーネ風の「ほどよい陰影」から、「肉体に立体感を与えるために黒を多く使うことによって、強烈な陰影を強調した」新しい様式への展開を見出している。（中略）

作品の構図にはまだ初期の特徴の名残りが見られ、灯台の光のように右側から射し込む円錐状の光の処理は熟考のあとを留めている。しかし、この絵の斬新な点は、形体・意味、色彩・光の総合にこそあり、実際、当時の人びとにもそのように受け取られたのである。



コンタレッリ礼拝堂の作品は、最終的な支払い（１６００年７月４日）より前に一般に公開されたが、この作品によって、カラヴァッジオの名声は一挙に高まり、教会関係者や顧客の注目を引きつけた。サン・ルイジ・デイ・フランチェージ聖堂のコンタレッリ礼拝堂において、カラヴァッジオは教会芸術の概念を根底から覆した。彼は、大型の油彩画がフレスコ壁画に取って代わりうること、伝説化された宗教的人物でも人間的かつ直接的に把握することができること、また光と陰影の演出によって彼らの悲劇を掘り起こし、宗教的な意味を高めることができることを、はっきり示したのである。』

『ところで、コンタレッリ礼拝堂の仕事はまだ完成したわけではなかった。コバールトが制作した祭壇彫刻は、遺言者の甥でこの教会堂の司祭のひとりであったフランチェスコ・コンタレッリの気に入らなかったため、その代替作品として、１６０２年２月７日、カラヴァッジオに祭壇画《聖マタイと天使》を注文したのである。

祭壇画の支払いは１６０２年９月２２日になされたが、しかしこれは、５月２６日の五旬節に引き渡されたと推測される第一作とは別の作品であった。
第一作は気に入られず、拒否されてしまったからである。
カラヴァッジオはしたがって、８か月のうちに、二点の祭壇画を描かなければ

ならなかったことになる。
　最初の《聖マタイと天使》は、ジュスティニアーニ侯爵に引き取られ、ベルリンで戦災に遭って破壊されてしまった。（この作品の説明省略：敏翁）
　１６０２年に制作された《聖マタイと天使》（前頁図）（295 x 195cm）の第二作は、第一作とはまったく異なり、マントをはおった伝統的な容貌の聖人と、天から舞い降りる天使が描かれている。同じ主題の改作を課せられたカラヴァッジオは、構想を根底から変えてしまうほかなかった。（中略）
　この第二作では、聖マタイは礼拝堂の両側壁の作品中の聖人のタイプと照応している。この祭壇画については、その順応主義に対する批判がある一方で、ラファエッロを想わせるそのきわめて知的な主題解釈が称讃を受けてきた。
この作品では、厳粛で堂々とした人物表現と、熱気に満ちた揺れ動く絵画的形体表現が融合している。』

　ここは参観者が多い。礼拝堂は暗く、照明はコインを入れると出来るシステムになっているのだが、５００リラ・コインを入れても短時間で照明が切れてしまうのであった。しかし照明のおかげでかなり良い写真が撮れた。

『コンタレッリ礼拝堂とチェラージ礼拝堂の仕事によって大金を得た１６００－０１年のカラヴァッジオは、カレル・ファン・マンデルによれば「彼は２週間ほど働くと、脇に大きな剣をさし、従者を従えて、１，２か月ぶらぶら遊びまわり、球遊びなどに興じ、いつも決闘や乱闘騒ぎを起こしていた」。
　読者は、粋な銃士の姿を想像すべきではない。ベッローリがバリオーネの冊子の欄外の書き込みで述べ、ジュリオ・チエーザレ・ジーリが１６１５年に出版された詩に書いているように、カラヴァッジオは小柄な醜男で、「落ち窪んだ」目をもち、蒼白い顔のまわりにぼさぼさの黒い髪の毛をたらしていた。』

　この他、聖セシリア礼拝堂にドメニキーノによるフレスコがあるのだが、ここは更に暗く、照明用のコインが切れてしまったので、画も良く見えず、写真も撮れなかった。（フラッシュを使う訳には行かない）

　教会を出、ここから近いパンテオンを眺め、その近くの【サンティニアツィオ教会】に行ってみた。バロックの典型的な天井画を見たかったのだが、大修理中で見られなかった。

　次にこれもそこから近いサンタ・マリア・ソプラ・ミネルバ教会に行った。
　ここは、解説用小冊子を売っているので（値段失念、多分７０００リラ？）それを求めて、それを参考に参観をした。
　ここにも美術的に価値のあるものが多い。
　ミケランジェロの「十字架を持つキリスト」像、フィリッピーノ・リッピの「受胎告知」、アントニアゾ・ロマーノの「受胎告知」と「十字架のキリスト」、フラ・アンジェリコの「聖母子像」などである。

　次に、ヴィットリオ・エマヌエーレ２世通りに戻り、ジェズ教会に立ち寄ってみた。

　ここは昨年も訪れたのだが、工事中で、ここのバロック天井画も有名なのだが、見られなかったからである。
　しかし工事が昨年より更に大規模になり、昨年は、少し見えた天井画が全く見えなくなってしまつていたのにがっかりした。

　近くのカフェテリアでランチをとり、ホテルに戻った。

　カラヴァッジョ関係を整理し、チノッティの本についているリストとボンサンティの本の比較表を作ってみたりした。
　その結果、明日行く予定のバルベリーニ国立絵画館のほか、その傍のいわゆる「骸骨寺」にもカラヴァッジョがある可能性がある事が分かった。
　チノッティには出て居るのだが、ミシュラン・グ

リーンには記述が無いのである。
　ここも明日行って見て調査する事にした。

　昼寝で一休みしたら、大分疲労が溜まってきているのだろう。午後５時頃まで熟睡してしまった。

　夕食は、スペイン広場近くの「マリオ」に行ってみた。ここは「個人旅行」に出て居る店で、ミシュラン・レッドでは２フォークが与えられている。
　アンティパストは野菜の煮たもの（冷たい）、セコンドはウサギのシチュウ風、それとアップルパイ、赤ワイン（キャンティ・クラシコ）と水で６万リラ。私の頼んだものは、店のお勧め品だったが、後で考えてみると全て作ってあったものを皿に盛って持ってきただけの量産効果の上がるものばかりだった。
　料理は良く煮込んであり、味は良いのだが、柔らかすぎ、オリジナルではあるが、少し物足りない感じがした。
　帰りにスペイン広場（前頁図）の階段に座って雰囲気を楽しんだが、暗くなってもここは若者で一杯だった。
　ここの噴水（船をかたどった「バルカッチャの噴水」）も工事中だった。

【６月５日（土）】

　昨日昼寝をし過ぎたせいか、午前２時半に目が覚めそのまま眠れなかった。今日のスケジュールなどを考えたりして、時々２時半、４時半、６時半、８時半と断続的に通信を試みたが、いずれも回線が繋がらなかった。
　土曜日なので、特に回線が混雑しているらしい。

　ローマでは大分のんびりしたが、いよいよ今日が実質上最後の日である。
　今日は、歩いて先ずサンタ・マリア・デッラ・ヴィットリア教会に行き、そこからクアットロ・フォンターネに行き、そこから坂を下ってバルベリーニ国立絵画館に行き、最後にサンタ・マリア・デッラ・コンチェツィオーネ教会（所謂骸骨寺）を訪れるという計画を立てた。
　上り坂が無くて歩きやすいこのルートを発見（？）して張り切って出発したのである。土曜の朝早いので表通りにも殆ど人影は無かった。
　共和国広場を通り過ぎたあたりまで行った時、子供を抱いたジプシー（？）の女が、私のそばに寄ってきて物乞いを始めた。それを振り払おうとするのだが、執拗に私の前に身体を寄せてくる。そしてそれに気が取られていたら、連れの少年が私の右から私のポシェットに手を掛け、チャックを開けようとしていた。
　思わず、大声で怒鳴りつけ（日本語だったが、剣幕だけは分かっただろう）たが、女も少年もなんとも言えない表情で私をにらんでいた。
　危ないところだったが、損害はなかった。しかしこれが女性の独り旅だったり、又は私の体力が著しく減退していたら危ない状況になったかもしれない。これが、今年のイタリア旅行のたった一つの危ない場面だった。

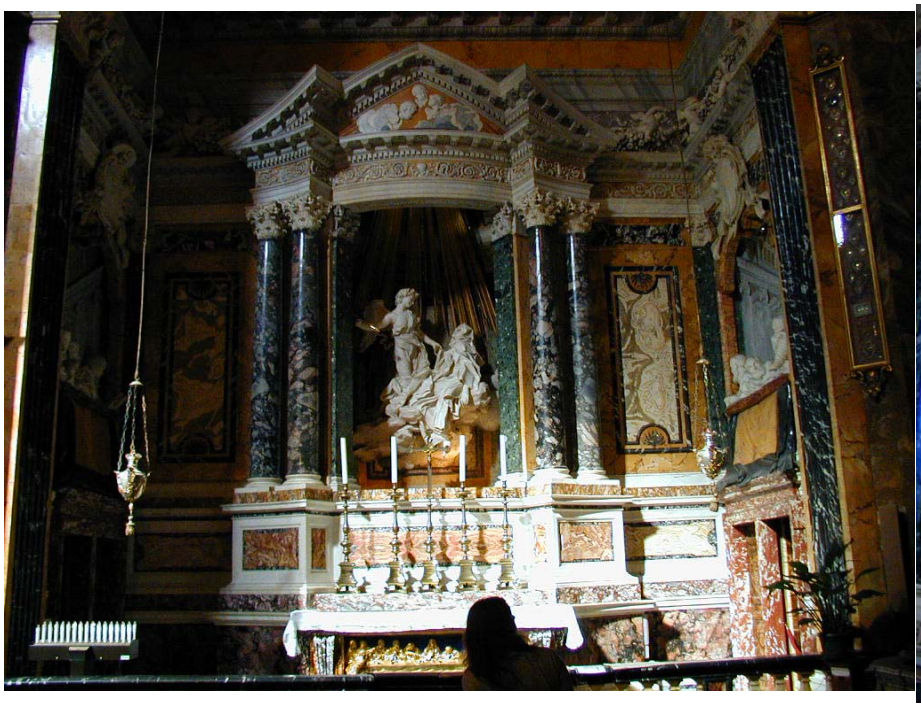
１２．８サンタ・スザンナ教会

そこから**サン・ベルナルド広場**はすぐである。
　広場の向かいに**【サンタ・スザンナ教会】**がある。
　ファサード(次頁左図)は対抗宗教改革様式の典型であり、見事なものである。（Carlo Maderno(1556-1629) により設計され 1603 年に完成した）
この教会はそれほど有名ではないが、折角なので入ってみた。
　Ａ４一枚の説明書が置いてあり、その英語版を頂き（千リラ奉納）それを頼りに参観した。
　ここは、マニエリスム装飾の典型とされているようである。

　内陣(次頁右図)には、中央にトマソ・ロウレツティ（1530-1602）による「**聖女スザンナの殉教**」、両サイドに、パリス・ノガリ（1558-1628）によるスザンナの歴史が描かれている。

１２．９サンタ・マリア・デッラ・ヴィットリア教会

この教会と道を隔てて、**【サンタ・マリア・デッラ・ヴィットリア教会】**がある。



ここは、昨年も来たところで、ベルニーニの**「聖女テレサの法悦」（上左図）**はあまりにも有名だ。
私は今年(1999 年)の年賀状にこの画像を使った。

ここのコルナーロ礼拝堂（左翼廊）の前に佇んで暫くベルニーニの芸術を鑑賞した。
（ここの説明は、昨年の旅行記にあるので省略）
右翼廊にも良く似た像、即ち上から降り注ぐ光、天使の前の人物（ただし男）というものがあるのだが、これは、説明が無いので人物も作者も分からない。(前頁右図)

この教会と、サンタ・スザンナ教会の前を通っている「9月20日通り」を暫く歩くと、クアットロ・フォンターネの交差点である。
昨年、２度も来たのだが、いつも閉まっていた【サン・カルロ・アッレ・クアットロ・フォンターネ聖堂】に寄ってみたが、今回も閉まっていた。
テルミニ駅の<i>で聞いた時は、開いている筈だという事だったのだが。
今年も、バロックのもう一人の雄ボッロミーニに嫌われてしまった。

１２．１０国立絵画館

ここからクアットロ・フォンターネ通りの坂を下れば、【バルベリーニ宮】は近い。
その中の【国立絵画館】の入り口は分かり難い。　（バルベリーニ通りからの方が分かりやすい）
切符売り場に行ってみると、ここにあるカラヴァッジョの「ホロフェルネスの首を斬るユディット」を大きく表示したポスターが飾ってあって、その上にカラヴァッジョ展は終了、カラヴァッジョの画は無いと貼ってあった。
ここで、５月一杯（？）カラヴァッジョ展があり、それは完了した事を示していたのだ。彼の画はどうなっているのか尋ねると、パドヴァに行っている、そこで今カラヴァッジョ展が開かれていて、そこに行っているのだとの事だった。
ここには、上記の作品（1599年初め）と「ナルキッソス」（1598年、ないし1598年　チノッティの本には誤りがあり、コルシーニ宮となっている）がある。　又チノッティのリストによると、カルビネート・ロマーノ（ローマの近郊）にある「瞑想する聖フランチェスコ」もここに寄託されているらしい。
尚、この画については、次報の「骸骨寺」のところで更に触れる事にしたい。

私は、これらの中で先ず、「ホロフェルネスの首を斬るユディット」（左図）が見たかった。
この画が、アルテミジャ・ジェンティレスキの同題の２枚の画（ウフィッツィとカポディモンテ）に繋がって行ったと思うからである。

これでパドヴァには、ローマからはここの２（３？）枚、コルシーニの２枚、あと多分カピトリーノの２（？）枚が行っているのだと思う。
時間の余裕があれば行きたいのだが、残念ながらその余裕はない。
パドヴァのカラヴァッジョ展の内容をご存知の方がありましたら、参考までに教えて下さい。
又、何故パドヴァなのかと言う点も分かりましたらそれもお願いします。

田中英道「イタリア美術史」の第６章　「クアトロチェント（１５世紀）北イタリア絵画」の中に次のような文がある。
『このクリヴェルリがマンテーニャやベルリーニと、共通なものがあるとすれば、地上的な「もの」の表現に重きをおくアリストテレス的な傾向といえるかもしれない。この北イタリアの作家たちは、フィレンツェ作家の、人物そのものの精神性に重きをもつ、ネオ・プラトニスム的な傾向と異なっているのである。パトヴァ大学を中心とするこうした思想傾向は、北イタリアの画家の思想に少なからず影響を与えたのであろう。人間より「もの」を重視すれば、それ自身に精神性を与えざるをえない。』
この北イタリア芸術の思想的中心であったパドヴァに、その流れの最も偉大な結実の一つであるカラヴァッジョの絵画を呼び寄せたのではないかと勝手に想像してみたのであるが。

がっかりしたが、気を取り直して一応入ってみる事にした。

勿論、ここにも有名な画が沢山ある。人気が高く、偶々居合わせた日本人観光客からその場所を尋ねられたりしたのがラファエロの「フォルナリーナ」である。

この画は彼の死の年に彼の恋人を描いたものと言われているが、作者については議論の多い作品らしい。ミシュラン・グリーンでは、セバスティアーノ・デル・ピオンボの作としている。

フォルナリーナをモデルにしたといわれる画には、他にフィレンツェのパラティーナ宮にある「小椅子の聖母」があり、この画も人気が高い。

又、同じくパラティーナ宮にある「ヴェールの女」のモデルがフォルナリーナだと言う説もあるそうである。

国立絵画館を出るとすぐ、バルベリーニ広場である。

第十五報（#16096）

１２．１１サンタ・マリア・デッラ・コンチェツィオーネ教会(骸骨寺)

バルベリーニ広場の中央にある「トリトーネの噴水」も水を噴き上げていなかったが、サンタ・マリア・デッラ・コンチェツィオーネ教会（所謂骸骨寺）の手前にある**【蜂の噴水】（左図）**は水が流れていて観光客が流れ出す水に口をつけて飲んだり、水筒に入れたりしていた。

骸骨寺の教会に入ってみたが、どこにもカラヴァッジョはその影も無く、坊さんが一人居たのだが、英語が全然駄目で取り付くしまが無い。

ふと教会の入り口の扉に、この教会についての概要を記したパネルが貼ってあるのに気が付いた。

教会のレイアウトの図と、各場所にある美術作品などが記されたものである。

それを見ていくと、「聖具室」の説明文が墨で塗られて消してあるのだが、良く見るとかすかに「カラヴァッジョ云々」と読めるのである。

多分少し前迄はここの聖具室にカラヴァッジョの作品があったのだが、盗難か何かで無くなってしまったのだろうと推定した。

ここに「瞑想する聖フランチェスコ」（1603 年頃）があると記載しているチノッティの本の原作は、１９９１年発行であり（日本語版は１９９３年発行）、その中に、１９８５年にナポリで開かれたカラヴァッジョ展にこの画及びそっくりな同題のカルビネート・ロマーノ（ローマの近郊）にある画が展示されたと記されている。

それから考えると多分１９９０年頃まではここにあったのではなかろうか。

ここの画及びロマーノの画の真偽については多くの議論があるらしい。

チノッティは、ここのが真作で、ロマーノのが模作としている。

ボンサンティの本では、両方とも取り上げていないが、本の最後についている「補遺」の中に『・・・カルビネート・ロマーノとローマのカプチン修道会にある二つの《聖フランチェスコ》のようないまだに議論されているような作品は、本書の手に余る問題である』とある。

となると、国立絵画館で、そっくりなロマーノの画が見られたかも知れないと思われ、その事が今更のように残念に思われてくる。

ここの有名な**地下納骨堂(左図)**にも入ってみた。

入り口で解説の小冊子を売っているので、それを求め（７０００リラ）た。

そこの受付の僧は、片言の日本語を話し、seven thousands ちょっと置いてナナ と言うのだ。７００や７万の筈はないのだから　ナナ　だけで分かると思っているのだろうか。

この小冊子を後でゆっくり読んで見ると、ここの骸骨群による美的（?）表現は、ここを所有しているカプチン修道会の思想と関係があるというわけではなさそうである。

何故骸骨かについては小冊子にいくつかの説が紹介されているが、いずれも変わった人物が居て始めた事を示しているようだ。

例えば、一人の法を逃れていた芸術家が、ここの修道会に避難所を探し、彼の罪を贖うために長い時間をかけてこれらの死の部屋を飾ったと言う話が紹介されている。

尚、この小冊子には「カプチン修道士とは誰か」と言う１ページの文がついていて、彼らは、１５２５年に聖フランチェスコの精神と教えを忠実に実行する目的で他のフランチェスコ修道会から分離した人達らしい。

彼らは、頭巾を被って寒さをしのぎ、それがカプチンの語源となっているらしく、髭を生やしているのが常らしく、そう言えば入り口の僧も頭巾のついた僧衣を纏い髭を生やしていた。

イタリア語で cappuchino がカプチン修道士なのだが、この語はコーヒーの「カップチーノ」と同じである。どんな関係があるのだろうか。

それで、カラヴァッジョの画「瞑想する聖フランチェスコ」がここにある意味も分かった。

バルベリーニ駅から地下鉄でホテルに戻り一休みする。

１２．１２スペイン広場周辺

夕方、再び地下鉄でスパーニャまで行き、スペイン広場の周辺を散歩した。(前頁左図はスペイン広場の向かいにあるファッション店)

広場は観光客でいっぱいであった。
先ず、コンドッティ通りをぶらついた。(前頁上右図はコンドッティ通りからスペイン広場方向を見る)
道の両側に有名なブティック、私でも名前は知っている「エルメス」、「フェラガモ」、「カルティエ」、「ヴェルサーチ」・・・が軒を連ね、道路は若者で溢れていた。
娘達に何かお土産と思ったが、商品知識がなくて諦めた。
次に、バブィーノ通りと、その裏にあるマルグータ通りに、父へのお土産になりそうな画を探したが、手ごろで良さそうな画にはお目にかからなかった。
他の観光地では、それらしい画を入手した事も多いのだが、探す場所が悪かったのかも知れない。
思い出すのは、サン・フランシスコのフィッシャーマン・ワーフの近くの店で求めた、ケーブルカーの画（終点で回転して方向を変えているところ）、バルセロナの土曜市で求めた「サンタ・マリア・デル・マル教会界隈」の画などであるが、そういう趣のある絵が見当たらないのだ。

暗くなるのを待って、今年のイタリア最後の夕食を日本料理の店「浜清」にした。ここは昨日行った「マリオ」から近い。「浜清」は大きな店で、料理も良かったが、ここは商売が上手だ。隣に女将がやっているという土産物店を見るだけでもと誘われ、結局娘達と女房へのお土産を買わされてしまった。

これで今年のイタリア旅行は無事完了した。
あとは、明日ローマ空港から帰国するだけである。

【６月６日（日）】

午前２時に目が覚め、通信に成功した。
最後の nifty 本会議室への発言を急いで作成アップ（#15368）。

＞　ローマから（カラヴァッジョ情報）
＞ローマ滞在も終わり、本日アリタリアで帰国します。
＞カラヴァッジョ関係だけ取りまとめて簡単に報告します。

・・・
（以下略）

これで一眠りしたら、寝過ぎてしまって目が覚めたのが、８時になってしまっていた。
大慌てで支度をして、朝飯も食べずに、タクシーを呼んで空港へ急いだ。

今年もいろいろあったが、イタリアの多くの人々の親切に支えられてどうやら無事に旅が完了できる事を感謝したい。

１２．１３カラヴァッジスティ

空港の売店を眺めていたら、アルテミジャ・ジェンティレスキの「ホロフェルネスの首を斬るユディット」（左図）(註)● の刺激的な絵が表

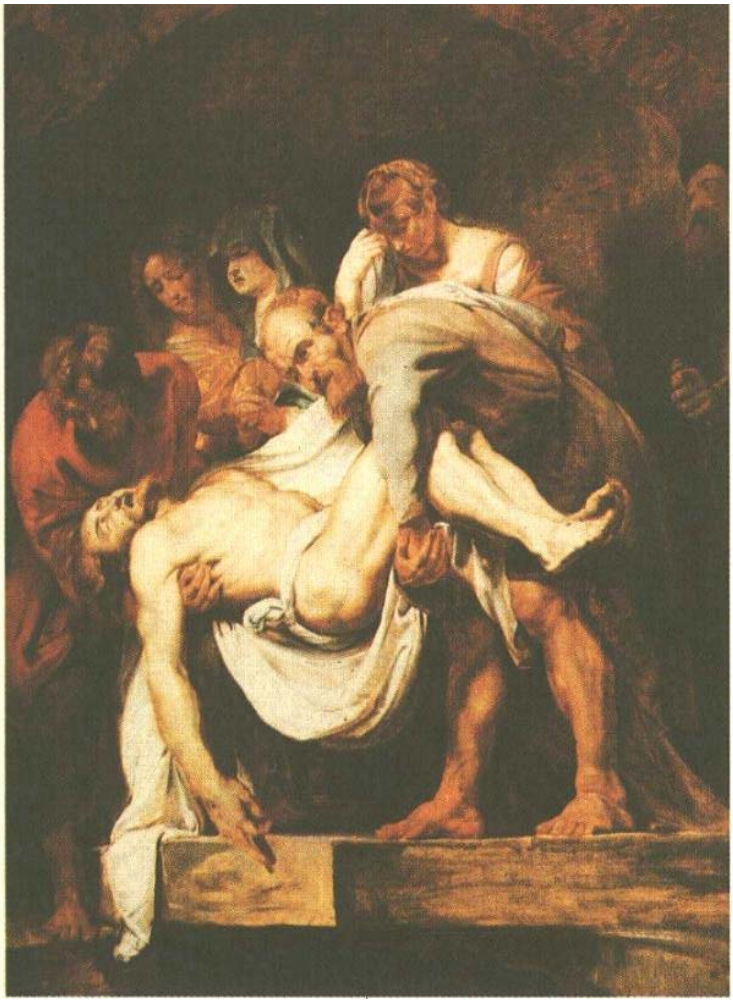
紙になっている薄い本（大きさはほぼＡ４）を見つけた。

註）● この画は、ウフィッツィ美術館にあるもの。構図はナポリのカポディモンテにある作品と殆ど同じである。

"Caravaggisti" （カラヴァッジョ派の画家たち）という題の本
Alfred Moir etal "Caravaggisti" Dossier 1996(?)
で、５０ページしかなく、又イタリア語版しかなかったが、購入した。
たった６０００リラ（約４５０円）にしてはカラー印刷もまあまあで良く出来た本である。
この様な本を土産にするとはさすがはローマだと大いに感心した。
この本をイタリア語は殆ど分からぬながら辞書をひきひき眺めながら帰国の途中のかなりの時間を費やし、勉強になったし、退屈しのぎにもなった。

この本の内容を簡単に紹介する。
この本がカラヴァッジスティとしている画家たちとしては、次の画家を揚げ簡単に紹介している。アルファベット順に名前だけあげると次のような画家たちである。
☆★Borgianni, ☆★Caracciolo, ☆★Cavallino, ☆De La Tour, Finson, Fracanzano, ☆★Artemisia Gentileschi, ☆★Orazio Gentileschi, ☆Le Nain, ☆Manfredi, Nanzoni, ☆Mayno, ☆Ribelta, ☆★Ribera, ☆★Saraceni, ☆Seghers, Serodine, ☆Stanzione, Stomer, ☆Ter Brugghen, ☆Valentin, ☆★Van Honthorst, ☆Vouet, ☆★Zurbaran

以上で頭に☆がついた画家の作品（一人の作家で複数の画が紹介されているのも多い）がカラーで紹介されている。
又★がついた画家の画（本書に載っている）は、私が見た（主に今年だがそれ以外も含める）画である。但し、今となっては見た筈なのだが、記憶の定かでないものもある。



カラヴァッジスティとするには、あまりにも大家なので以上に載っていないが、カラヴァッジョから影響を受けた画家として Rubens と Velazques の絵も紹介されている。

ルーベンスの「十字架降架」(前頁左図)（1611-1612 オタワ　カナダ国立絵画館）などは、カラヴァッジョの「キリストの埋葬」(前頁右図)（ヴァティカン絵画館）にそっくりである。

又ヴェラスケスの「バッコスの勝利」（1628-1629 マドリッド　プラド美術館）は、カラヴァッジョの「バッコス」（ウフイツィ美術館）の影響が良く分かる。

この本の最後にかなり詳しい年表（1550～1677）がついている。上に記した画家たちの生没年なども載っているのだが、ここではカラヴァッジョ、ジェンテレスキー父娘、ルーベンス、ヴェラスケス関連に絞って抜粋してみる。

1550　Orazio Gentileschi 誕生
1571　Caravaggio　誕生
1592　Caravaggio　ﾛﾝﾊﾞﾙﾃﾞｨｱの修行時代を追え、ﾛｰﾏに移住する。
1599　Velazques　誕生。　Caravaggio　San Luigi d. Francesi の仕事開始
1605　Borgianni　ｽﾍﾟｲﾝに Caravaggio の表現を導入する
1606　Caravaggio　ﾛｰﾏ逃亡
1610　Caravaggio　Porto Elcole で死亡。 この頃、Rubens　Caravaggio 様式を試みるがまもなく止める。
1629　Velazques　第一回目のｲﾀﾘｱ旅行。一年半滞在。ここで Ribera と出会う
1639　Orazio Gentileschi　死亡
1640　Rubens　死亡
1649　Velazques　第二回目のｲﾀﾘｱ旅行
1652　Artemisia Gentileschi　死亡
1660　Velazques　死亡（この表には何故か出ていない）

ＸⅢ．まとめ

終わりに今年の旅行「カラヴァッジョを訪ねて」を、その観点から表に纏めてみた。
順番は、本旅行記の順になっている。

① 今年訪問

	ｶﾗｳﾞｧｯｼﾞｮ	ﾌﾟﾚ･ｶﾗｳﾞｧｯｼﾞｮ	ｶﾗｳﾞｧｯｼﾞｽﾃｨ
【ミラノ】			
ｱﾝﾌﾞﾛｼﾞｱｰﾅ絵画館	1	○	
ﾌﾞﾚﾗ美術館	1	○	
ｻﾝﾀ･ﾏﾘｱ･ﾌﾞﾚｯｿ･ｻﾝ･ﾁｪﾙｿ教会	―	○	
【ブレシア】　ﾄｼﾞｵ･ﾏﾙﾃｨﾈﾝｺ絵画館・他	―	◎	
【ナポリ】			
ｶﾎﾟﾃﾞｨﾓﾝﾃ美術館	1		◎
ﾋﾟｵ･ﾓﾝﾃ･ﾃﾞｯﾗ･ﾐｾﾞﾘｺﾙﾃﾞｨｱ	1		◎
【メッシーナ】　州立博物館	2		◎
【シラクーザ】　州立美術館	1		◎
【ローマ】			
ﾄﾞｰﾘｱ･ﾊﾟﾝﾌｨｰﾘ美術館	2		
ｺﾙｼｰﾆ宮	（2）*		◎
ﾎﾞﾙｹﾞｰｾﾞ美術館	6		◎
ｻﾝﾀ･ﾏﾘｱ･ﾃﾞﾙ･ﾎﾟﾎﾟﾛ教会	2 **		
ｻﾝﾀｺﾞｽﾃｨｰﾉ教会	1		
ｻﾝ･ﾙｲｼﾞ･ﾃﾞｲ･ﾌﾗﾝﾁｪｰｼﾞ教会	3 **		
ﾊﾞﾙﾍﾞﾘｰﾆ宮国立絵画館	（3）*		◎

――――――――――――――――

小計　　２１（*は含まず）

② 昨年訪問

ﾊﾞﾁｶﾝ絵画館	1	
【フイレンツェ】		
ｳﾌｨﾂｨ美術館	3	○
ﾋﾟｯﾃｨ宮	2	
総計	２７（*は含まず）	

*： 訪問したが、カラヴァッジョの画はバドヴァに行っていて見られなかった。
**：昨年も訪問している。

上表で、カラヴァッジョ関係の見た作品数は正確だが、プレ・カラヴァッジョとカラヴァッジスティはそれほど正確ではない。特にプレ・カラヴァッジョは、特定の場所（ミラノとブレシア）で纏めて見られるフォッパ、モレットに絞ったので抜けがあると思う。

とにかく、今年の旅行で、カラヴァッジョの２１作品、プレ・カラヴァッジョ（これは不満足）と相当数のカラヴァッジスティの作品を見る事が出来た。

駆け足旅行としては、満足しなければならないだろう。

「カラヴァッジョを訪ねて」　　完

敏　翁